595-340
1200501527539
複写

403

漫遊文庫

世界一周

岡本一平著

昭和六年四月廿二日 帝國圖書

5-95-340

序

世界一周をせぬ前とした後とどう違ふか？

これを先づ言つてみる。第一に外人に逢つても怖毛(おぜけ)がつかなくなる。第二にこの頃では少し知識階級の集りになると中の半數は洋行の經驗のある人々である。話題は一度は洋行談に向く。兎にも角にもその話の仲間入りが出來る、第三、洋行歸りの大風呂敷にあてられなくなる。第四、西洋の事について大概たかをくゝる横着が出來た。第五、多少、人が尊敬して呉れる。第六、多少、人がハイカラに見て呉れる。第七、多少西洋文明好きになる。第八、西洋料理を非常な御馳走と思つて飛び付くさもしさが尠くなる、第九、日本内地の旅行でも成可く洋式ホテルの便利を利用するやうになる。第十、帝國ホテルをわが客間のやうな顔をして

客へ案内するやうになる。通俗方面では先づざつと、こんなものである。

若し一段深く立入つて思想上の影響を述べる事になると、これは中々一紙半紙の盡す處で無い。又この書の內容が自づと說明する事と思ふ。

こゝに人ありて世界一周はすべきものかせぬものかと聽かれたら、筆者は躊躇無く答へるであらう『一度は是非、して置く必要があるね』と。

斯くの如くして置く必要がある世界一周を筆者にさせてそして、して置く必要があると他人に明白に答へる事を得しめるやうにした人は雜誌「婦女界」社主都河龍氏である。氏に深く感謝する。

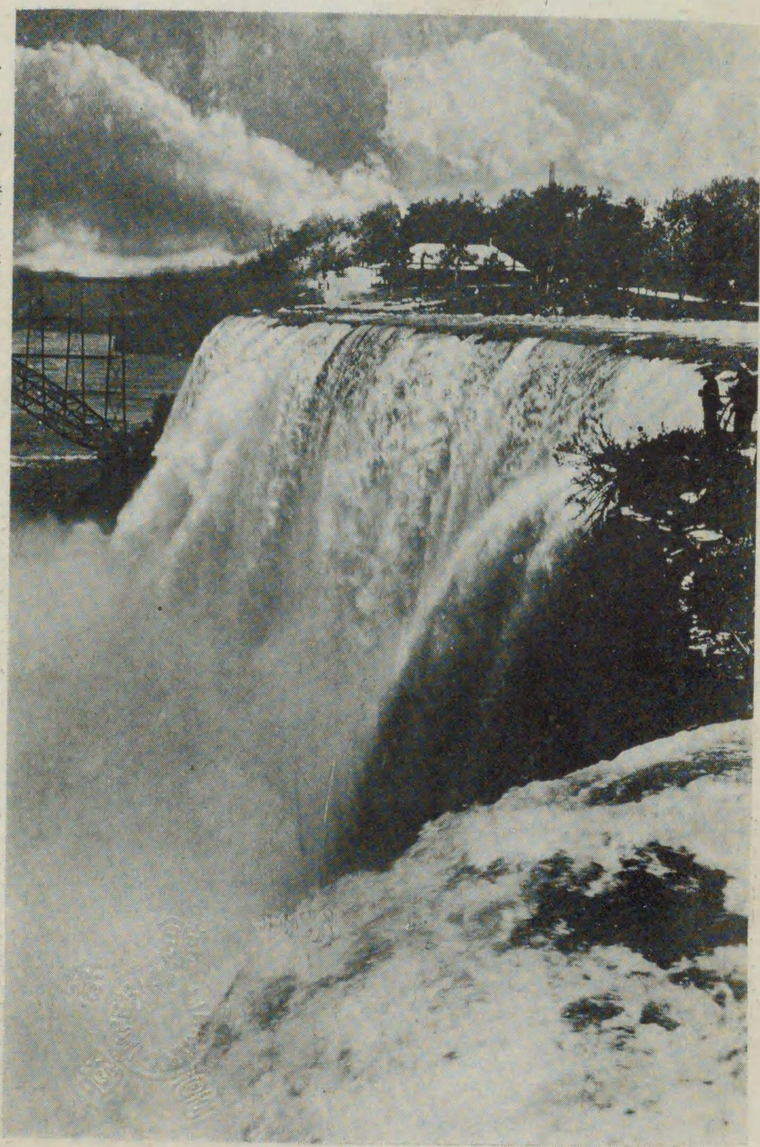
單に漫畫の一面からいつても、日本の漫畫家から世界一周者を出した事は對社會的には漫畫の威容を增し藝術的には幾分の刺激と土產を齎した事と信ずる。これ亦都河氏の力添へであらねばならぬ。

京都の縮緬屋さん事、大塚翁はこの書の內容に身を以て興味の材料を澤山供給して呉れられた人である。感謝の意を表する。若し大塚翁にしてこの行に加はらなかつたならば恐らくこの書の讀者に持つ魅力は半減せられたに違ひ無い。翁は實踐上から究明し出した人生の悟達者である。書中の記述によつて何人も翁に對し感嘆と愛好の念を生ぜぬものはあるまい。翁の言行は翁の眞擊な人生哲學の發露である。若しこれをしも奇行とのみみて翁の美質を觀過する讀者あらばそは筆者の本意でない。また筆者の記述力の足りなかつた罪である。累を大塚翁に及ぼしてはならぬ。

この機會に於て四ケ月間、歐米山水の境に寢食を共にした右の外のなつかしき

世界一周會員、東京の上遠父子、伊藤氏、神戸の新田氏、在米の都河辰夫氏、ジャパン、ツーリストビユーロウ社の渡邊氏に敬意と感謝の意を表する。同じ會員の信濃の花岡氏が歸朝後一年にして長逝せられたのは遺憾至極であつた。

一平生識



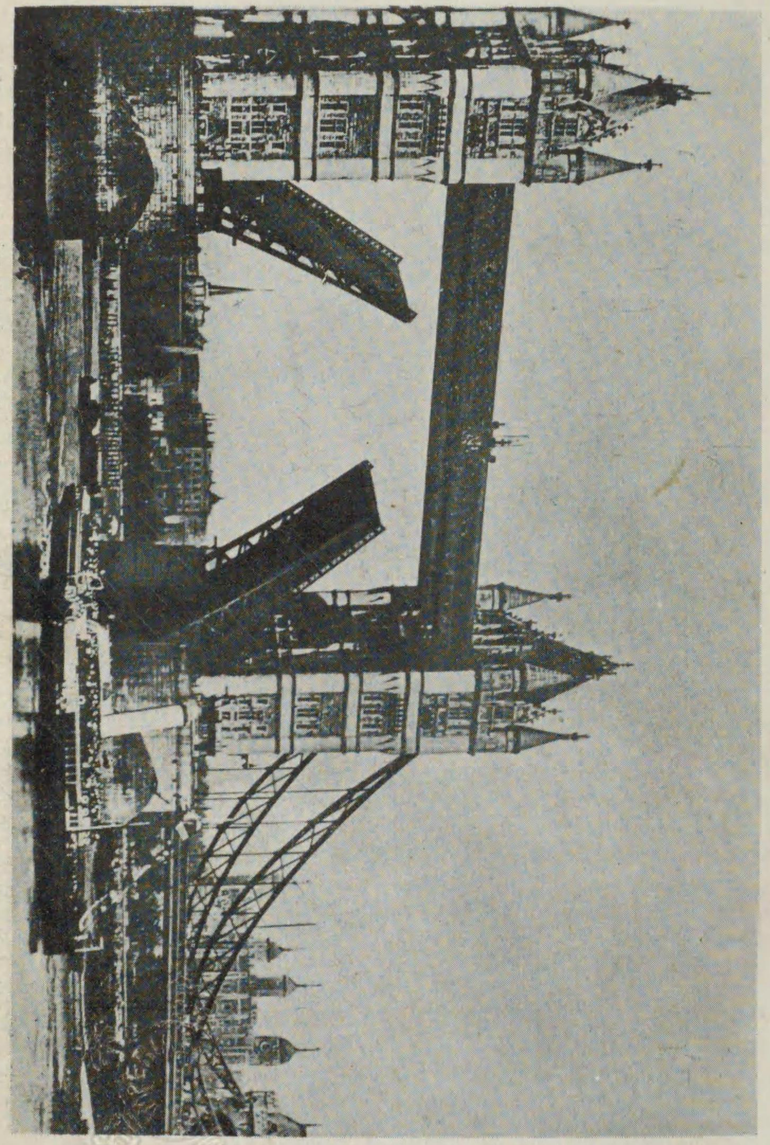
ナイヤガラ瀑布（米國）

ナイヤガラ瀑布は米國オンタリオ、エリー兩湖の間にあり、アメリカ瀑、カナダ瀑の二つに分れ、アメリカ瀑は高さ百六十七尺、巾一千六十尺、カナダ瀑は高さ百五十八尺、巾三千十尺、一見、此の世が水の世界と化したかと思はれる程恐ろしい。

ニューヨーク市街（米國）

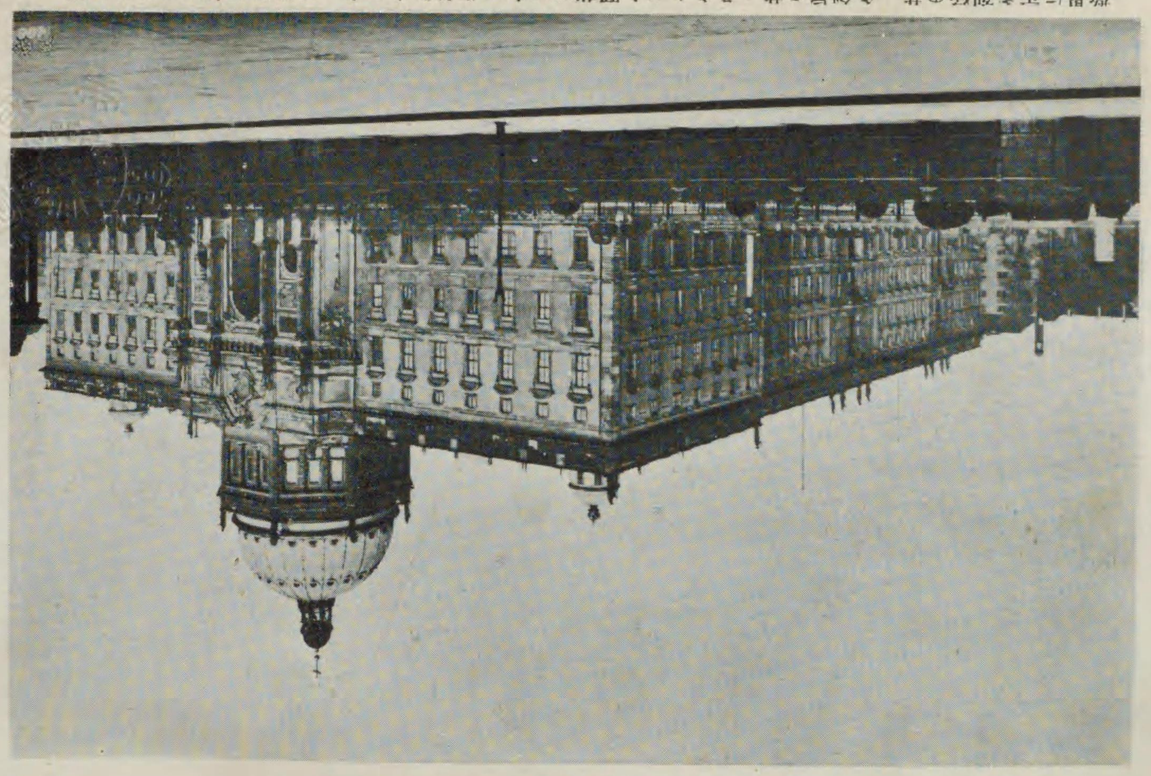
ニューヨークは人口六百萬、世界一の大都市で、ハドソン河口にあり、其の建築物が一般に高く、從つて其の空の線は米國人の誇りであり、ニューヨークの特有である。

チャツリブ・ーワタ（國英）



九八一・るあで物名的界世に共と塔ンドンロ・で橋たつ架に河スムーテく貫を中眞の街ンドンロ京英。るあでつなにけか住る上ね跳に方兩てれ切が央中の橋は時る通が船大・橋開日卅月六年四

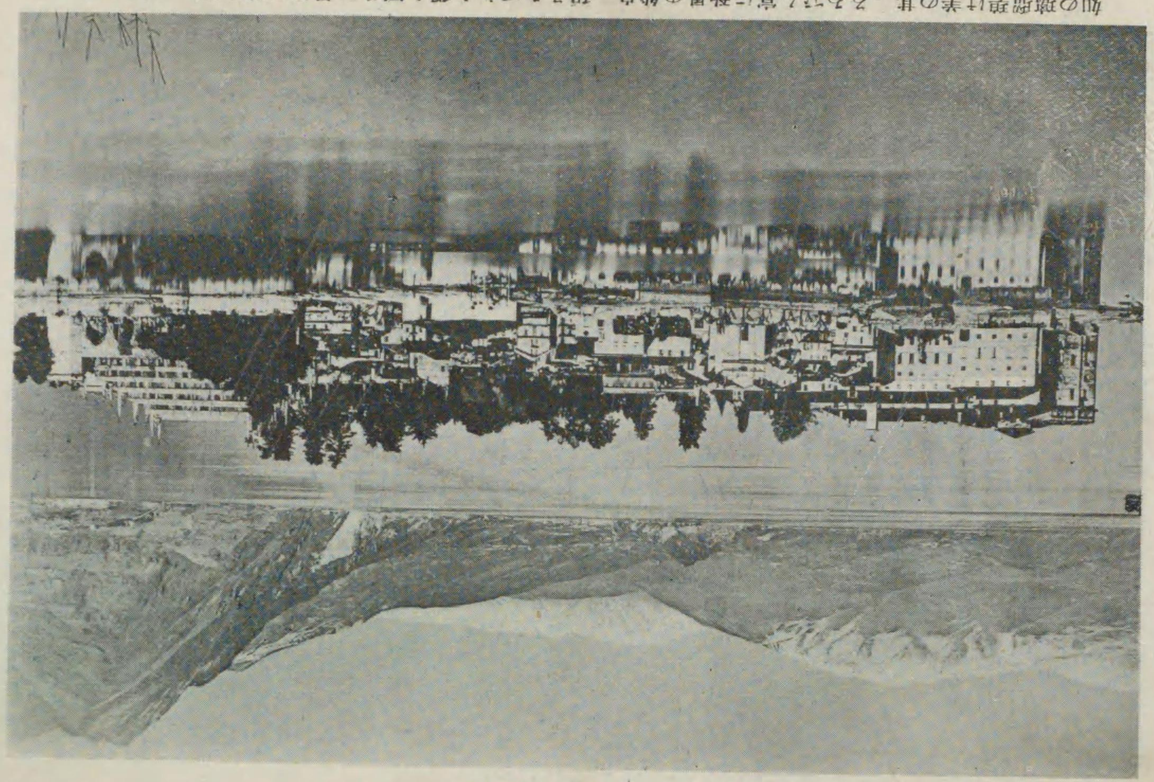
（逸獨）　蘭市ンリルベ



敬畏に正き烈猛の其．き劍眞の其．るあとしつ闘苦てつなにるどみ血や今．は逸獨興新ゞこは逸獨蒼
出が土武の馬乘り廻が形人とる來が時一十の畫は臺計時の其．で所役市のンリルベは眞寫．るす値に
。るあてつなに置裝く鳴が鶏の部上に後最．ひ戰と手相で

グランド・オペラ　（佛國）

巴里のグランド・オペラ座は國有で世界的に有名であるる．其の結構の美しさは輪奐の壯麗旅人を
時に宮殿と見紛はしめるる．入場者に對し服裝がやかましく．一週に三四日開演するる。

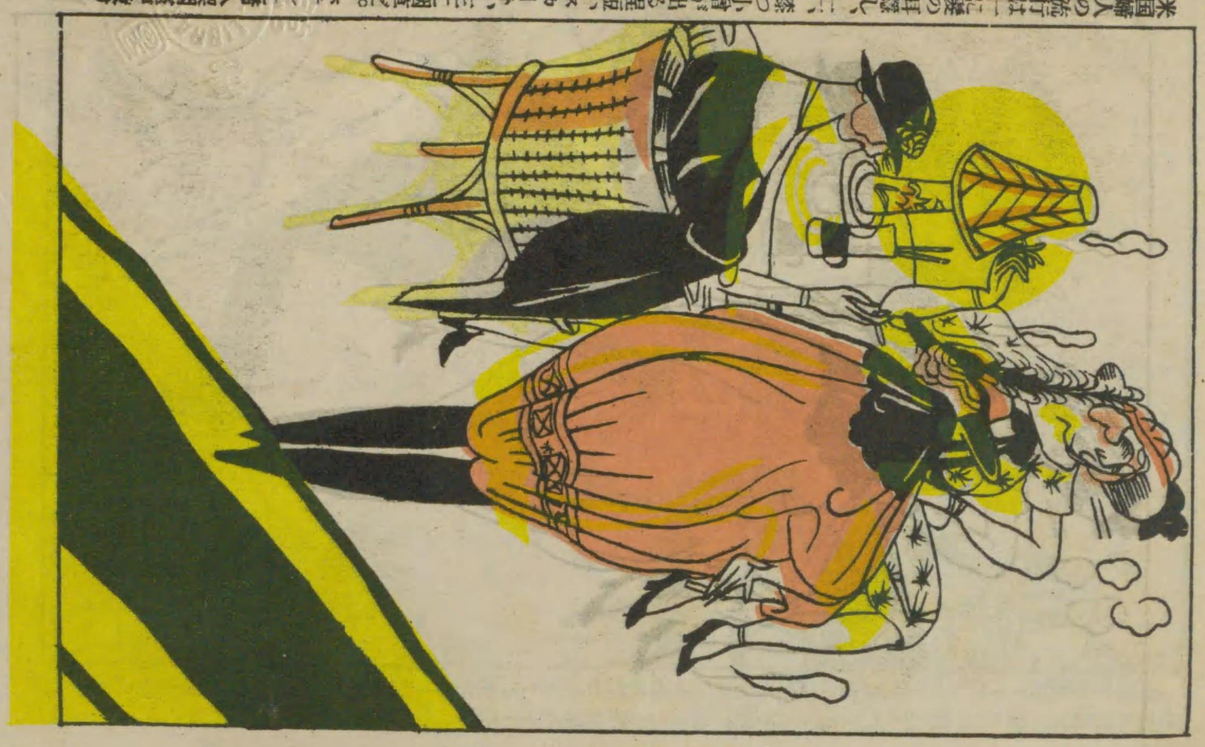


如の碧碧碧は美の美。るるでん富に致風の絶自、程るるでれさ稱と國公の界世が體全國、は國スイス
。るるでれさ徴象てっ依に雪白のスクルプ、と氷き

セントピーター寺院（伊國）

（スイス）　讃美の國スイス

セントピーター寺院は、凡そ四百年前の建設で、ローマとしては古い建物ではないが、其の構結の壯
大なる世界無比で、床の上に銅を打ち込み、何所の何寺と刻んであるは、世界の有名な寺院の長さを
それぞれ表したものであるを見ても其の大きさが知れやう。



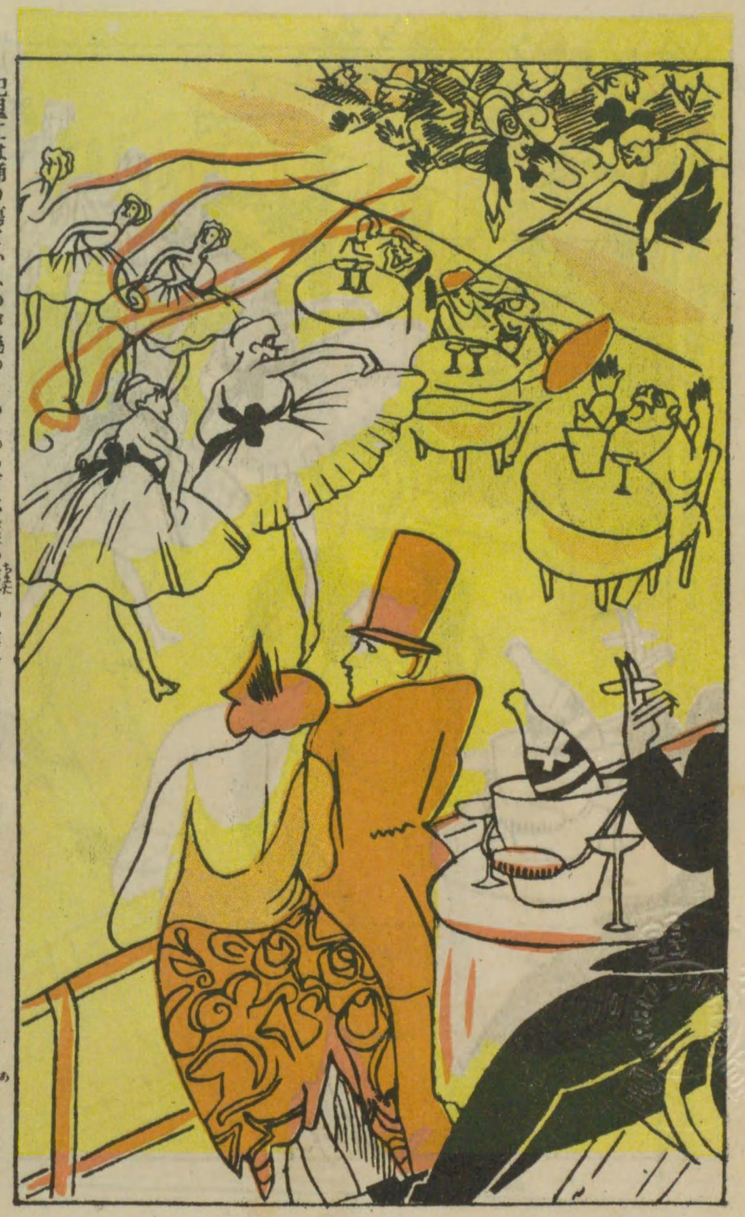
米國婦人の流行は一に髪の耳隠し、二に、膝つ小猫が出る程短いスカート、三に煙草だ。キラいに婦人喫煙室が設けられ、婦人用に寸法の紙巻いた程の可愛らしい紙巻煙草が出来てゐる。

ナイル河とピラミツト（埃及）

埃及の自然美は、ナイル河とピラミツトである。黒色の衣服を纏ふた埃及婦が、代赭色の瓶を頭に乗せて、ナイル河の水を汲みに來る情景などは言ひ知れぬ、なつかしみと落ちつきがある。

米国の音楽はヂャズバンドが風靡してる。ラッパを鼻の詰つたように吹いたり、豆太鼓、カンカラ太鼓を騒しく入れたり野蛮気がある。これにつれてダンスも捻ぢ合ふような身振りをする。

英国オクスフォードは学校町で有名。建物はゴシック式の尖塔が獣の骨のやうに立つてる。男生も女生もボロ〳〵になつたガウンを着て往来してる。ボロ〳〵ほど見栄になるらしい。



巴里には踊り場といふのが幾つもある。眞に歡楽の巷だ。場附の踊り子が白鳥のやうな形をして足を高く揚げて踊る。その暇々には周囲に飲んでる客人達が出て踊る。色紙を投げたり風船で叩いたり他愛も無い。

巴里グランドオペラは国立。劇場の内外に兵隊が番をしてる。男は燕尾服かタキシードで無ければ入れない。桟敷には裝を凝らしたレデーが油絵のやうだ。

ミュンヘンビールと名をうたはれる程あつてミュニッヒはビールの名産地、国立のビール、バーがある。古風な建物、市民みな来て四合も入る陶もの〻カップを傾けてる。味は柔かくて下戸にもうまい。

ローマは京都だ。至る処由緒ある寺。道では始終、カトリックの僧、尼僧に逢ひづめだ。古蹟の多いのは結構だが、蠅の多いと乞食の多いのには閉口、自動車をとめるとすぐ花賣娘だ。

エジプトのカイロに泊り、それからピラミッド見物に行く。沙漠に足をかけると駱駝曳きが迫り、見物人を無理に載せて仕舞ふ。あとから乞食がドッと寄せて来て『バクシーシ〳〵』をねだって遣り切れない。

漫畫漫遊 世界一周

目次

皆さん御機嫌よう……一―三

お世辭のない世界一周記……四―四〇

一、紐育ペンシルヴェニアホテルにて

二、倫敦のホテルの小机より

三、加茂丸船室にて

かの子に與ふる『世界一周』の繪手紙……四一―二七九

第一信より第二十六信まで

世界一周の對話……二八〇―四五七

第二十七信より第三十五信まで

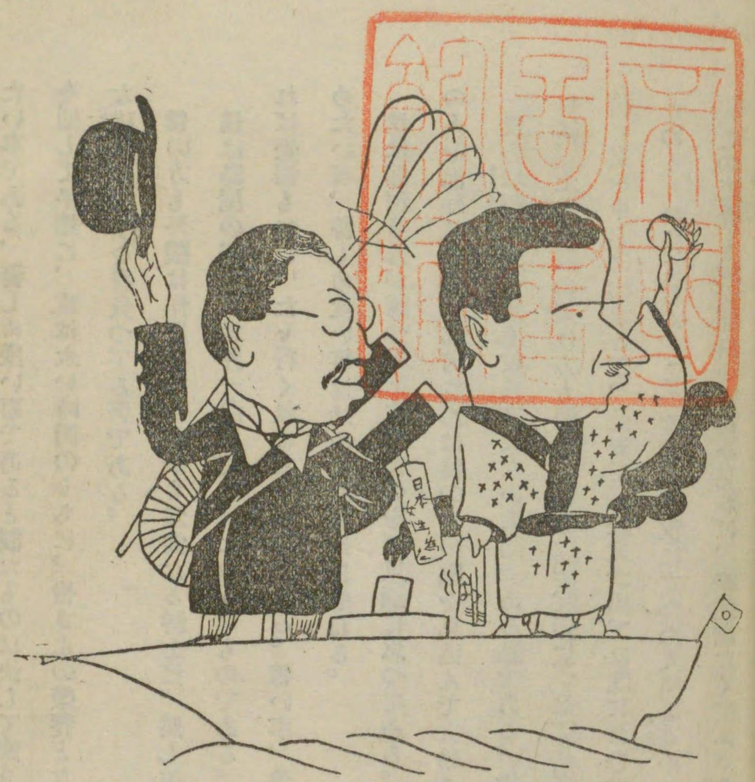
世界一周の講演……四五八―四九二

第三十六信より第三十七信まで

目次

『世界一周』隨筆……四九二―五三八
パリーより神戸まで飛行機式叙述……五三九―五八六
× × × × ×
口繪　オフセット三色版八頁
挿繪　世界一周漫畫百八十五圖

‖目次了‖



皆さん御機嫌よう

皆さん御機嫌よう

縁あつて雜誌婦女界社主の都河さんと一しよに世界一周の旅に出かける事になつた。皆さん御機嫌よう！

間違の無い限り本月十八日横濱出帆のシルヴアーステート號は其甲板に圖の如き二人の姿を載せて居る筈である。

都河さんは用意萬端整つて、その儘歐米の眞ン中へ抛り出しても恥かしからぬ紳士振りである。そして胸中燃ゆるが如き意氣込みを持つて居るであらう。日本女性の爲めに、これは善い事である、參考になる事である、便利な事である、勸め

たい事である、警しめ度い事であると觀たものは決して逃さぬ。必ず吸ひ取り搔き取つて「婦女界」を通して早速に、或は永い時間のうちに、皆さんの榮養となる筈である。その爲めに都河さんは大きな磁鐵や熊手を脊負つてる筈である。

僕の方も外觀は洋服を拵へたから堂堂たる紳士だ。然し乍ら內容は少々違つて居る。

僕は湯屋の歸りに世界一週に誘はれたやうなものである。持つてるものは手拭に石鹼、用意もなければ覺悟も無い。たゞ行く氣になつた迄である。善い事、參考になる事は必ず見逃して仕舞ふし、勸めたい事、警しめ度い事は始めから見付け兼ねる。

僕は都河さんが誘つて下すつたのを不思議に思つてゐる。他人は大概何か役に立たせる積りで有名の人を海外に送る。都河さんは僕のどの點を見込んで大げさな旅行に誘ふのだらう。

僕の取柄は先づ悉く役に立たない人間である點である。折角、西洋へ行つて生活改善の視察も出來ねば、土木や橋の架け方も習へないし、健忘性だから洋食の喰べ方一つ滿足には覺えて歸らぬだらう。繪と文を少しは物するが、是とても註文が出ては間に合ひ兼ねるといふ自儘の樂書故、矢張り役に立たぬとゝねばならぬ。この位完全に役に立たぬ人間も少からう。

この厄介ものが面白いものを見れば、誰遠慮なく笑ふ。辛ければ外聞も關はず滑面作る。出會つた事柄、見聞した興味をあけすけに感じた儘に喋り散らしらく書する。

この頑是ない腕白太郎に勝手に自由畫と旅行記を書かせる。太郎は生れ付きお體裁や上手が遣へぬ性質、若し萬一、都河さんが僕を誘ふに取柄なるものがあるとしたら、こんな所ではあるまいか。それならば僕は湯屋歸りの一枚のどてらさへも脫ぎ捨て、素つ裸の人間になつて丸き地球上の諸象を眞純な心に感得して來ねばならぬ。役に立たぬ人間が役立つ方法はこの一途より外にない。

お世辭の無い世界一週記！

成程これなら今迄に誰もやらなかつた。僕にもやれさうだ一つやつて見よう。

皆さん御機嫌よう

お世辭の無い世界一周記

一、——紐育ペンシルベニアホテルにて——

實に忙しき旅である。三月二十六日に亞米利加の陸影を見た。今日四月二十二日紐育に着いた。即ち二十五六日の間に米全土の大通りを荒筋驅け廻つて什舞つたやうな譯だ。泊つた主な市だけ並べても次の如くである。

シアトル、加奈陀のバンクバー、柔港、ロスアンゼルス、ソートレーキ、コロラドスプリング、バッフアロー、ボストン、シカゴ、紐育である。

無目的、無希望の旅にも眼の前に活動のフイルムの如く來りては忽ち去る異境の珍らしき千態萬容は自づと予に矢立から筆を抽出さしめた、予の和綴の控帳は既に四冊を滿たした。予は期待せざる獲物の餘り多きに驚き、これを如何に料理して予の讀者の玩味を容易にさせ得べきか、予は滿足の微笑を湛へつゝも一方當惑の眉を顰めざるを得ぬのである。

斯くの如く豐富なる材料の載積に係らず、更に新奇なる材料を與へんとて、機會は予に活動を強ひ

た。例へば予は紐育へ着く、クック社の定規の市中見物以外に、予は予の未知の贔屓の人々に導かれて樣々なる見聞をする。客自ら皿盤を持つて食物を漁り歩くキャフエテリアの仕組み、白銅の投入れによつて自動的に食物を受取るオートマットを試みた。

他の贔屓は紐育ウォールド新聞社に予を導き、この國の漫畫の大家に予を引合はせた。予はその新聞の爲めに稚拙なる日本毛筆を運ぶ暇に、彼は用箋紙を鋏で巧に切拔き、犬や象を拵へて見せた。

紐育の文士村の倶樂部で、蠟の涙の如く流れ落ち溜る蠟燭のほの暗き灯によつて、晩餐を攝つた。隣の骸骨の壁畫のある小室にて、藝術家の男女達は何遍も何遍も同じ節奏を繰り返へす流行唄を、低く唱つて又高く嘯いた。

又、他の贔屓は、予を遠くヒラデルヒヤ、ワシントンに導き、自由の鐘のひゞ破れ、米國最初の國旗を作つた家、白亞館の大統領の住居振り、大統領の娘さんの招待會に招かるる多數の令孃達が、花環を手にせるを先頭にして、陸續繰り込み來る光景を見せた。ボトマック河べりに異境の春に催されて、故國に居た時と同じ趣に咲く房重き八重櫻の並木を觀た。可憐の姿に予は涙を垂れた。

かくて夜行汽車で紐育の部屋へ歸ると、夜半一時に垂んとして居た。

本日の午前九時にはセドリック號に乘船、太西洋の浪を越して英國に向はねばならぬ。

只今卽ち二十二日午前五時、予はペンシルベニヤホテル、千五百十番A室の書物卓（ライチングテーブル）に向つて居る。同室の老人小塚翁は、永生きをしさうな、間隔の長いいびきをかいてベッドの上で寢て居る。

小塚翁は京都の縮緬屋さんである生來肉類を喰ひ洋服を着た經驗の無い保守黨のおやぢさんである。予の覺束（おぼつか）なき英語を賴りに予に同室を求めた程、翁は全く外國語に不通である。この翁がエレベーターに乘つて自由に用を足（た）して來て呉れるのは不思議である。どうするのかと聞いたら、思ふ階段の數を指を出してエレベーターのボーイに見せるのださうな。二階なら二本、五階なら五本。ところが予は通譯の椀鍋氏に用事あり、小塚翁に行つて呉れるやうに賴んだ。

『行つてさんじましよ、何階どす。』

小塚翁は容易（たやす）く引受けて呉れた。

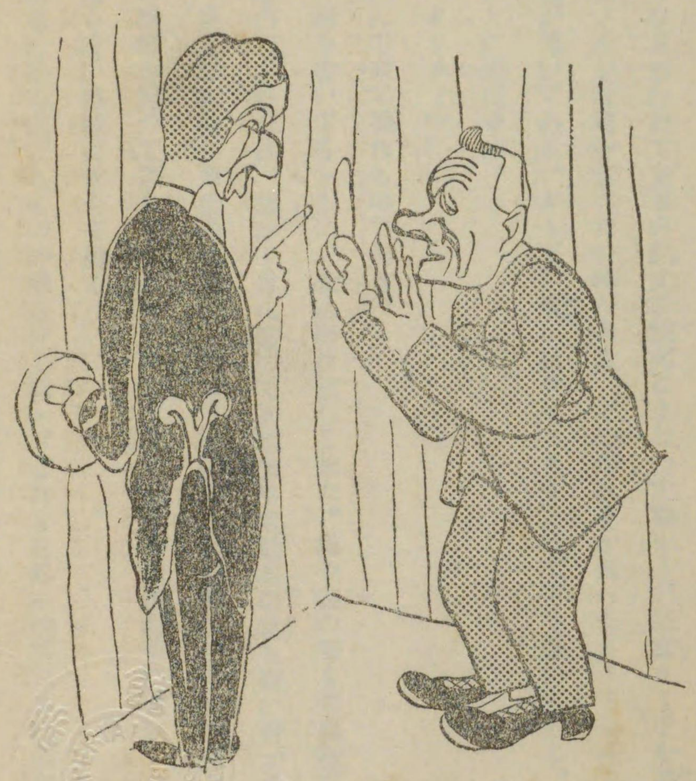
『十二階の千二百八十一番です。』

といふと、

『そら、ねつからあきまへん。十階以上はわたしはよういきまへん。』

で、何故かと聞いたら、

『手の指は十本ほかおまへんやろ。』



といつた。

小塚さんには食堂へ出て食事の献立の註文にまごつかぬやう、註文カードを描いて渡してある。たとへば、小塚さんが牡蠣を食べたい時がある、その時は予が與へたカードを繰つて見る。カードの裏には牡蠣の繪が描いてある。カードの表にはオイスターと横文字で書いてある。小塚さん默つてその表の方を給仕人に差出せば、

『イエース、オーライ』

と無事に運んで來て呉れるのである。

小塚さんの話を書いてるうちに、夜は明け放れて來た。鳥や雀の聲もせぬ紐育の朝は、不風流だ。こゝは十五階の天上なれば、遙か下界に當つて高架線や自動車の軌る硬い音がする。

予の得た、豊富な世界一周記の材料は、今少し餘裕のある時間（恐らくセドリック號船中にて）に徐に情趣の醗酵を待つて語り續けたい。今予は予が紐育到着後直ちに受取つた、予のなつかしき家鄕の便りを語り度い熱情に充ちて居る。

あまりに私事に渉り過ぎるとの非難を許し給へ。これも世界を旅する人の僞なき心の吐露である。家人の便りによれば棧橋にて見送りの時の消息を次の如く叙して居る。

えりまきも、ハンカチーフも、手袋も一度にふつて呼びにけるかも

名も知らぬ男が吾子を肩にのせ、船なる父を呼ばせつゝあり

予の子供は予の船が去つてのち、すつかり憂鬱になつたと報じて來て居る。それから横濱ステーション前で、家人達は見送りの青年達と洋食で遲い晝飯を濟したと報じて來て居る。

又家人は印度洋の酷暑を注意し、予の體さへ達者で歸れば、おみやげなんかはどうでもよいと、一面では無慾になつて、その事許り望んで居ますと書いて來てる。

子供はその父の留守なる故をもつて、望みを通して貰ひ、銀座通りで八十錢の白鼠を家の青年に買つて貰つたと報じて來て居る。

子供は牝の方の鼠を何處で覺えたか『鼠の妻よ』など丶呼ぶと報じて來て居る。その鼠はほんとに可愛らしい「眞綿の一とかたまり程のもの」と家人は形容して居る。

予が去つて六七日目が家人に最も寂寥の襲ひ來る時らしい。尤もこれは特に主人が世界の旅に上つたといふ譯でなく、常の時の旅の留守にも同じ經驗をする事であると、彼女は氣付いてる。

家の青年の手紙は予に安心さすべく、留守の者は總て元氣だといつて來てる。

それから出發後、子供の机の上に予のタキシードのネクタイが忘れあり、不自由なりしならんと問合せて來てる。

このネクタイの無い爲め、予は白ネクタイを墨で塗り黑めて遣つた。ウエーターに裏の白を見せぬやう、成るたけ後へ人の通らね方向へ坐つた。

予のぶしやうを慮つて「間着の背廣は霜降り許り着て居ないで、四五日交替位に取換へて着て下さい。また五月來頃になつたら、白セルのズボンを着ることも忘れない樣に願ひます」と青年は書いて來てる。

すると家人は「細君のやうな手紙の書き振りを見てやつて下さい」

と、手紙中に揶揄して來てる。

子供は漫畫を三枚の紙へ一ぱい描いて送つて來た。

シルヴアステート號にのつたおとうさんと標題を振つて予が上衣を振り乍ら段々小さくなつて行くところを、仕舞ひに豆のやうな大きさにまで、忠實に描いてある。脫明には、

「小さくなつても〳〵ふつてゐる、こつちでは洋服が海に落ちないかとひや〳〵」

と子供らしいユーモアを放つてる。

「ホークとナイフと間違へて西洋人に笑はれぬやうに御用心〳〵」

と說明して、予が左にナイフ、右にホークを持ち、食卓についてる繪を描いてある。そしてそれを見てる目鼻のついた太陽は笑つてる。

「一平の鼻が高い」と說明して、予の鼻がエツフエル塔と高さ競べをしてるところを描いて來てる。予の鼻の輪廓が鈍刀の歪みのやうに凸凹してる。

予はこれ等の愛すべき者等に對し、この曉ペン先に力を籠めて返事を書いた。

『兎に角、みんな丈夫で元氣で俺の歸るのを待つて居て呉れ。その爲めなら家に在る有り金みんな遣つてもいゝよ』と。

午前七時、時間だ。荷物を纏めて乘船に向はう。

二、倫敦のホテルの小机より

前のニューヨークよりお送りした通信文には、大西洋をわたるセドリック號にて、わたくし等は十日あまりの暇があるにより、わたくしの世界一周の記事を書き進めて行くであらうと申しましたやうに記憶いたします。

船は四月二十二日正午、豫定の如く紐育を出帆しました。そして豫定の如く十日目の五月一日朝、雨煙る中を英吉利のリバープールに着きました。

船も日程も豫定通り運んだのに、僕の仕事は、こゝで頭を掻かねばならぬ次第ですが、一行も書き續け得られませんでした。何故ですか。實はその怠けて遊んで仕舞ひました。御免なさい。

陸に居る時は充分急がしい旅行です。汽車で町へ着きます。ホテルで飯を食べて、休む間も無くボーイを呼び洗濯袋を出す、撮つた寫眞の種板を現像にやる、來訪のあちらの新聞記者に遇ふ、話をする、繪を描いてやる、待ち構へて居る自動車に飛び乘り、ぐるぐると見物して歩く、草臥れる、寢る、翌朝ステーションで發車の時間の來る僅かの間を利用して、參考の圖書の買集め、土產物探し等に鵜の目鷹の目です。かくて羊の群の如くクック社の世話人に追はれ、汽車の中へ詰められ、次の市へ送られます。何の事はない、生きてる貴重品扱ひの小包郵便です。

ところが船へ乘込んだら最後、小包郵便はこつちの身體に立戻ります。十日間の汽船中は、兎に角乘遲れも無ければ、自動車輸送もありません。山中暦日なしといふ言葉がありますが、船中は一層暦日なしです。喇叭の合圖で三度食事に出るのさへ、氣に向かなければ、部屋へボーイに申付け取寄せる事も出來ます。

セドリックは二萬噸餘の大船、その上英國船ですから、船長以下召使ひの小僧まで英國人です。何處かおつとりしたところがあつて、殊に日英同盟の影響が拔け切らぬものか、日本人に大に厚意を見せます。喋る言葉が糞丁寧、何を言ふにも屹度 Sir をつけます。Sir といふ字は御承知の如く、日本語に直譯して『君よ』でありませう。

Yes Sir!
Thank you Sir!
all right Sir!

この Sir の發音を尻上りに、如何にもうやうやしさうに申しますのが、旅で人の親切に饑ゑて居る

旅人に取つては、耳の當りだけでも嬉しい。

で僕は洋袴のポケツトに小錢を用意して置いて、三ペンスでもいゝ四ペンスでいゝ、ボーイの少年に遇ふ度にやる。すると少年が微笑し乍ら顎を心持ち引き、上眼づかひに謝意を表しつゝ、この

Thank you Sir

をやる。

『およしなさいよ、纏めておやんなさいよ』

同行の園藝家のK君が年若できまり惡がるが關はぬ。一々やる。

料理が具合がいゝ。米國の大皿で一皿多量主義はよして、佛蘭西式の日本には親しみのある、數多くの小皿少量主義となり、前菜からスープ、魚、肉、鳥、野菜、デザートといふ遣り方である。

陽氣は少々寒く、その上二三日船は搖れて一寸閉口したが、船を浪に任せ、行先を船に任せた海上の十日間は退屈しきつて、欠伸をして伸びをして、つまらぬ事を同行の連中と喋くつて許り居たが、その退屈が有難い。欠伸が有難い。伸びが有難い。駄辯が有難い。又陸へ上つて見物の旅に取りかゝつたら、とても退屈なぞして居る寸分の餘裕をも發見し得ない。

で船の中は退屈して、欠伸も種切れになつたが、決して原稿紙或は畫用紙に向はうとはしない。原稿も書くといゝんだがなア、繪を描くといゝのだけれどと、充分思ひ乍ら、スモーキングルームの安樂椅子に身體をうづめてぼかんとしてる。一生懸命勉强してぼかんとしてる。

詩の女神は人がぼかんとして、寧ろしばしば放心の形で居る時、ひそかに魂の耳元に來て、彼女の心の奥底をさゝやくといふ事を、みなさんはご承知ですね。

僕の旅の印象、考察は、この時に自ら努めずしておもしろき詩の飾ひの絹飾ひにかゝつて、興味の肌質をこまかにする。

僕がぼかんとして居る程度以上に、都河さんはベットの中で隨分よく寢た。そして時々起きて來ては、

『どうも、僕にはこの燒海苔が一番いゝよ。フン、さつぱりして一番おいしい、ムシャムシャ。おや、まだ、あるよ、感心だね、ムシャ〳〵。僕はもう無くなつちやつたかと思つたが、よく入つてるねえ、ムシャ〳〵。フン中々一ぱい入つてる、感心だ、と云つても、さう安心しては食べられないぞ。何しろ先が永い旅なのに、途中で仕入れるといふ譯に行かないのだから、貴重だねえ、ムシャ〳〵、一つ無くならないうち、岡本君にもこの燒海苔を食べさしてやらう、岡本君は何處へ行つたらう、ムシャ〳〵。』

都河君はよくひとりごとを言つては食べてる。海苔に向つて何か云ひ聞かしては、口の中へ運んでる。ひとりごとの中に觀察あり、注意あり、計畫あり、教訓あり、感化あるところが、都河氏らしい。

斯くて僕等は英吉利へ渡つた。

忙しき旅を更に始めた。中にも英吉利は歴史の國、落付いた國だけに、總てに影の深みがあり、分厚な奥行がある。英國へ一歩入つて、改めて米國を顧み、何といつてもまだ新開地だなと嘆息される。そしてこの國の石炭の煙と霧の多い空氣が、意外にわれ等日本人の肺に適當してる事を發見した。煙と霧を混へるこの國の空氣には、主成分として多分のゼントルメンの作法、それはわが國の武士道の義理に、頗る似たるものが存在して居る爲であらうと推察する。

われ等を悦ばせたものは

リバープールで股引を穿いたやうな毛の生えた太い四足の馬

日本と同じく田舍の藁葺の屋根

案山子

古寺院の壁の蔦の綠

古いチエスター町を取圍む石の城壁

古城の庭の青草の羊

古塔の陰の林檎の花

牧場の青草の絨氈を貫く堀割の水とそれに

架けたる箱庭のやうな煉瓦の橋

柳の切株より芽を出す新枝

ステーションで小車を押してゐる兄妹の菓子賣

古寺院の名匠レノルズのステインドグラス。セキスピアの家

セキスピアが通つた彼の妻の娘時代居た家。オツクスフオード大學の學生、女學生の破れた制服姿

オツクスフオードの町中を羊群を追ひつゝ通る牧人

テームズ上流の河岸のポプラ。流れに白鳥

古寺院内の莊嚴な大學

その他數々ある。

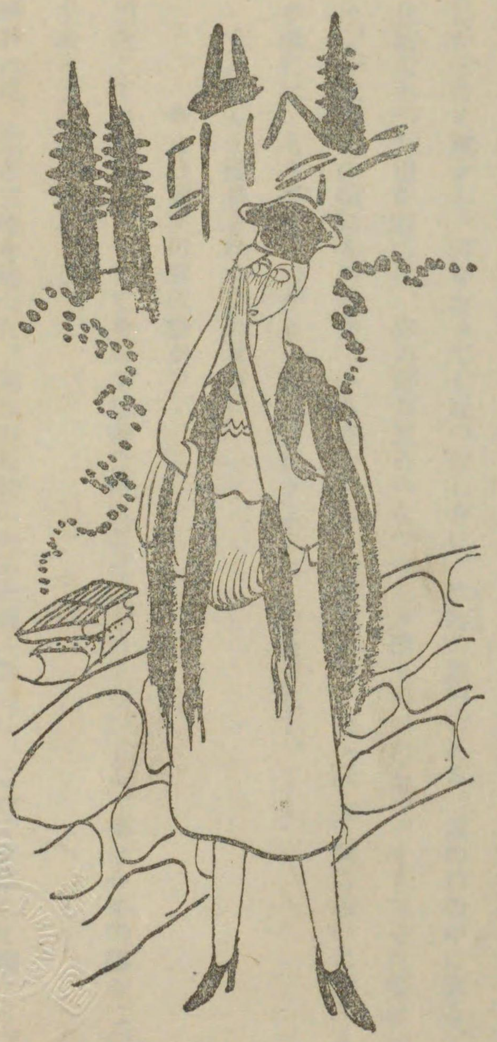
これ等はいづれ、ゆつくり心構への成熟するを待つて、享けた詩味を分厘も損減せぬやうに、みなさんにお傳へしよう。

倫敦に三日午後三時過入つた。

こゝも一流の旅館といふセシル・ホテルに投宿。翌四日は午前澈石氏の作品で名高い倫敦塔見物、中の遊就館に木の呑氣な首切臺なぞが置いてある。午後ナショナル畫廊見物、西班牙名匠ベラスケスの世界的名畫『鏡の美神』等を親しく見物。

五日、卽ち本日は午前この國の帝展である、ローヤル・アカデミー展覽會を見物。午後はテームズ河地下のトンネル二哩を通つて、貧乏町を見學し、歸りは同じ河に架けた、汽船の通過の際二つに割れる「塔の橋」を通つて歸宿。再び自動車で、都倶樂部といふので日本以來の鰻めしを食べた。その味加減、鰻飯を持ち出す白耳義生れの細君の肥り振り等も適當なる叙述を要するもの丶一つである。後に落付いて細叙しよう。

倶樂部から歩いて歸り、それからこの申譯の文書き出して、只今は夜中の二時過ぎ、僕に割當てられた四七九番室の電燈の下に、ベッドの側近く小卓を引寄せ、左の肘をベッドの上の雪の如き敷布の上に更に置かれた、ばらの模樣の羽布團にもたせ書いてる。



ぽつり〳〵口へつまみ込んでる小粒の黑いものは、田螺の佃煮である。仲間の一人の神戸の紳商が、水あたりをせぬ呪ひとて持參せる包より、半分僕に呉れたものである。

齒で嚙みしめると、鹽からい醬油の味の間より、春の田を想出させる田螺の感じのよい泥の香がそこはかとなく薫ずる。何をおきてもなつかしきは、故郷の風物である。僕の口の中に在る、この田螺の住家であつた田の畦には、柳の芽乃至あのなつかしき櫻もあつたらう。そしてそれ等は一きは咲き盛り、今は青葉の頃にもあるか、ふるさとよりこの地のクツク社へ託して僕に屆いた家人よりのさきの手紙には、もう櫻はすつかり一重だけ咲きましたと前書きして、——

らんまんと櫻咲きけり日の本の
　　やよひの空の雲は動かず

と消息して來て居る。そしてその手紙の日附は三月三十日となつてる。僕は今年の櫻をこのなつかしき手紙の上に於てのみ見る。

時計は更に進み三時を廻つた。明日の見物の英氣を養ふ爲めに、これで擱筆して寢よう。

因に申上げて置く。僕の世界一周の寫生の控帳は、もう六冊目も半以上描き盡しました。

三、賀茂丸船室にて

六月十三日エジプト一週間の滯在を濟ましてポートセイドより賀茂丸へ乘込んだ。

乘込むといふよりは寧ろ逃げ込んだ若しくは轉げ込んだといふ方が適當かも知れない。それほどわれ等は旅に疲れて居た。それ程われ等は歸りの船を待ち焦れて居た。

船に落付くや先づ第一の仕事としてわれ等は二つの鼻の穴を出來る丈け大きくした。それから下唇を思ふさま前へ突き出した。亞米利加ヨウロッパ以來溜りに溜つた三月の間の吐息をフーッと太く長く致した。

日本船ゆゑ誰に遠慮會釋もいらぬ。腹の底からの溜息！　旅の疲れを癒すにこれに越した療法はまたとあらうか。これをもつて見てもわれ等外國を歩き廻つてる間は息一つ端に氣兼して碌々吐き切らずに居た心遣ひの程が察せられるであらう。洋行して見て初めて嫁入當座の女の氣苦勞が同情出來るやうな氣がする。

乘込みが晝過ぎ二時近くでもあつたので食堂は閉ぢて居た。ボーイ長が氣を利かして冷肉にパンを添へてわれ等の部屋々々へ配らせた。色の小白い小柄のボーイが皿を運んで來た。それが日本人なのに先づ以てわれ等の眼は悅んだ。われ等は飽かずそれに見入つた。皿を置き乍らいつたボーイの言葉の、

『何もありませんが、どうかおあがりなすつて……』

といふ言葉を聽いて都河さんと僕とは儲ものでもしたやうに嬉しさうな顏を見合せた。

『岡本君、矢張り日本語は判りがよくつて愛想がいゝねえ』

『何もありませんがはいゝ、こんな謙遜な口の利きかたを毛唐は夢にも知りませんねえ』

二人は感心して冷肉を頰ばつた。

空腹へもつて行つて一片の冷肉は瞬く間に呑まれ盡したが、感心だけはなほしばらくあとまで形を殘して二人の話題となつた。

歸りの船に乘つたからといつて、あとまだ三十五日、一ト月餘の旅路である。乘込後四五日は三食ともにライスカレーを喰べられるのと、朝食に於て隔日になつかしきお味噌汁が喰べられるので賀茂丸を讃美した。味噌汁の外に佃煮、らつきよの漬物、福神漬の硝子壜が食卓の上の西洋料理の藥味容れと並んでるのもわれ等の嘆美の的であつた。しかしあれ程欲して居た日本の米、日本のお菜も備へ

てある品はたかゞ四種五種の範圍である。どう喰べるにしたところで佃煮を先に喰つて、らつきよの漬物を次に喰つて、最後に福神漬をつまむか、これを逆にして福神漬を先に喰ひ佃煮を次に喰ひおしまひにらつきよを喰ふか兎に角その變化たるや僅なものである。なれて來ると不足を云ひ出した。

『何かもう少し違つた日本食を船で出してもよさうなものだね』

『船長が日本食を嫌ひなんだろ。それで出さないのかも知れない』

『さういへば船長は日本食が嫌ひさうな顏だよ』

日本食の喰へぬ八つ當りは、船長の顏の品定めにとばちりを及ぼしたのは氣の毒である。

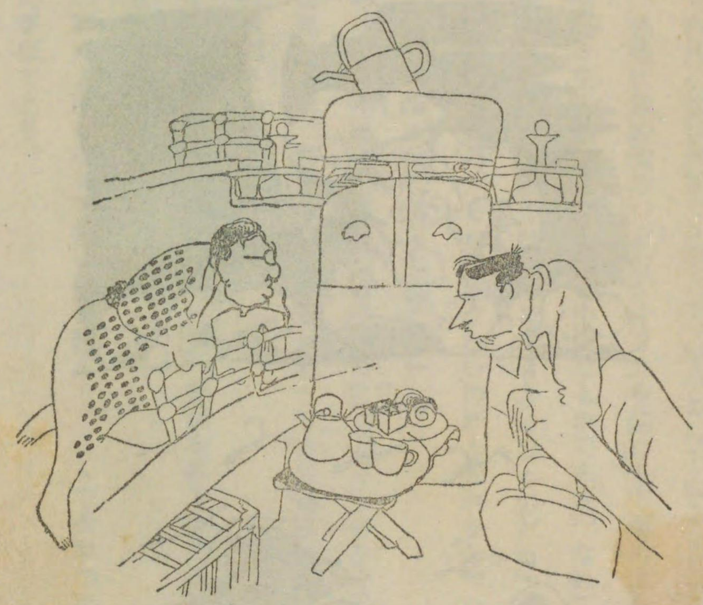
紅海を通る時は熱かつた。終夜扇風機をかけ放しなので器械が燒け切れて廻らなくなつた。それでも寢つかれずに終夜悶々した。

印度洋へ出てからモンスーンが來て、後甲板へ怒濤を打ち上げる程の暴れ！

かくて十三日目にコロンボ着。

コロンボ見物の詳しき話は改めて後に書き綴らう。こゝで受取つた予に嬉しき便りは申す迄も無く予の留守宅よりの手紙である。

予の子供よりは例の無邪氣な漫畫入りで予の家の青年が徵兵檢査を受け居る模樣（青年は本年大學



を卒業したのでこの六月檢査を受けたのであらう）出雲の國より知り合ひの青年が博覽會見物に予の家へ泊りがけで來て居る模樣、その青年は肥つて二十貫近くもあるのを形容して「デブ公はまるで西鄕さんそつくりだよ、犬をつれてこなかつたけど」と子供にしてはませた警句を放つて居る。その別行に「お父さん僕を忘れやしないだらうね」と書いてあるのを讀んで予は微笑を禁じ得なかつた。あの强情で人に弱味を見せるを死ぬよりも嫌ふ腕白が、これは又あまり女々しい怨言である。察するところ、こは彼の母の情緒的の性質をこよなきことに思ひ做して自づと享け容れし感化によるならんか、可笑し。

青年よりの手紙は例の如く留守宅の無事を事務的に報じ越し加へて「僕が餘りタイプライターを打つのでみんな笑つて困ります」と書いて來て居る。青年は卒業後就職口を得てその仕事の便宜に印字機を一臺買ひ求めたものと見ゆる。珍らしもの好きの年頃ではあり、彼はあまり印字機を濫用するので、周圍より笑はれるものと見ゆる。

勿論彼の手紙も處々誤字を加へたローマ綴りをその印字機によつて打つて來て居る。

家人よりはこの頃は中耳炎もすつかり癒り音樂と佛蘭西語の稽古にも行き出したと報じ越して居る。して「有難う〳〵。ほんたうに親だつてこんな惜しけもなく仕込んでなんか呉れませんわ——わ

たくしをよく知るものは、のんびりしたところがわたくしにあると申します。おとうさんがのびく〳〵大切にして下さるので氣がひとりでにのんびりとして居るところがあるのね」と感謝して來て居る。文中おとうさんとあるのは憚り乍ら予の事である。子供の予に對する呼び慣はしを取り、家人も予を常に爾呼び做すのである。なほ家人は三越で蘭の盆栽一鉢を買ひ求め、(これを一平の居りし場所へお置き下され一緒にお仕事なし下され度し)と書き添へ、予の勤先の留守中の仕事場へ贈らせたとある。

總てが平安と無邪氣と感謝に滿ちた便りである。旅にこの報知を得て幸福を感ぜぬおとうさんは恐らく世にあるまいと思ふ。

予はこの手紙等を上衣のポケットへ入れ旅に飽きて心の渴く時ポケットの上より掌を當てゝ見て、手紙の厚味など觸つて見た。暖き潤ひが微笑と共に胸に湧き出でた。

この時、これも予の家に居る青年の兄は入院中チブスで逝き、家人と弟の青年とは遺骨の壺を携へ、逝けるものの故郷へ旅行して居つたのである。神ならぬ身とは眞によく云つたものだ。

コロンボより新嘉坡へ六日の船路浪も靜になり船に驚かされて波上に群れ飛ぶ飛魚を今又二つ頓て三つ見付け數へて遊んで居た。午後三時半になると銅鑼が鳴つてボーイが紅茶に菓子を運んで來る。船長も萬更日本趣味が嫌ひぢやないと見え、この頃は、時々おしるこが出る。牡丹餅が出る。牡丹餅が一つ餘つた時は都河さんと抽籤にして、當つた方はこれ見よがしに見せびらかして喰ひ、當らぬ方は負惜しみを云つて罵倒し、すつかり子供になつて居た。

七月二日新嘉坡着。待ちに待つて受取つた手紙を見て予は冷たくなつた。

予の弟子のMより青年の兄の死を報じ越し來り、家人と青年は遺骨を携へて故郷へ向つたとの知らせである。

甚だ現金な話かも知れない。又、甚だ薄情な話かも知れない。然し予はその青年の死に就ては餘り心を亂さなかつた。生來弱々しく生れ、常人の抱く程の生の慾望、興味、自負をほとんど缺いて居た青年の兄は、彼に與へられた順境の進路を辿つて行くにさへも隨分骨が折れるらしく見えた。たゞ生きる事さへ可可り負擔のやうに見える運命に生みづけられた弱い心身の人であつた。與へられた彼に對するこの度の運命の所置については、予は默つて合掌する。合掌して任せるべきものに任せ奉る。

予の恐怖は青年の兄の死因が傳染性のチブスから來た事である。さういふ用心にかけては迂濶千萬な予の家の他の者が若し傳染したらどうしよう。滿足して印字機を打つてる青年に、予の土産の油繪の具の道具を待つ子供に、予に感謝して勉强してる家人に。

恥を言はねば理が通らぬから申す。予が今日いくらかでも人生に愛のある事、信仰のある事、藝術

は眞面目な事、生活に張合ひのある事等を認めさしたのは家人のお蔭である。その前は予は箸にも棒にもかゝらぬ否定主義の無頼漢であつた。酒は浴びる程飲んだ。家人に糧を與へず、已れ獨り刹那の享樂を獵り歩いた。家人は荒野の如き臺所に子供と向き合ひ、三日も碌々物も喰べず默つて涙を垂れて居た事もあつた。物質上の酷虐を與へたのみか、予は彼女の最も厭ふ方法にて彼女に精神上の打擊をも與へた。因果は理法通り來る。彼女はほとんど三年餘も神經を破壞されて居た。彼女は彼女の總てを暫時犧牲に供した。それから幾多の難行苦行を經て、兎に角予を明みの方向へ向はせて呉れた。

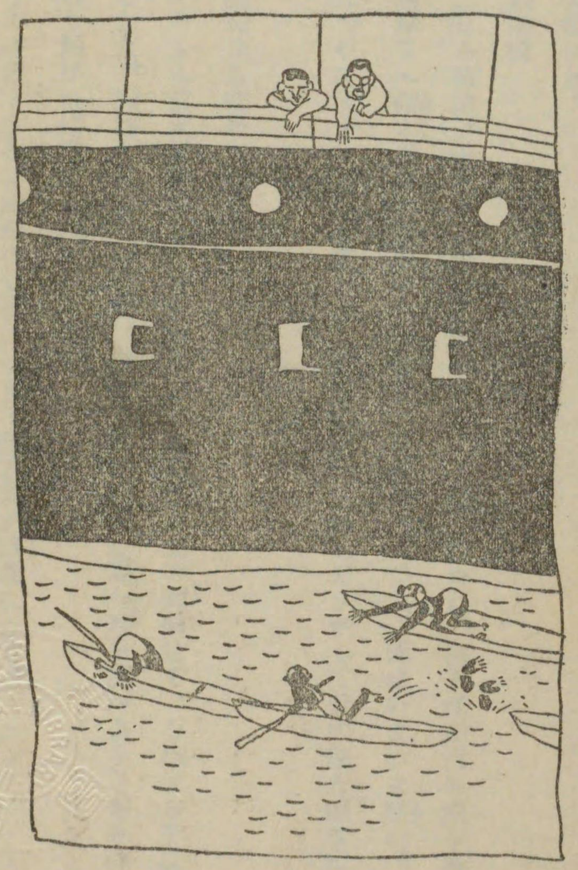
實を云へば彼女のこの位の感謝の手紙で、のほゝんと彼女を幸福にした積りで、飛魚の勘定なぞしてられる義理ではないのだ、予の過去の經歷は。そこが人間の横着で、忘れつぽいところ、今予は慈恩深き保護者のやうな高慢な氣になりかけて居た。

然し、然し、若し萬一チブスが傳染つて（こんな事いふのも嫌だが）彼女がこの世に無いものとなつたら予はどうしよう。その時、予は何としても執る方法を見出し兼ねる。

こんな不安を抱くのも旅の疲れの神經衰弱のせゐかも知れぬ。

七月三日新嘉坡發、同七日香港着。

香港にて何かの便りを得て安心したいと思つて、手紙を持つて來るクック社の案内人の姿を見るや



一番先に驅けつけた。予に宛てゝは友達よりの他來てない。かうなつたら香港の見物も糞もあつたものぢやない。予はひたすら心配を始めた。一生懸命心配して、正直に神經衰弱になつてるのがせめてもの彼女への償ひだ。

七月十日香港發

上海まで三日の船路。十三日の朝から海がそろ〳〵濁り始めた。楊子江が河の泥を海へ吐き出す爲めだ。晝頃兩岸さへ確と見渡せぬ廣いく、楊子江の河口へ入つた。泥はいよいよ酷い。壁土を溶いたやう、これにつけても予は想ふ、濁るなら勝手に濁れ。然しどうかして予の家人達は丈夫で居て欲しい。

この間の懊惱は又改めて書く。

仕方ないからもし彼女が死んだら、子供が一人前になるまで面倒見て、それから予は出家して僧とならうと決心した。徹底して彼女の行先の行先、それは生を更へ死を更へようともその行先は彼女を安泰にまで送り屆けねば置くものか。

彼女が予を不必要とする程絶對の安泰に獨りで居る事が出來るまで。

彼女の予に與へた數年の犧牲は予をかく決心せしむる程強い因縁を予に植ゑつけてあるのを發見し

て、今更に驚いた。

一方を斷てば一方絶ゆるといふ双生兒といふものゝ事も胸に絶えず聯想された。

七月十三日上海着。

有難くも家よりの手紙があつた。

青年は、兄の死の愁ひより少し遠ざかつたと報じ越して居る。

子供は家人の叙述によれば、

これがそもわが生みし子わが子かや

泣きわめく子をつくゞゝと見る

これがそもわが生める子かわが子かや

あまり可愛ゆしつくゞゝと見る

先づは無事で祝着だ。

家人は青年の兄の死に就て左の如く歌つてる。

これがそも人のはてかやかろ〳〵に

骨壺を抱きかい撫でかい撫で

骨壺を抱きてしばし眼を閉ぢぬ

また眼を開けば陽はかゞやけり

それはさうとして扨家人自身の心持ちはどうであらうか。

かがやける陽よ咲く花よ夫よ子よ

われ死ぬべしやいかで死ぬべしや

われ死なばもろともに死ねよ咲く花よ

かがやける陽よ夫よわが子よ

人として命終らばうつし世に

鳥とも魚ともなりてし生きん

予は之を見て直ぐに安心する程呑氣では無い。予は先づその手紙の發信日附を取調べてかゝるだけの世故を經て來て居る。日附は一通のは六月廿六日、一通のは同廿九日、そして今この便りを書いてるのは七月十七日午前五時である。明十八日神戸へ着いて、そこに迎へに來てれば初めて彼等は安穩なのだ。

即ち廿八日發信以來以後今日まで約十七八日の間彼等は健康を續けて居るだらうか。續けて居て欲しい、續けて居て欲しい。

愛は心配である。冒險である。根氣である。事業である。そして信仰である。

予は世界一周の本文の記事を書く前に三つ三つ讀者諸氏に寸信を差上げた事は御承知と思ふ。然しよく考へると、そのどれもが家人を中心にした事に就てのみ申上げて居る。實際予は家人の事を考へてのみ世界を一周して仕舞つた。笑ひ給ふな。われ等は結婚してからも早十年餘の歳月を經て居る。なまなかな色や戀で、こんな今時珍らしい馬鹿正直な心持が續けられるものでない。因緣だ。因緣愛だ。

で、本文の便りを書き出すにしてもやつぱしこれがついて廻る事だらうと豫想される。然らばいつそ家人の名に宛てゝ予の世界一周の繪手紙を描く事にしたらどうだらう。一人に對して完全に語る事は、萬人に對して完全に語る事である。萬人に粗略に語つてはその中の一人だも完全に肯ふものではない。

賀茂丸の予等の住居の十五號船室の向う側のベッドに豚翁が眼を覺し、仰向けの儘本の頁を繰つてゐる。今ば朝の五時半、夜はほのぼのと開け放れ、薄鼠の九州博多沖大島が船尾に走り去り、黑い小さい島が船首右舷に近寄つて來た。豚翁はさつき小便に起きた序に隣室を覗いて、一周會員中の老建築家の息子が、近き上陸の日を慮り、その濃い長い髮の毛に辯がつかぬやう、手拭で縛つて居るのを見付け出して予に聲をかけた。

『豚平君！　豚平君！　隣の息子が頰冠りをして寢て居るよ、早く見給へ〳〵』

それから豚翁はベッドへもぐり込んだといふ段取だ。

豚翁とは初耳ゆゑ御承知あるまい。實は都河氏の事だ。ベッドの天井が低いから頭を先に枕へ宛がひ、

『やつこらしよ』

と肥つた尻をごろりと納める。そしてよく寢る。一寸豚の趣が無いでも無い。故に敬稱して豚翁。するとその反對の側に陣取つた予も肥つて寢好きだ。そこで豚翁が予を敬稱して豚平。退屈するとお互に、

『全く近頃のわれ〳〵は豚だね』

『豚が二疋だ〳〵』

とかういつて笑ひ合ふ。

一言添へる。賀茂丸の船室の中では、かう豚二疋だが、頓てこれが陸へ上ると何れも相當に權威を保つ紳士で無くてはならぬ。この呼名は船中以外御使用お斷りに願ひ度い。

豚翁は予の一周記表題、改名の相談をかけた。

『それはいゝねえ』

と早速承諾して呉れた。この三四ケ月婦女界編輯局の一部が世界一周してゐるのだから、いつでも相談が打てゝ話が早い。

扨この次は家人に訊いて見る。もし彼女が承知したら、いよ〳〵その表題で本文を書き出す事にする。

かの子に與ふる世界一周の繪手紙

◎第一信

いつも家での相談では洋行するならば家中一しよにしよう。する時期は一人の子供が只今小學尋常科に在學ゆゑそれが終へた時、中學へ移る間の一二年を休業さして連れて行かう。かういふ約束だつたね。

一たい俺の家の組織は、人間としての生き方を研究する爲めに寄り合ひ合宿所のやうなもの、も少し詩的な言ひ方をすれば愛の丸火鉢の周圍へ自づと寄り合ひ、八つ手のやうな大きな手、楓葉の芽のやうな小さい手を隣り合はせ並ばせながら藝術の灯に見護られつつ苦澁な人生の冬の夜永を暖く語り明かさうといふ寒さ嫌ひの夜伽會だつたね。

十二の子供一人でも立派に愛の講中の一員である。彼はおやぢの大事な紙をソッと持ち出す。他愛もなき樂書を紙からはみ出し疊の上にまで塗り擴める。その儘遣ひかけの繪の具と筆を書齋の中央へ抛り出し、遊びに出て行つて仕舞ふ。そのだらしなさ、いけなさ。つく〴〵くさ〳〵する。子供といふ

奴は丸でおやぢの事業を破壞する爲に生れて來たやうなものだと落膽する下から、湧然と愛が湧き上つて來る不思議さ。俺はいつかわが心の不思議さをヂツと凝視して居るのである。

外所へ出て行つた子供は路次の角で隣り近所の腕白共を寄せ集め、もう銀行屋ゴツコを始めてるらしい。

『松ちやん、お前に一億圓のお紙幣遣るから先の百圓紙幣返せ。』

かういつてる聲が聞える。

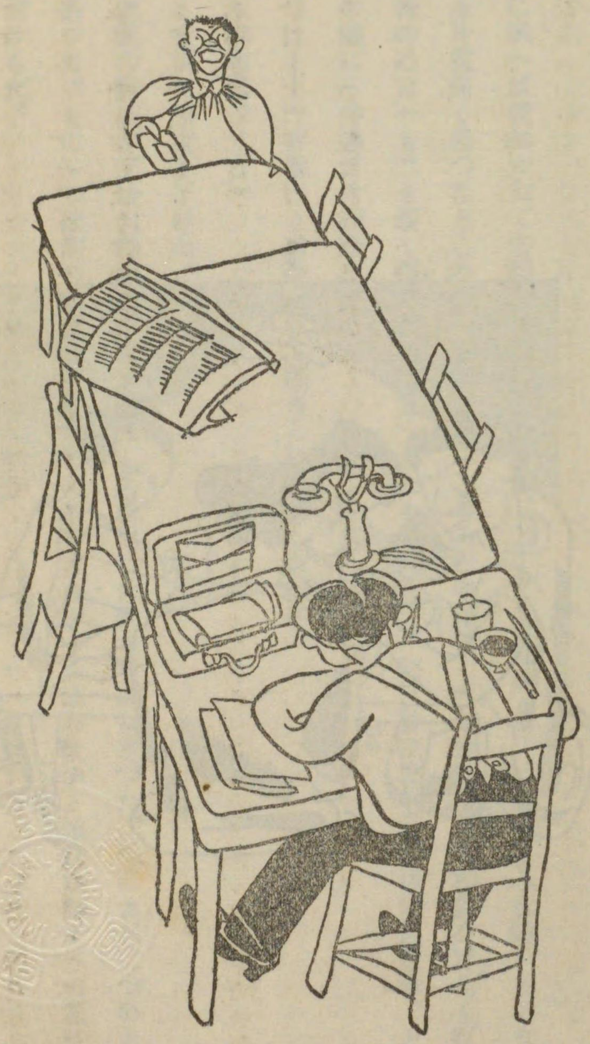
俺は思はず笑つた。そして其一億圓の紙幣なる物が如何に大いか見度くなつた。で、描かけの繪刷毛を差置て二階の緣側へ出てみた。

檜葉の葉の隙より覗ふと新聞紙を三角に折つて冠つた帽子と久留米飛白の肩だけが僕に眺められたが、その持つてる小さい手も顏も見えなんだ。檜葉の靑葉には今ヴン・ゴツホの繪のやうな日光が射かけて緣に燃えてる。瞳が痛くなつたから眼を瞑り書齋へ引込んだけれど、心に深く射込んだ光の生氣はいつまでもいつまでも俺を新鮮にした。

繪の具を取散らし紙を浪費する子供でさへ此の樣な愛の重大な仕事を擔つて居るのだ、況んやおまへに置いてをやだらう。家の中の誰一人を殘し置いても愛の株式會社は破產である。俺は俺の廻りに惡戲でもよい叱り聲でもいゝ、兎に角、親しきものが動いて呉れないと落付いて仕事に向へぬ性質だ。一人で歐洲留學なぞとは思ひも寄らぬ。その上おまへはおまへで專門の藝術を持つて居り、西洋の思潮に觸れて來る事は俺以上おまへに必要の事かも知れぬ。で、行くならばそつくり株主殘らず洋行と定めて置いて、扨旅費の問題だが、これが中々の難問題だ。

年頃溜めるとなしに溜まつた金も有る事は有る。したがこれは病氣や不時の物要り――いくらか生活が樂になつた此二三年より前には、その爲におまへがどの位心身を壞つたか、どの位持つてるものを無くなしたか、お前の今も惱むいろ〳〵の病ひはほとんどその當時の生活難及び俺の思ひ遣りの無かつたことから來て居る。俺は誠實になりかけてから沁々と思ひ當つた事だが、その當時、自分一人い〻目を見ようとした俺の賴もしくない根性にも呆れるが、打つかつて來る難儀を悉く正面に引受け、蒙る矢　血だらけになつても泣きながら、ぢつとして居たおまへの利口で無い性分にも呆れるよ――に是非取つて置かなくてはならぬ金だ。

俺の友達の畫家等が巴里へ留學する爲め旅費を準備する。大概往復を加へて一年の留學にどう儉約して見ても六千圓は要るさうだ。それを集める爲めに畫會をやる。一枚を五十圓か百圓の定めにしてその金を前に受取り、繪はあちらで描いたものを頒つといふ仕組だ。百圓の繪にしても六十枚描かな



ければならぬ。一人洋行するにすら凡そこれ位要るのに、俺の家では四人だから大變だ。行く事は子供が尋常卒業の時と略見當をつけて見たもの丶旅費の方で危ぶまれた。然しこゝ二年間に神若し惠み給はゞ自づと何とかなるであらう。氣持ちといふものは存外、宛になるものだ。屹度何とかなるだらうといふ氣持に俺達は可成り信用を置いてたね。

二年先に！　二年先に！

外國の地を踏むのは少くともそれより早くは機會が見舞はぬと家中のもの、腹の中で價踏みを定めて居る筈だつたね。

ところが、急に俺だけ先に外國の地を踏むやうになつたのは家中の意外だつた。

◎第二信

本月一月の初め頃だつたと思ふ。

俺は勤先きの畫室でせつせと仕事の繪を描いて居た。珍らしく婦女界社の都河氏が訪ねて來られた。三階の應接間で對談した。話は直に俺に世界一周の勸誘であつた。今度都河氏が行くに就て、

『丁度よいお伴れだと思ひましてお誘ひ致しました――』

可成り大規模の計畫であるべきものを、苦も無く輕く話すところ、如何にも大世帶を擔つてる人らしい。

正直に云へば僕はかねて昔程では無いと云ひ條、人があまりに多く洋行したがり、世間があまりに持て囃すを片腹痛く思つたところの一人である。ところが今洋行、而も世界一周の相談を容易く打かけられ、俺の心は一も二も無く彈んだのはどうしたものだらう。狂言言葉で、これは如何な事、といふのがこの場に一番適當の評語だ。

『そいつは――』有難いと云ひかけて淺ましい氣がしたから、

『結構な御相談ですな』

とわざと言葉の熱度を下げた。

俺が言葉の熱度を下げた理由は、たゞ淺ましいと思つた許りではなかつた。他にまだ二つの大きな原因があつた。その一つは俺の勤先きの氣兼ねである。もう一つは云はずと知れたおまへの意見を訊かぬ前だからだ。

俺は自分が誠實に向ひ出してから、そしてまだ自分自身確かりした人世の生き方を發見出來ぬ前、

俺はおまへに對して淺ましき仕打ちによつて作つた俺の罪、それをどう償つたらいゝか隨分考へた。そしてこれから先は總ておまへの爲めに生きてやらう。この方法が一番おまへの幸福を取戻すに有力らしきを考へ當てゝ、その決心をおまへに打明けた事もおまへは確に覺えて居るね。

それ以來、俺は人生觀に於ては興味も張合ひも持たぬ全くの懷疑主義者であり乍ら、おまへの誠意に背かぬ動き方だけはして來たね。俺はその爲めに宗教の巡禮もやつた。道樂も、酒も、煙草もやめた——たゞ、寢坊好きと食辛抱だけはどうしても廢せなかつたが——半僧半俗のやうな生活をして來たね。この度びとても右の決心ある以上、おまへの心持ちを疎外してどんな相談も纏められるものぢやない。

『よく御相談下すつて——』

都河氏が歸つた後、俺は默想し乍ら畫室へ戻つた。そして無理に念を入れて描きかけの繪の線を引き續けた。心を叱つて云ふには、この相談、纏らぬと見て置く方が後の落膽の苦しみを嘗めなくてよいぞ。兎も角も落付く事だ落付く事だ。

いつもの時間通りに家に歸つた。家中は食卓の周圍に坐つて俺の着席を待ち兼ねて居る。洋服をかなぐり捨て和服に着更へ俺は座蒲團へ坐つた。例の通り互に温味を取り交はす輕き冗談の二つ三つ、子供に對しては愛撫の掌の代りになる無邪氣な揶揄の一句半句、子供はおやぢに對し一日中溜めて置いた甘たれかける鼻聲を切り出すべくこの機會を待つて居た。小さな箸を投げ捨て武者振りついて來る奴を程よく引離し、再び元の座席へ坐らせた。

俺は落付きをなほ繼續さすべく徐ろに箸を執り上げ、靜かに食卓の上を點檢した。今夜のお菜は、へか鍋である。

俺の家に居る青年の鄕里の出雲の國——それは冬は日本海から吹きつける暗く荒き風雪に閉ぢ籠められ勝ちの土地だ——で行はれる料理法である。黑く大きい古朴な鑄物の鍋、それに時の野菜を數多く挾み入れる。鯛、甘鯛、鰆のやうな鮮けき魚を、骨ごとブツ切りにして中へ加へる。砂糖と醬油で鹽梅よく煮ながら熱きを吹きもて食ふ、至極簡單な喰べ方である。野菜を芥かなんぞのやうに惜し氣も無く摑み入れ、魚肉を豆腐のやうにふんだんに喰べる。その雄大な趣きが嬉しいので家ではよくやる。

『今夜のへかは何だい』

『鯒なのですよ。少し淡泊し過ぎると思ひましたけれど、生きてたものですから。』

『おとうさん、鯒生きてたよ。魚屋がね、庖丁でね、頭擲つたら死んぢやつた。』

青年は擊劍四級の太い腕を出して、それでも忠實やかに、骨を拐る事の下手なおまへと子供へ向く鍋の側には骨の少い尻尾の肉を、俺には脂肪の多い腹の肉を、野菜の土手を押し分けて入れて呉れた。そして自分の方へはあんと大口開けて無念の齒を嚙み出してる鮪の頭を突つき込んだ。

この青年は家に無くて適はぬ心遣ひをして呉れる人だ。おまへの性質はこの役には落第だね。

二口三口喰べてから、俺は時分はよしと何氣なく言つた。

『今日世界一周に行つて見ないかといふ話があつたんだがね。』

だがねと輕く話を掠らしたところに俺の遠慮がある。言葉遣はだがねだが、俺の注意深き眼はおまへの返事の出方を生死の境と刺す樣におまへの顏に注ぐ。『まあ、それは、いゝお話ぢやないの。でも、もつと詳しい話を聽かして——』

おまへは案外、虛心で受けた。その證據にはその後ですぐ氣を傍へ外らして、

『Yさん、あなた、骨の頭とこ許りしやぶつてやしなくつて、ちつとは、良い身のところもお喰りなさいよ。遠慮らしい。あなたがさうだとあたし達だつて喰べたものが實になりやしなくつてよ』

叱られた青年は氣まり惡さうに口中より嵩ばつた、大きな鮪の頭を引出し改めて良い魚の肉と代へた。

俺は都河氏來訪から誘ひかけられたこの旅行の筋書まで詳しく話した。

『さうね。では行つてらつしやい、行つてもいゝわ。』『でも、お前は俺の旅行中の事を心配して又例の病氣にでもなりやしないかい。』

『大丈夫よ、あたしは此頃はすつかりあなたを信用して居ます。末梢の心配はするかも知れませんけれど、根本は大丈夫なの。行く方があなたの爲にいゝ氣がするわ。あたし達の行く時の參考の爲にもよく見て來て頂戴』

これで解決した。俺の心は筋斗でも打ちたいやうだつた。それをぢつと堪へた。俺は口に突き出る感謝の念を男子の體面をもつて押へつけて仕舞ひ、鷹揚に左の如く言つたね。『おまへも此頃は本當に料簡が廣くなつたものだな。』

聞き耳を立てゝ一部始終の樣子を聽き知つた子供は、早速鼻聲を立てた。

『あら——お父さん洋行するの。一人で狡いや僕も連てつて——』

箸と茶碗を投げ捨てるや俺の頸玉へ獅嚙み付いた。俺の頸玉は度々この目に遇ふので赤き蚯蚓脹れが斷えない。

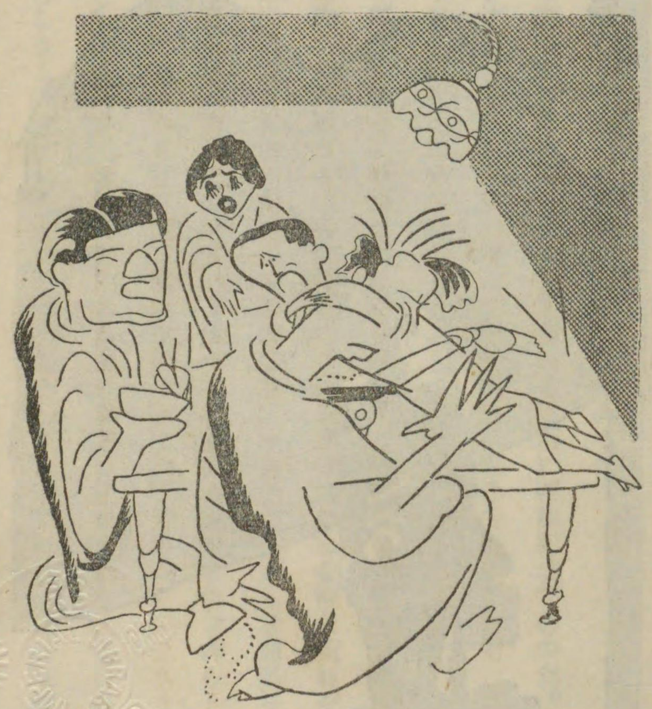
◎第三信

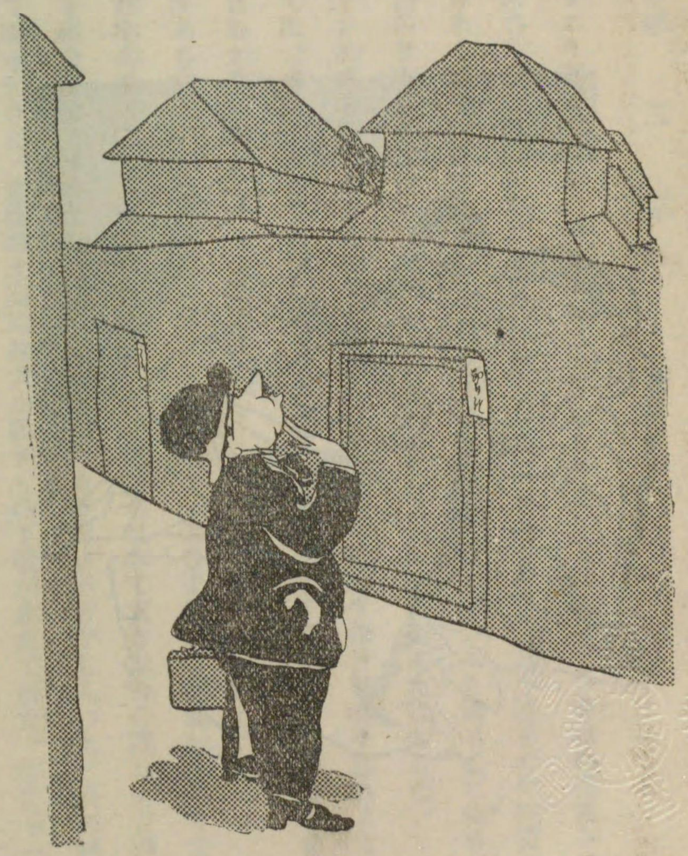
勤め先の首尾も上々吉であつた。彼は藝術家の自由を尊重して呉れた。大會社の襟度を以て快く四ヶ月間の暇を呉れた。俺はこの好意に對し都河氏の了解を得て世界一周中集めた研究資料のうちその方向へ向くものあらば機敏に書き送り、それによつて感謝の意を表さうと豫め心に決めた。

承諾を得べき筈の承諾は既に得た。俺はこの報告を齎して都河氏に逢はねばならぬ。

電話で約束しといたある晴れた日の午前、俺は市ケ谷見附で電車を降り、道を訪ね〳〵婦女界社を加賀町に探し當てた。俺は五年餘も雜誌に繪を載せては居るが、その社を訪ねるのは今日が始めて、少からず動く好奇心が俺の觀察に力を入れさせた。

場所も雜誌社があるやうに思はれぬ細い閑かな横町の奥。建物の樣子も雜誌社らしくない、表を板塀で圍んだ普通住宅の建方のが二棟。俺は早春の陽の暖くあたつて居る二つの門口のどつちへ入らうかと、迷子程でも無き躊躇を一寸した。都河氏の門札のある戸口の方から入つた。次の格子戸があるのを開けて入つて聲をかけた。玄關の土間には大小數多くの下駄が並んで居た。中にも一と周圍りぐらゐづつしか大きさの違はぬ子供の下駄が先生から、「番號！」の號令を待つやうに脊の順に溫順しく





並んで居るのは俺をして思はず微笑させた。始めて訪ねる家に對して氣構へする訪問者の硬くなる心それが幾分薄らいだ。

出て來た女中が俺を導いて行つたのは他の棟の建物であつた。

女中より俺を受取り迎へたのは洋服を着た、まめらしい若い雜誌記者であつた。その記者は俺の爲に一番奥の瓦斯ストーブの前へ椅子を近づけストーブに火を點けて呉れた。

俺は瓦斯の火に焙り乍ら婦人雜誌の編輯室といふものを物珍らしく見廻した。

長方形の可成り廣い部屋である。二面は硝子戸を欽めて光線の入りを好くしてある。硝子戸を透して園ひの外に見上ぐる許りなる建てかけの建築がまだ壁で包み切れぬ心棒の鐵材を鬼の角のやうに空へ突き出してる。それへ冬の午前の日が當つて片側の陰は救ふべからざる意地悪るさうな煙脂色。眺めても味氣ない感じを起させる乾いた尖々しい建築は恐らく工場用のものであらう。眼を反へして室内を看る。

可成り廣い室ではあるが數へ切れぬ程の机と椅子を置き並べ通り道も無いくらゐ。古い机から中古の机、それから眞新らしきものはニスの照りまだ飴のやうに光つて居る。これは擴張に擴張を重ねてこゝまで發達した編輯室なる事が判る。それにつけて連想するのは此社で發刊す雜誌の編輯振りであ

る。第一頁より最終の頁まで盛り切れぬ材料を山のやうに盛つてある。その爲め可成り金をかけたらうと思ふ記事も六號活字で目立たなく隅に押込んでる。手に載せると重いやうな氣がする雜誌だ。それは荷物を滿載した引越車のやうな豊かさと親しみと通俗さと愛嬌とを持つて居た。

置き並べ切れぬ机と椅子に當惑してる編輯室より、盛切れぬ材料を抱へ閉口してる雜誌が生まれる。俺は此合理的な光景に滿足した。

何に使ふものとも、又俺達のやうな面倒臭がり屋には使ひ切れさうもない、いろ〳〵のハイカラの器具が置いてある。恐らく一度は雜誌上で諸者の家庭にその便利さを紹介され、しかも俺達は頭から別な世界のものとして讀まずに頁を繰つて仕舞つたところの利器でそれ等はあるのだらう。妙な形の把手がついたり、金屬板に彫り込まれた洋字の凹凸が光線を反射してたりした。

室の中央に大きな煖爐、それにも增して大きそうな煙突がいくつにも室の空間を屈折させられ、駄々を捏ねてる。宥め賺されてやつと壁から外へ拔けてる。煙突の導き工合も科學的又經濟的により多く室内を暖め得られるやう工夫を籠めたところ、如何にも常に家庭の相談相手になる雜誌の編輯室らしくある。

少し疲れて傍のデスクに肘をもたせかけた。そのデスクは質素な飾がついて、外の机と違つてる。多分主幹のだらう。よく見るとデスクの面に貼つてある羅紗が隨分汚れ破れかゝつてる所もある。このつまらぬ事も初訪問者の筋張つた心を和らげるよすがになつた。

都河氏が出て來た。普通肥つた人はその太皷腹の下へ兵兒帶を締め下げるものだが、この人は胸の方へたくし上げ、腹はその下に膨れてる。大きな坊ちやんのやうだ。身體をうしろに反り返へし、身體に似合はぬ短かい手をこまかく振つて歩く調子を取る。

漫畫に描けは河豚の泳いでる所かペンギン鳥だらう。

『お待たせ致しました。お話しするにはこちらの方がよろしうムいます。』

都河氏は應接室に導いて自分でストーブの瓦斯を捻つた。

用談を仕舞つた。

『あなたは身體は大丈夫ですか。』

都河氏が訊いた。

『昨年、腎臟をやりましたが今は丈夫です。』

俺が答へた。

それから可成り永い間雜誌編輯上の考へや嘗て洋行した人々の噂やに就て話に花が咲いた。有名な

Rといふ小説家夫妻が世界一周をして來た紀行の本の話も出た。俺は、

『R氏はべらぼうなところがあるから私は大の贔屓です。あの人は隨分芝居氣があるやうですが、少しもそれを自覺せず、平氣でやつて行くから厭味になりませんね。』

俺はこんな評をした。

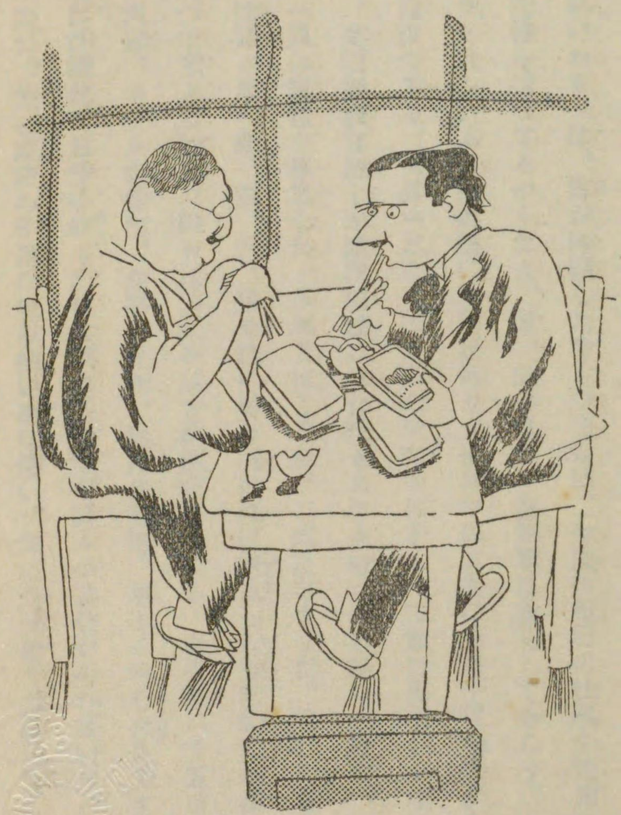
話の中に編輯古參の二人が紹介された。

千葉君は一二度遇つた事のある人。駄洒落の名人と聞いたが、今日は濟して居た。霞の中にあるような彼の顔は謹しみを加へて一層長閑さを増した。

いつ畫になつたか、制服を着た少年が鰻飯を運んで來た。山の手の事だから碌な鰻はあるまいとたかを括つたが思の外上等だつた。

喰ひ終つて都河氏は自分の喰べた箸をポキンと二つに折つて捨てた。これも二度使はぬしるしにかうするがいゝと「婦人の心得」の中にあるのだらう。

都河氏の長男の青年が丁度中學を卒業したので留學の爲め紐育まで一行に加はるとの話もこの時聞いた。



◎第四信

俗事に悟りの悪いおまへは、俺が歸朝した今もつてなほ、今度の旅行の仕組や費用やについて隨分とんちんかんな記憶を持つてるやうだよ。で、念の爲め一應簡單に說明してやらう。

トーマス・クツク社といふのは英國に本店があり、世界中到る處に支店や代理店がある、そして旅行の萬般の事を取扱つてる。世界中どこへでもこの社の手にかゝつて旅行出來ぬ土地は無い機關と勢力を持つてゐる。先頃攝政宮殿下が渡歐遊ばされた時もクツク社が御世話申上げた。

この社が世界一周の團體を募集した。日本ではこの企が二回目なさうだ。旅行の月日は丸四ケ月かゝつて廻る國々は英、米、佛、獨、白、伊それに都合出來れば埃及へ入り無論海峽植民地も通る。往きは太平洋を渡つて米より始め、歸りは印度を越す歐洲航路に依る。會費は八千五百圓。總て一等待遇にして汽車、汽船、ホテルの費用、食事、見物、案內の費用、ボーイの心付まですつかり會費に入つてる。旅行者は洗濯代と自分の飲もの代及び土產物等を買ふ小遣ひがあればいゝ。然し兎にも角にも世界一周の小遣だ。旅に路銀の手薄な位心細い事は無い。夫に支度金も相應に要る。何のかんのと少くとも一萬二三千以下では決行出來ぬ代ものだ。

行く先で目錄通り世話役に土地の案内者を加へ、洋行する程の者の見物するところは殘る隈なく見物させる。それによいのは日本から日本人の通譯が一人ついて行つて呉れる事だ。

果してこの待遇通りとすれば赤毛布は赤毛布でも大名の赤毛布、紳士の赤毛布といふものだ。

◎第五信

支度をしようくと思ひながら、つひ例の癖で一日々々と延びて仕舞ふ。かういふ場合には普通おまへが督促係になるべきを、おまへも呑氣だ。植木屋から澤山、やくざな植木を買つて來て、これを植ゑ度いのだが、相談に乘つて呉れないかといふ。そんな暇は無いと怒鳴つたが『でも、あなたの好きな山椒の木も買つて來たのになアー』と寂しい顏をしてるのが、二階の欄干から、覗くと見える。氣の毒に思ひ、不服な心を足で二階から、梯子段にやけに當り散らし乍ら降りて行つて手傳つてやる。

なんだ、山椒の木だなんて言つたつて、貧弱なものだ。それでも眼を近く寄せて觀ると木肌に山椒らしい斑點があり、こまつちやくれた棘も出てる。僅に綠を吹いたマッチの尖の藥ほどの芽を、爪で缺いて鼻の先へ持つて行くと矢つ張り山椒の香だ。おまへの鼻の先へも持つてやる。

『あたしは鼻が悪いからさうされたつて鼻の先が擽つたいだけよ。香ひはしませんよ』

『さうだつたな。殘念だな。俺はこの謙遜で澁味のある香が大好きだ。今に芽が出たら煮て食ふんだな。』

『さうですとも、澤山お喰んなさいとも、あなたには他に道樂は無し、せめて好きな喰ものぐらゐ澤山お喰んなさいましとも。』

俺はこの言葉を感謝の念を持つて押し頂く前に、失禮ながら笑つちやつた。

この幾葉出るか判らぬ瘦せこけて貧弱な山椒に向つて、澤山お喰んなさいましともは、思ひ切つてよく言つた。山椒が聞いたら苦笑するだらう。

俺の笑つたのに氣付いて、おまへも大いに笑つて仕舞つたね。

でも、山椒は合議の上、臺所の通路の片側塵芥箱の傍に植ゑたね。植ゑた後眺めると塵芥箱の時代を經た黑色と、山椒の錆びた枝振りとの配置に、平俗な詩味が現れたのは儲けものだつた。

本尊樣がこんな具合だから、一番氣を揉むのは家の青年Yだつた。

『おとうさん仕樣がないな。』

かう嘆息しつゝ、一人でさつさと支度を纏めて呉れた。何時の間にか洋服屋を呼び寄せ、靴屋を呼び寄せ、俺を捉へといて、のつ引きならず寸法を計らせた。

『洋服屋がね、西洋では寢卷にかういふのを着るんだつて。序に持つて來ましたから買つときました。試驗に着て御覽なさい。』

ネルのやうなもので、頭から冠る寬濶な一枚服だ。着て見るとゲツセマネの園で、天父に禱る基督の姿のやうだ。

『はゝゝ、こりやあ神々しくつていゝ、どれ一つ寢具合を見てやらう。』

『おとうさん、そんな事をしちやあ、あなた寢坊だからすぐ寢ちまいますよ。そら、駄目ですよ、起きませんかよ、風邪をひきますよ』

Y青年の聲として、

『だらしが無いなア、洋行する人とは思へやしない——』

といふ聲までは耳に入つたが——その次に、

『やい、起きろッ、御飯だよッ！』

と頸つ玉へ嚙りついた子供と共に跳ね起きて見ると、身體に搔卷がかゝつて居る。電燈に灯が來て居る。塀を越した隣の家の茶の間で夕餉の箸を茶碗へカチ當てる音が聞える。

庭の山茶花に夕靄がたゞよつて居た。

もう一枚、焦茶の甲斐絹で出來てる、支那服のやうな室内着の試し着は、おぢやんになつて仕舞つた。そして家中の攻撃を受け乍ら、すご〳〵俺は食卓に向つた。

◎第六信

『これだけは、どうしても一しよに行つて下さらなきや、見當がつきませんから。』

とY青年に云はれ、三越へ買ものに出かけた。

然し連れて行つたつて、結局俺は何の役にも立たなかつた。Y青年は店員に一々、

『これは外國へ持つて行つても、恥かしくはないでせうね。』

と念を押して、附屬品を勝手に買ひ調へて呉れた。俺が一しよに行つた甲斐があつたのはカラを買ふ時、頸の大きさを計らせたのと、タキシード用のエナメルの靴を、足に穿めて見た事だけであつた。爪先の漆のやうに光る、蝶形の飾のついたエナメルの靴を穿いて見て、これを自用にするのかと思ふと、心ときめく。娘のやうな心があるなと思ふ。

買物には欠伸しながらついてつた俺も、これから晩の食事だとなると勃然として勇氣が湧き上つた。出口で弟子のSに遇つたのを一しよに連れて、俺はさつさと神田行の電車に乗つた。神保町の支

那料理へ彼等を導いた。

一口に頬張れる蒸し立ての燒賣や豚肉と竹の子と、葱が脂で煮られ、その滋味は濃漿となつて、彼等自らを和へてる炒肉皮や、白黄の卵の肉を嚙むと、脆弱な白い蟹の肉が、舌の上へ別の味で拔け出て來る芙蓉蟹や、飯の中に混ぜられたいろ〳〵のおいしい具が、印度更紗のやうな配色を呈して居る揚州炒飯やを並べて食べるうちは、しばらく浮世の苦澁を忘れさせられて居る。

『うまいだらう〳〵』

と獨りでうまいだらう〳〵と獨りでうまがつて食べたが、弟子のSは同感して競爭して箸を下したが、Y青年は生返事だ。

どうしたのだと訊くと、支那料理は濃厚過ぎて僕には向かないといふ。

『では、折角來たのだから、僕が上等の洋食を御馳走しよう』

神田から外濠線で數寄屋橋へ廻つた。弟子のSと訣れ、鍋町の風月堂の二階へY青年を連れ込だ。

佛蘭西風の料理方を、更に日本人の嗜好に合せ勘考へたこゝの店の料理は、瀟洒として居た。質素なお仕着せに角帶を締めた服裝で雪の如きナフキンを腕にかけ、言葉少なに皿を運んで來る手代のウエーターも、不思議に食卓に調和して居た。

『もつと何か取らうか、うんと喰へよ。』

『もう澤山です。おとうさんは大喰ひだな。』

かういつてY青年は水菓の匙を取り上げた。

この青年の何を喰はしても同じ調子に食べてしまひ、これといつて喰べ方に感興を湧かして來ぬ、無表情なところを飽足らなく思ひ乍ら、吹き込む風に氣がついて窓の外を見る。柳の絲に若芽を吹いたか、搖れ方に重みが加はつてる。二十日の月。

『おとうさんは今度洋食がうんと喰べられますね。』

『うん、それが今度の世界一周の樂しみの一つさ。』

腹ごなしに銀座を歩き、資生堂の化粧部で、化粧道具の入つてる鞄を買つた。開くと剃刀は勿論、耳搔き爪磨きまで器用に入つてる。

『おい〳〵、こんなしやら臭いものは俺に遣ひ切れるかい。』

『西洋へ行つたら、今迄のやうに無精ぢやいけません、少しは奇麗になさらなくちや——旅行中は紳士なのですよ。』

食ものを食べて仕舞へば、氣が無くなる俺は、順々に買物して櫻田本郷町まで行つた。

其處で鞄を買ふのだが、それも總てあなた任せだ。

Y青年が又世界一周に遣ふのだが、丈夫か丈夫かと一々念を押して、大小鞄三箇を買入れたのを、俺は太つた腹に洋袴が窮屈になつたのを、後の締金を外し乍ら見て居た。

これだけは自分でしなくちやならぬので、澁々東京府廳内の旅券課へ行つて、旅券下附願ひを出した。そしてその願書が外務省へ廻るのだと聞いて、一寸不安になつた。

漫畫家といふものは、日本國の大久保彦左衞門みたやうなものだ。相手が誰であれ、いやしくも世道人心に不都合だと見る時は、ガミ〳〵畫筆の上で叱言をいふ。爵位、勳等、權勢、地位、財産の多寡なぞは、勿論眼中に無い。そしてその叱言も尋常一樣の生優しいものでは無い。相手の面の皮の厚薄に從つて、それを引き剝ぐこつちのメスの種類が變る。諷刺といふメスもあれば、皮肉といふメスもある。それでなほ正氣に還らぬ奴は、罵倒といふ大鉈で脊中をどやしつける。

外務省の親方の内田康哉君も、隨分當り散らした方だ。現に二ヶ月ほど前にも、外務省の大臣室に訪問して、そのくる〳〵した眼と時雨降る軒端の下の鷄のやうに、身體を膨らまし、威容を作るところを繪に、華府會議の結果に對し、附元氣をいふところを文に、露骨に刊行物の上に發表した。よもやそれを見ない事はあるまい。

旅券の許可、不許可はもつと下の方で鑑査して、まさか大臣の手までは行くまい、若し行つてもそんな事を根に持つ程の男でも無からうと、萬々承知して居ながら、もし一寸でも岡本といふ奴はけしからぬ奴だと、冠を曲げたら、そこはお上の仕事だ。事が面倒になる。

理屈で無しに一種不安な氣分、漫畫家といふものは、筆ほど氣の強いものでは無いと知るべし。

そのうち警察から高等刑事が下調べに來た。いろ〳〵訊いた末、

『財産はどの位おありですか。』

この問には當惑した。

『つまらぬものが少しありますが、重なものは腕が一本だけです。こいつはうまく行くと何億圓になるか判りません。うまく行かぬと一文の價打もありません。』

『あはゝゝゝ』

老刑事はこれを冗談だと思つた。

度々催促して、漸く旅券が下る事になつた。府廳の旅券課で貰つたのを見ると、厚い鳥の子で立派なものだ。許可した名の主は、あの外務大臣内田康哉君だつた。そして和英漢三種の文で、『右ノ者貴國ヘ赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス』と賴ん

で呉れてある。

流石に國法は公平だ。

なほよく見ると、戸籍、現住所が書いてあり、生年月が書いてあり、俺の名前が書いてある上へ持つて行つて「生來之日本人」と書いてある。

三十七歳の今日迄、氣が付かずに過したが、成程よく考へて見ると、俺は生來之日本人だつたね。

鳥の子には菊の紋がついて、、憂狀のやうだつた。俺は小學で少し出來たが、中學で出來ず、美術學校で出來ず、從つて憂美らしい書ものは、生れてから一遍も貰つた事が無い。こんな立派なものを貰ふのは、一生にこれだけだらう。貰つて見て、優等生達が無理勉强する心理が判るやうな氣がした。

◎第七信

俺のやうなものにも、送別會が四つあつた。

一つは俺の勤め先の會社の人々から催されたもの、一つのは婦女界社のもの、一つのは東京漫畫會の連中のであつた。それと、も一つは個人展覽會を開いて呉れる中橋の呉服店のとだ。

勤め先のは築地の精養軒にあつた。俺は着心地を試みる爲めに、タキシードの着始めをやり、ピカ〳〵光るエナメルの靴を穿いた。自動車を奮發した。

柔らかく彈動する車内の腰掛けに身を靠せ、右の膝を左の股の上へ載せ、窓外を走過する家並の灯の尾をひくのを眺めて行くと、急に外交官になつたやうな氣がする。タキシードの左の胸がさびしい、車内に生けてある溫室もの、草花を泥棒して胸に挾んだ。その代價を籠めた積りで、チップを餘計やつた。

俺が會場へ入つて行くと、知り合ひが、

『ヤア〳〵〳〵』

と吃驚したやうな眼をして、後じさりしながら、頭の先から靴の先まで見上げ見下ろす。俺は調子付き、相手の引込ます手を無理に引つ張り出し、西洋流の握手をしてやる。

重役が立つて來て、俺が泥棒したとも知らぬ草花を褒める。

『岡本君、普段、惡口を商賣する人のやうぢやないね。見違へたよ。』

婦女界のは上野の精養軒にあつた。勤め先の畫室で期限に迫つた仕事をしてると、やんやと催促の電話がかゝる。やつと自動車で驅けつけると、前の餘興は濟んで、一同食卓についたところだ。俺はあたふた都河氏の隣の席へつく。一皿二皿は夢中だ。それから少し落付て周圍の光景が判る。

婦人雜誌社關係の人達だから、婦人連も多い。氣が付くと食卓の斜向ひに菊池寛氏が居る。皿と皿の間の時間に膨らんだ懷の中から、何やら書物を取出しては偷視してる。

食後のコーヒーの時間になる。別の設けの席へ集り、送別の辭に代へて洋行經驗者の赤毛布談がある。

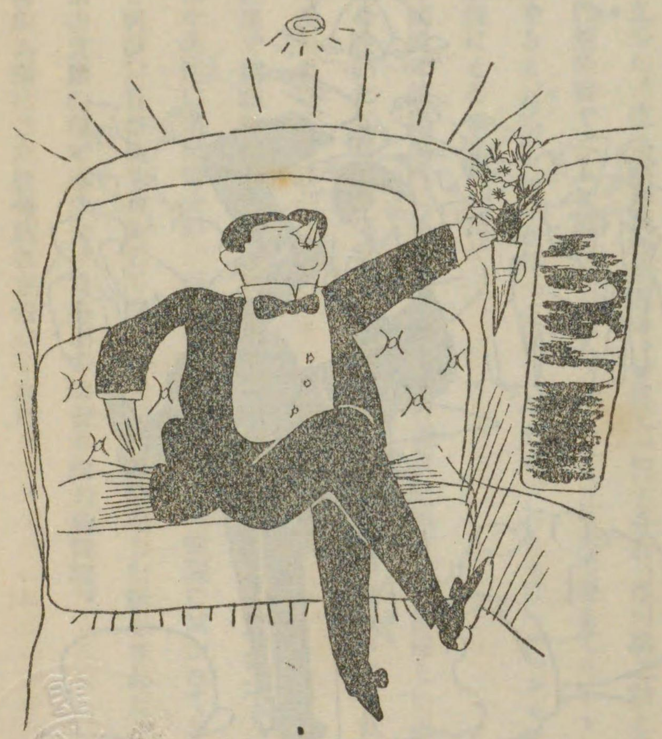
小山内薫氏が二つの洋行氣質を現した話をした。一つは無學で大金持のAといふ船會社の社長の洋行振りだ。彼は無論語學は出來ぬ。然しあらゆる洋服の隱袋へ金を一ぱい入れといて、外人から何か言かけられると、默つて金を差出す。先方も結句この方がいゝから、向うの方で却つて面倒を見て呉れる。かくて彼は西比利亞線を通り、巴里へ無事安着した。

次は新橋で有名な割烹店の主人、鶴見に遊園地も持つてる。この人は總て日本語で押し通した。たとへば水が欲しいとする彼は、

『水だ！　水だ！　水だ！』

と續けざまに呼ぶ。ウエーターが驚いていろ〳〵のものを持つて來る。望みのものと違つて居るうちは水だ水だを繰り返す。かくして十遍も遣り直せば、そのうち水を持つて來るやうになります。

これは笑ひ事では無い、いゝ參考だ。



前のは金の有り餘つて居ない俺達には出來ぬ流義だ。然し後の流義は俺達にも出來る。でよく心に留めて置く。

次に田中良君が立つた。彼は劇界視察巡遊中、倫敦で一行と分れ、市川猿之助と二人で佛から伊へ向つた時の可笑味。巴里の宿で二人は飲ものが欲しくなつた。日本で覺えてたシトロンを思ひ出し、さういつて給仕に命ずると、生のレモンを持つて來た。今更違つたとも言へず、レモンを二つ切りにして、砂糖も無きまゝ、無理にそのまま齧つた。

それから佛伊の國境で旅券調べに遇つた。猿之助の職業を訊かれ、俳優といふ字を知らぬので說明に窮した。いろいろ說いたが無效、半泣きになつて、然し猿之助が踊りを踊つて見せた。したら檢査官が笑つて通して呉れた。

太田三郎君が巴里で風雅な造りの家を見に入つたら、そこはいかゞはしい家で、賣笑婦に捉まへられた話をした。まだその他に下田博士が、西洋の窓硝子はあまり綺麗に拭かれてるので、近眼の自分は硝子が無いのだと思ひ、首を出さうとして額で割り、大怪我をした話をされた。

漫畫會のは神田の支那料理でやつた。呉服店のは日本橋の鳥料理。

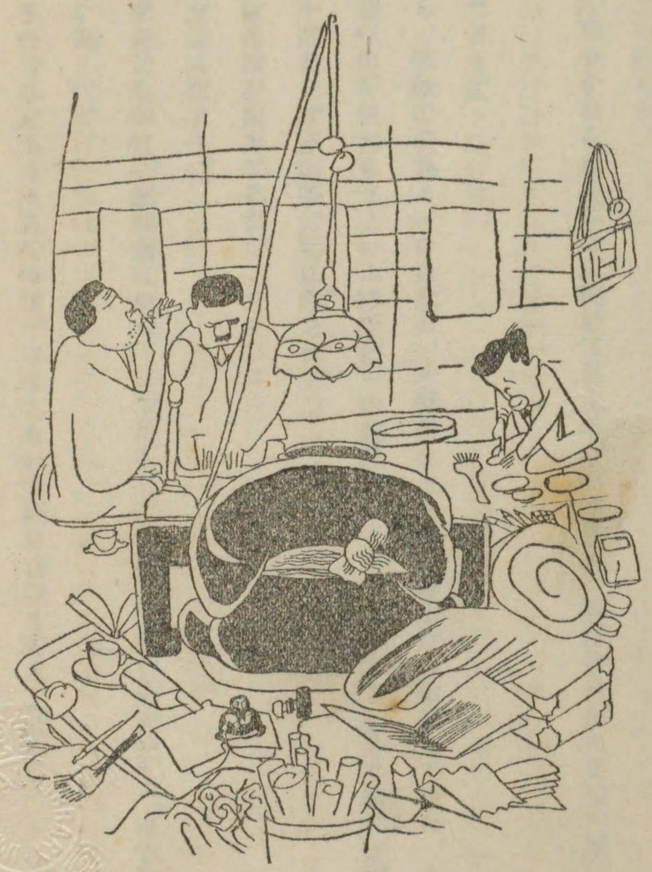
かくて諸事片付かぬ間に、出發の期日が迫つて來た。

前日の忙しさ、洋行留守中に催す手筈になつてる、半切展覽會の最後の繪を描いてると上野の博覽會に俳畫館を設ける爲め、出品畫の勸誘に來た人に斷り切れぬ。卽席で二枚描かされる。子供雜誌の催促氏が待つて丶、四頁分麒麟の可笑味を描かされる。次は婦人雜誌次は吳服店の美術部の人、次が用箋商店の主人、次が出版書肆が留守中、俺の本を出版するのに序文を頑張つて書かして行く。その間に美術商が二名暇乞ひ旁、歸つてから催しの相談、時に夜十一時四十分。十二時になんなんとして、先の用箋商の主人が再び原稿を取りに來る。

家のおまへたちと碌々話しも出來なかつたね。それでもお前達は遠くへ旅立する主人を送るといふ、センチメンタルにも陷いらず、機嫌よく普通にしたのは、信仰の力だ。有難く思ふ。一寸そばか何か喰つて、又二階へ上り、弟子のSを相手に金箔の團扇を四本、半切一枚、書物の景物につけるといふ東海道の肉筆畫が二十枚。

夜中下を向いてた爲め、充血して膨ぼつたくなつた顏を振り上げ、掌で撫でて居る。と、戸の隙から旭がさし込んで來た。晴々しい雀の聲。それでは、どりや出かけようか。

◎第八信



鼠の巣の様に、紙屑や使ひ捨てた用具が、混雑してゐる中をスポリと抜けて、障子を開けて縁側へ出た、戸を二三枚くる。

旭の光線で開きかねる目を強ひて開けて見上る、日本晴だ。再び抜け出た書齋の鼠の巣を懐かしく眺め返し、

『オヽさうだ〳〵。』

と云ひ乍ら、佛教の聖典と、それから、十圓のナイフを机の上から取戻して來た、十圓のナイフと云ふのは、旅行中不便だらうといふので色々の道具の、キリやコロップ抜きや鑵切が出るナフイを買つてきた。十圓した。下の茶の間に降りた。

茶の間には仕度が出來てゐた。

『そら、お父さんだ〳〵。』

出發の時間の迫るのに、膳の前に坐つて、氣をいらつてゐた一同は勇氣付いた、それでもY青年は、いくらか苦い顏して、

『サア〳〵五分で喰べちまうんですよ。さうしないと間に合ひませんよ。』

飯茶碗へ、煙の立つ飯を、無理に高く、盛つて、一同に配布した。

膳の上を見て、

『何だ、ヤア鯛か。』

と驚いた予は、飯茶碗を受取つて、

『何だ、赤御飯か。』

と二度吃驚した。

學生の合宿所の様な、俺の家庭にして、米國史研究家のY青年や、世間智の無い、お前やの相談から、この古風な心盡しが生れ出ようとは、豫期しなかつた。

五分間では鯛の片身の半分位しか喰べられなかつた。暫く訣かれねばならぬ味噌汁、篤と名殘を惜もうと、二杯更へやうとすると、Y青年に叱られた。

『御飯は其位にして、洋服をお着なさい、今日は、太郎の方が、餘程、世話を燒かしませんよ、支度をしてもう表へ出て、ピョンピョン潑ねてますよ。』

予は新調の、霜フリの背廣を着た。Y青年が予のネクタイを結んでくれ乍ら云つた。

『ちよつ忘れた、おとうさんに、この結び方を敎へておくのだつたのになア。』

不器用なおまへの支度の手間取れるのは、いつも同じだつた。この動作に入ると、おまへは、時間を超越した。

これより先、俺のこんどの洋行の企を聞いて、山陰道の米子の友人野阪君から、祝に非常に大きな鯛を送つてきてくれた。この友人は最初俺の漫畫を愛好する關係から友達になつた人である。商人ではあるが、趣味と飄逸を持つて居る。そして季節々々に、心にかけて鄕土の産物を送つてくれる。其の送り方が彼には趣味を持つた道樂なのらしい。いつも、意表外の物や、一癖あるものを送つてくれる。そして屆いた時に、俺がどんな顏するか、それを豫測して、一つの歡興に入るらしい。大袈裟に云へば、送り物が彼の藝術なのである。如何な奇拔な並外れの物を送つてきても、その品には必ず細心な且秀れた常識の詮衡を加へられてあるから、けつして受取人に不禮や不便を與へる様な事は無い。此の點は贈答品藝術の妙諦に達してをる。

俺はそれに對して返事をめつたに出さない。感心したり、苦笑したり、微笑したり、兎に角、その贈り物によつて與へられる感じの儘に動いて、それをもらつておく。俺はこれが眞實の贈答品藝術に對する鑑賞の仕方だと、筆不精の自分を辯護して居る。

こんどよこした、大鯛も、祝の心を漫畫的に强調しようと思つて、苦心して探し出した彼の藝術品である。餘り大き過ぎて、鯛と云ふ感じはしない、年を取つて頭が紫色に白茶けてゐる、目の周りが

黒く、近頃流行の丸い鼈甲の黒目鏡をかけてる様だ、釣り下げると子供の太郎と同じ位の丈だ。

鯛を見て起す目出度いと云ふ感じも、この鯛を見ては、呆れ返つて引込んでしまふ。

俺はこの鯛を見て直覺的に或る考へが浮かんだ。それで出發の時に弟子のSに酒一升の貧乏徳利とこの鯛を持たして自動車で先にステーションにやつた。

我等の乘る別の自動車が來た。出立とうとして玄關の土間で靴を穿き了ると、後から、おまへが呼んだ。

『旅行中のお守りを上げませう。』

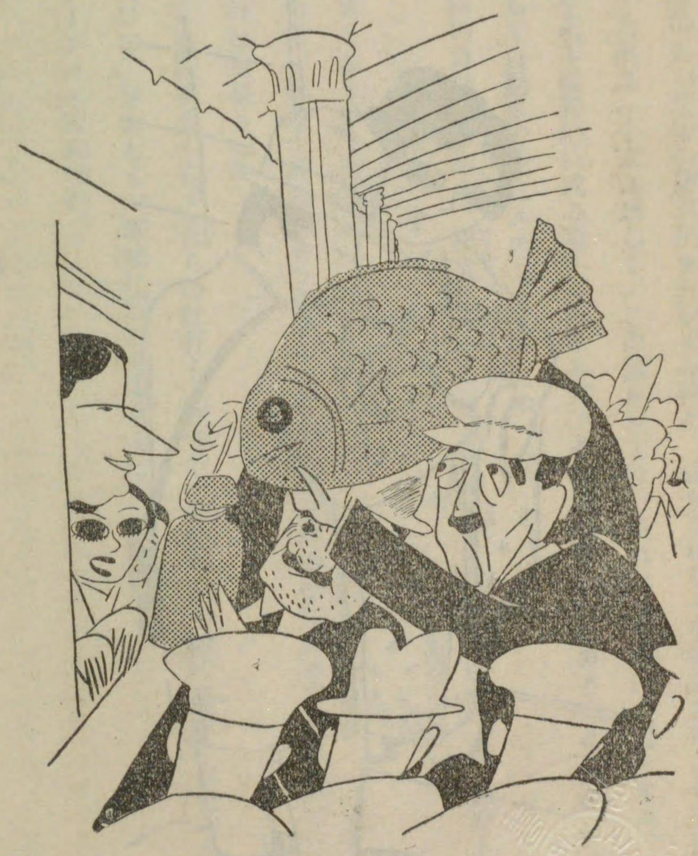
と、さう云つて、俺の小指におまへの穿めつけの指環を無雜作に穿めてくれた。

『さうか、それは有難う。』

俺も無雜作にお辭儀をした。これらの仕打も、俺達の十年間の火や水で湯搔かれた今の俺達の白い心境を知らぬ人には、甘たるく、嫌味に取れる事だらうね。

家中でステーションに向つた。

◎第九信



ステーションには、見送りの人の名刺受の場所など、ちやんと出來てゐた。そして見知らぬ人が、俺の家の代表に成つてくれて、丁寧にお辭儀してゐた。

婦女界社の人が挨拶もそこそこ予の腕を取らへて活動寫眞を撮りに又驛前へ連れて行つた。自動車の中から都河氏が麾招いて、俺を車の中へ導き入れた。

活動寫眞の撮影機が控へてゐる、其映寫圈内のステーションの玄關へ自動車を乘つけると、誰かゞ扉を開けてくれる。すると先づ第一に都河氏が大いに濟まして下りて行く、次に俺が下りる、其後から都河氏の夫人、次に小さい娘さん達が綺麗な袂を金魚の様に閃めかして下りて行く順序だ。

活動寫眞機のレンズが睨んでゐると思ふと、どうも態度が自然にいかない、芝居をしてる様に自然と片肱を張たくなる。

『どうも拙いなア。自動車を、もう少し大きく廻さなければいけない。』

と活動寫眞の指揮官が手を振る、そこでまた、遣直す。ドアーを開けて出る時には、先きと同じ様な勿體らしい顔をする、又失敗だ。何遍もやるので、顏の筋肉が怠くなつた。漸く許されてプラットホームに入る、色々の關係者が送つて來て居てくれた。

俺は一々此等の人に、俺の様な、交際下手の者に、よくも、こんなに多くの人が好意を以てくれる

なと、意外に感じた。

然し悪い心持ちではない。

汽車に乘り込んでからも、窓で又一通り挨拶する。この間ごちやごちやして、何が何だか判らない。唯混雜の中を揉みに揉まれて、兎も角、家の者一同が俺の近くの座席に乘込んだのを見てホッとした。

急に氣になりだしたのは例の大鯛だ。俺はプラットホームに又出て、又そこらを探し廻つた。

『Sはどうしたらう、あいつ眞實にしようが無い、オーイS！』

俺が餘りまご〳〵するので、平福百穗さんが訊ねた　俺は鯛に付ての企てを急いで話した。處へSが持つて來た。

『そら早く〳〵。』

平福さんが手傳つてくれた。この老漢も、かういふ場合には子供の樣な藝術家の無邪氣さを出してくる。そこへ見送りに來てた漫畫會の連中の鼻先へ、かの大鯛と一升德利を突付けた。

『皆な有難う御座います、御苦勞樣でした、――つまらねエもんだが、これで一杯呑んでくんねえ。』

俺はわざと、かういふ下素な言葉で云つて渡した。案の通り、漫畫家達は鯛に吃驚した。そして、流石の猛者達も早速の始末に窮した樣で愉快だつた。

『かつちけねねエ〳〵』

忝ないといふ言葉を、こんな訛癖に云つてそれから誇張した手付をして、漫畫家の亮さんが受取つた。そして汽車の出發する時に、仲間は漫畫會の恒例の手打の式といふものをやつてくれた。

『ヨーイ、シャン、シャン、シャン、シャン』

二十名ばかりの手が、一人の人が叩く樣にうまく揃ふ、其の拍子に連れて、亮さんが、かの大鯛を振上げ、波を打たせて空中に泳がせ、そして最後のシャン、シャン、シャンでその鯛が、俺の鼻の先へ喰付いた眞似をする。みのさんは貧乏德利を振つて踊り乍ら調子を取る。

『皆な有難う〳〵』

と俺は御辭儀をした。プラットホームは笑聲で滿ちた。

俺は潛越ながら日本の漫畫界から賴まれて一足先に世界を見てくるのだと云ふ責任を感じた。それは重き苦しき責任ではなかつた。

汽車は今高架線の上を走つて行く。窓外兩側に見える、都の屋根の景色も今日は違つたものゝ樣に新しく光つて見えた。俺の肩を叩くものがある、振返ると、杉村楚人冠氏であつた。俺に握手をして、そして俺の耳に私語いた。

『○○○○○○○○○○○○○○』

この言葉は外國に再三往來した先輩が、後輩の洋行者に向つて與へる助言としては、至切至要のものであつた。流石に譯知りの楚氏であつた。然し、これは紳士が紳士に對しての耳語（きやうご）である、公表を避けずばなるまい。

唯この助言の内容は、品行方正の楚氏の必要としなかつた如く、予も亦其の厄介となる必要の種類のものでなかつた事を一言しておく。

『有難う御座います、然し僕は其の必要もなささうです。』

俺がさう云ふと、楚氏も、

『ハヽヽヽ、君もさうか、そりやアいゝ。』

双方輕い笑で笑ひ飛ばしてしまつた。

楚氏は新橋驛で降りた。

賑かな落付かぬ心で、こちら側の俺もおまへも家の家族達も乘込んでゐた。前の腰掛けの都河氏の一行も、恐らく、さうであつたらう。櫻木町に着く迄に、無闇（むやみ）に人に紹介され又こつちからも人を紹介した樣に覺えてゐる。

自動車で波止場（はとば）へ行つた。

波止場には大きな割に輕快な感じのする緣に塗つた客船があつた。これが俺達の乘る、一萬三千五百噸のシルバーステート號だと知つて、非常に賴もしく感じた。又西洋を見物に行くと云ふ、好奇心に滿ちた興味が勃然と湧いた。

『まア、立派な船ですね、これに乘つておいでなら、わたし安心しますわ。』

さう云つて、おまへは、賴もしさうに眺めてたね。

『早く中に入らうよ〳〵』

と云ふ子供を制して、波止場の中にある建物内の休憩所で休んだ。大分人が混み合つてゐた。向うの方にゐる一團が矢張りクック社のこの團體で中の一人の銀座の文房具屋さんの一行であつた。文房具屋の主人も居て遙かに目禮を交したが、相手は派手な商人だけに、見送人も多く、花輪や贈品が卓上に堆（うづたか）く積まれてゐた。俺はその間に注意されて旅券を持つて、波止場の根元にある水上警察に判をもらひに行つた。

別段故障の出る樣な、事情があるのでないから、無事に判を押してくれるのは判りきつて居る筈だのに、かういふ、鹿爪らしい官省へ入ると、何となく不安に襲はれるのが俺の性分だ。俺はどうも生

れ付き、お上の役人と、川魚の料理と、男の腰卷は蟲が好かぬ。

判を受けて、又休憩所に戻つてきた。婦女界社の一行の休憩所に案内されて、此處でも又活動寫眞だ。段々氣配が切迫してくる樣だ。紅茶を呑んでるのだが、氣が上づつて、丸で味がない。然し長い旅に出る前の家族や近親達への別れを惜もう、と云ふやうな、憐れな心持はない。何處迄も遊山氣分、但し其遊山が俺に取つて天職なんだから、浮いた心はさらさら無い、眞面目な遊山氣分だ。婦女界の人に切符を渡されて、船の中へ入る。見送人を制限されたが、やがて、うまく掛合つてくれたと見えて、大概の人は入れた。鞄でない者は足袋はだしで入つた。

船の入口へ入るのに高いものだから、段のついた橋が架つてゐる。そこを群集に押され乍ら登つて行く。又々活動寫眞だ、最早馴れてきて橋の上を反身になつて歩く、そして、わざと活動の機械の方へ顏を向ける樣な厚かましさが出來る樣になつた。

船の内は、もぐらの通り道の中へ入つた樣だ、何處が何處やら判らぬ。まごついてゐると、誰だか知らぬ人が、どうやら定められた俺の室へ導いていつてくれた。室の中へ入つて調べると、何時の間に誰やらが、荷物をちやんと持込んできてくれてある。この船は亞米利加の客船で、裝置も古くない方だ。從つて船室中は、船とも思へぬ立派さである。

『まア小じんまりして設備がいゝのね、こんな室を一つ家にも欲しいものよ。』

おまへはこんな答禮たれの事を云つたね。

俺には、こんな事が云へる餘裕が、おまへの心にあるのが嬉しかつた。

この場に成つて、おまへや、こどもに涙の玉の一つをこぼされたら、俺は洋行を一寸考へ直したかもしれない。

こどもは、其處ら邊りのハイカラな機械を拈つて、水が出たり湯が出たりするのを驚異の眼で見てた。これも俺が輕い心で別れて行けるよすがになつた。又探し出されて、前甲板で活動寫眞だ。俺が立つてる處へ漫畫仲間が一人一人握手をして別れる處だ。大威張りでくるもの、如才なささうにくるもの、勿體らしくくるもの、映寫の中に入ると云ふ興味でくる者、各々性格や其の描く繪の趣まで、覗へて面白い。

銅羅が鳴つて一同追出される。

弟子のSが色紙の卷いたものを渡してくれた。

舷側へ出た。もう一同は波止場の上に降り立ち並んでゐた。そしてウロ〳〵俺の顏を探してゐた。

漫畫家仲間が一團となつてる。それから少し離れて、おまへ、こどもY青年、それから今やつと氣

がついたが、家に出入をする大學生M、慶大卒業生のAとが居る事だ。尙外に俺の本の出版書肆のI氏、漫畫雜誌のM氏も居る。俺の旅行の旅裝を、すつかり引受けた、横濱の洋服屋が來て、兩手を擧げて、存在を證據立てるのには俺は笑つちやつた。

俺の見送り人に比べると、都河氏のは大勢で盛んに色紙を投げ合つてゐる。それに比べて俺の方は寂しい。人間と云ふ奴は底は悟つてゐても、表面の神經といふ奴が濟度し難いものだ。俺は色紙をまづ、おまへに投げた。おまへの處へは行かないで、風に流れて二三間先きのマントを着てる老爺の肩に流れた。Y青年が飛出して行つて拾つてきて、おまへに渡さうとすると、こどもは自分が持つ〳〵とせがんでるらしい。そしてY青年にいけないこれはお母さんが第一番だと叱られてるらしい。其の素振りを俺に向けて見上げた不平さうな小さな目の光で俺に判つた。よつて今度は俺は、こどもの顏を指差しておいて、そして色紙を投げた。こどもは喜こんで拾ひに行つた。家族の者や青年達に一本づゝ行き亙つた。漫畫の圓體の中から、催促の手が、切りに出る。殘りのものを皆その方に投げた。船の上と波止場の上とで紙を握り合つて待つてる暇が、馬鹿に長く感じられる、一人の人の頭ばかり見つめてもいられない、順々に見廻す。然し、かう改つて送り送らるゝとなつて、顏を見合すと氣まりが惡いもんだね。「注視」の挨拶を、それ〴〵見送りの人に萬邊なく振り撒いて、おまへ達の所に瞳を

戻して行くと、おまへ達の瞳は待つてゐて、吸ひ寄せる樣に俺の「注視」を受取る。瞳と瞳と見合す事の間の惡さは、他の知り合ひの人のみかと思つたら、内の者にもさうだね。家にあつて膳の前、朝夕の外出歸宅時に於て顏と顏と見合す時は、こんな心持ちは無いが、いざ改まつて、かういふ場合になると、妙に瞳と瞳と合す事が長く堪えられぬ樣に氣がさすものだね。と云つて、この僅の別れの間を目を外らしてゐるのは惜しい。俺はてれかくしの氣持もあり、又、如何に旅立つ者が心配なく行くかの心を表さうと、冗談の手眞似をやつた。まづおまへを指さしてをいて、そして親指と人差指で輪を作つて俺の目にあてた。おまへの大きな目を揶揄したつもりだ。

するとお前も其の心を汲取つた、冗談の手眞似をして、これに答へた。目から涙の玉のボロ〳〵落ちる手付をして、其の後で微笑して見せた。

こどもに俺が彼のへの字眉毛を諷して目の上へ指で八の字を作つてみせてやると、列から前に驅出て、俺の方へ小さい拳固を上げて打つ眞似する。

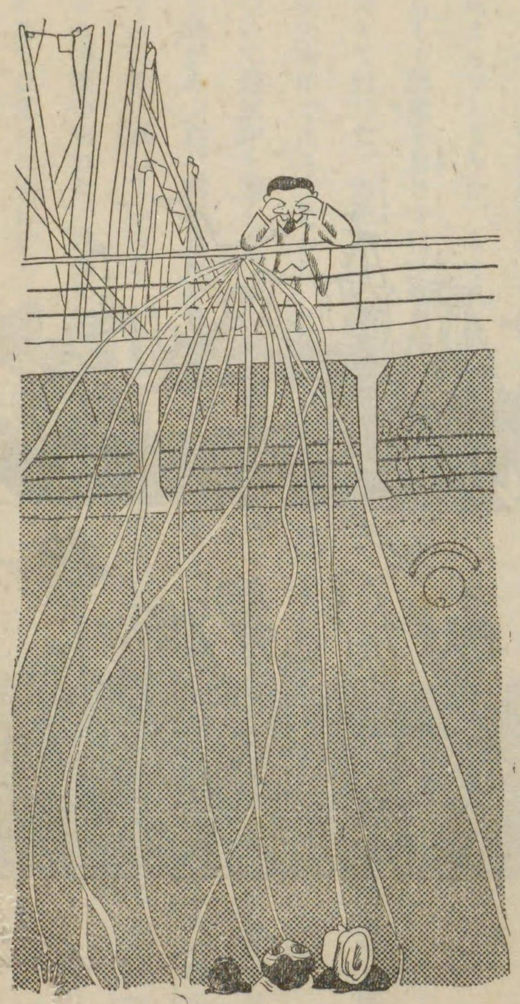
風が吹き出して來た。俺のみならず、舷上の人の手から棧橋の見送り人に傳つてゐる幾百十本の色紙は皆ひらひら風を孕んで、ひら〳〵音がする。そして弓の樣に吹き撓められる風に切らさじと大勢の群衆が風下の方へ流れて行く。突如漫畫仲間の人が手打の式を遣り出した。亮さんが音頭を取り、踊

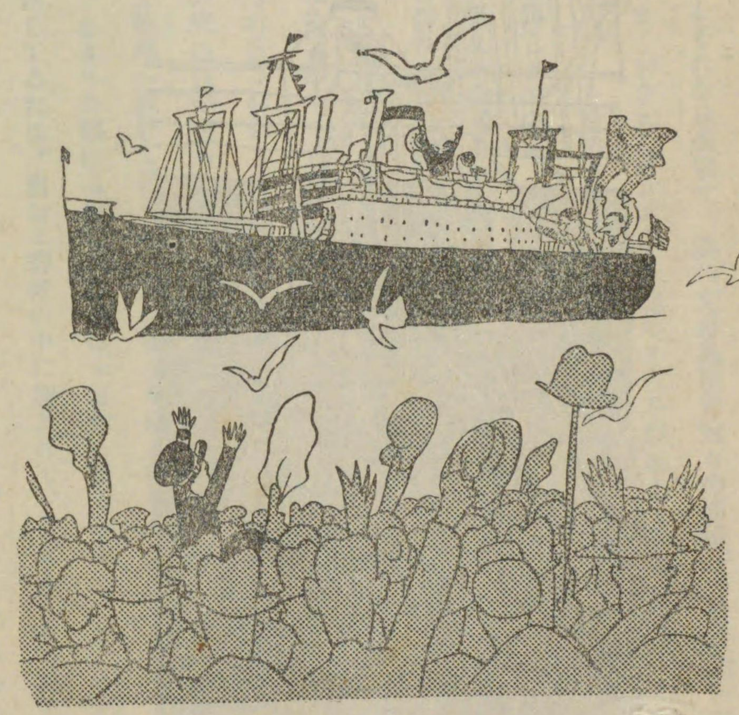
つてるのが見える。するとそれを見眞似て、隣の文房具屋見送りの團體が、手を叩いてみた。訓練がないから漫畫家の樣にうまくいかぬ、音がまちまちだ。それを輕蔑して漫畫家連は一叩き整然と叩いて隣の團體に、どんなもんだ〳〵と唆のかし、子供らしく挑み掛ける。そして團體が負けぬ氣になつて叩く、不揃の音を聞いて嬉こんでゐる。

風が一吹強く吹いて、おまへの色紐は紫、こどもへのは赤、家族親近へのは白、青、束の間の遊びのわざなれど、緣の糸の切れるのは嫌だ。で、色紐をいたはつて又もや風下の方へ移る。

船で最後の退船を命ずる合圖の音が鳴つて、暫くひつそりしてる。風の音のみが強く耳につく。劉亮たる樂隊の音。船は極めて靜かに棧橋を離れ出した。今は總てを放擲して、俺はおまへ達の顏を見失ふまいと、群衆に搖られ搖され行くおまへ達を凝視しながら色紙を持つた儘、艫の方へ艫の方へ移る。船と棧橋の間に海の波の色が光り出して色紐は遂に切れた！

俺は狂氣の如くなつて船尾へ馳けて行つた。俺は帽子を振る棧橋の上の人の後から、伸び上り〳〵するおまへが振る手巾、おまへの顏には後に殘るものゝ落付と力とを示し、俺に安心させ樣とする爲の明い笑を一生懸命笑出してゐたね。自分は群衆の中に埋まれて、こどもだけを高く差上げてるY青年、萬歲の蠻聲が群を拔ん出て、それと聞取れるM大學生の叫び。それらも、群衆の動搖に折り込ま





れてしまつた。旗の閃きのみ目につく、俺は俺の元氣さを見せると同時に、あくまで惜別の情を、手段のある限り現し續け樣と、洋服の上衣を脱いで振りに振つた。十圓のナイフが甲板の上にポタリと落ちる。その爲に新調の洋服は一遍で型を崩してしまつた。

『まだ見えるでしようか、もう見えないでしよう。』

紳士らしく態度を崩さずに手巾を振つてた都河氏が云つた。

室へ降りて行つた。旅鞄の上に腰を下して三人はホッと一息した。三人とは俺と都河氏と都河氏の息子の辰夫青年である。これは、この行に加はつて紐育迄留學に行くのだ。

一息ついて舷窓から覗くと、館山灣が鷹の島を抱へてゐる姿が見えた。晴れた海は紺色に且つ硬磁器の樣な艶があつた。船は布良の鼻を廻つた。まづかう出發したにはしたが、何だか忘れ物のある樣な氣がするので、案じてみると、わざ〳〵去年やつた腎臓病の再發を恐れ、京都から取寄せて持つて歩くつもりの藥を忘れた。持佛の釋迦像を忘れた。

高輪に來ては忘れた物ばかり——

東海道が大旅行であつた時には、この句で旅人の出立の心を穿つたが、今日の事情には添はぬ。

東京灣を出ては忘れた物ばかり——と改めずばなるまい。

◎第十信

船は陸地をさう遠く離れないで馳ると見え、後に蜿蜒した小山を背負うた房州の濱地が、丁度繪卷ものを繰り擴げるやうになほも續いて眼に入る。特に白く陽を受けて小楊子の立つ大きさに見えるのが野島崎の燈臺に違ひない。眺めて居るとそれ等や海の照りやが、ゆうべの徹夜に眼精疲勞を起した眼を痛く刺し、いはうやうなき哀愁を覺えさせる。僅か四ケ月の間とはいへ、異國の旅だ。水や喰ものも變る事であらう、毎日骨の折れる見物もする事であらう、ましてや俺は去年腎臓炎の大患をわづらつた。健康に前程の自信は無い。前途の果敢なさが胸に湧く。もし再びお前たちの手に戻れぬ事になつたら——緣起の惡い事は假初にも、想ひ出してはならぬ。想ひ出してはならぬと叱りつゝすぐ後に同じ事を考へてるのは、ひよつとしたらさうなる兆ではないか。すれば俺よりもお前達が可哀さうだ。俺は兎に角、今迄に可成り勝手な事をやつて來て、求めるほどの樂しみも多くない。いくらか骨も折つて生死の諦めもつけてある積りだ。然るにお前はこれからだ。お前は今迄、俺の生活の下積みになつて居て、これからが陽の目を見なければならぬ珠算盤になつてる。その責任が俺に無いとは云へない。他に家の子供や青年に對しても、俺はだらしが無くて賴み甲斐無き父兄であるかも知れぬが、それでも居なくなれば張合ひが無くなるのは必定だ。何としてもお前達の爲に無事であらねばならぬ。さう思ふと俺の痼疾の扁桃腺炎が氣に成り出した。眼らしては大變だ。うがひ藥を探さう。

大鞄の蓋を開ける。蓋の裏に手帖の紙を一枚破つたのが貼つてある。ペンで字が書いてある。

大　鞄

一、洋服全都　一、ネマキ
一、クツシタ　一、ハンカチ
一、ソフト、カラト並にカラー　一、ネクタイ
一、白手袋　一、ワイシヤツ

中　鞄

一、著書　一、スケツチブツク
一、洗面道具　一、部屋着
一、ボマアド　一、褌、二十五本
一、メリヤス、シャツ　一、ハンチング

Y青年の筆だ。探すのに便利な爲である。彼は大きな身體の癖に細君のやうな心遣ひをする青年かの子に與ふる世界一周の繪手紙

だ。さう思ふとほほ笑まるゝ。それに褌を二十五本と大仕掛に持つて來たものだ。一人でくす〳〵笑ひ出した。なほ一倍可笑しかつたのは、その後に注意として、(カラ、カフスは少くとも一日置きに取換へて下さい。シャツを不精せず洗濯に出さなくてはいけません。髭も毎日お剃りなさい。日本とは違ひますよ。)

と書いてある。子供扱ひが可笑しい。俺はこれで機嫌が直つた。女々しい考へも消えて仕舞つた。扁桃腺なぞはこの上天氣に脹れさうに思へなくなつた。藥を取出すのをやめて蓋を閉める。

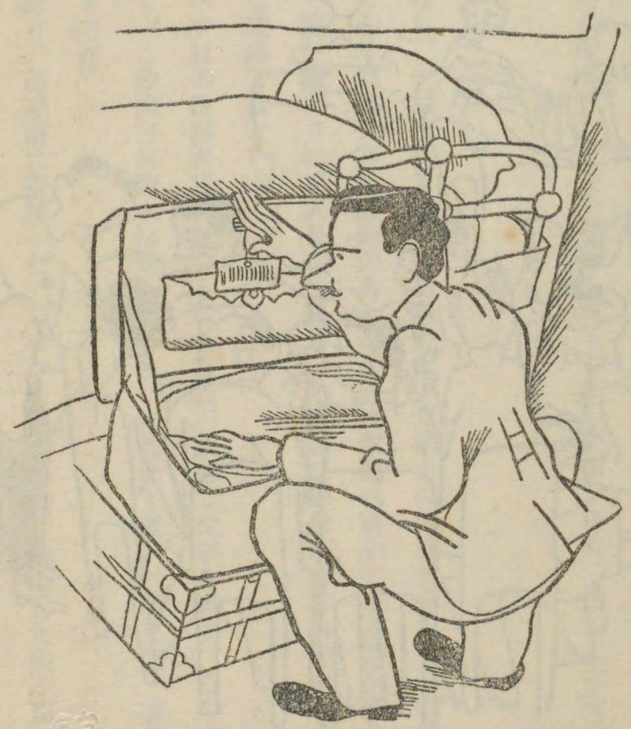
置時計のオルゴールのやうな音が船中の處處に鳴り出した。出て見るとボーイが金の片を置き並べた樂器やうのものを叩いて廻つてる。何の合圖だらうと思つてる時、支那人の若いボーイが、來て扉をノックした。

『御飯食べろ』

と云つて去る。

二度目の樂器で着物を整へ、一同誘ひ合はして食堂へ出る。

食堂は船の中で一番搖れぬ中央の位置を選んである。室内は米國流の派手で大まかな裝飾を施してある。大卓、小卓が配置よく並べてある。一卓に一人づゝ白い上衣のボーイが傍に正しい姿勢で立つ



てる。その卓(テーブル)の一つがわれ等の爲に定められてある。航海中は朝夕この卓に向ふ事だ。圓く環(わ)になつて、十人が並び切れる。ボーイが註文を聞く。献立が英語だから譯が判らぬ。一行の附添の通譯が問答したが、相手が支那人のブロークンの英語と來てるから要領を得ぬ。黑い上衣を着たボーイ頭を呼んで來た。

『何か喰りますか』

中々本筋の日本語だ、一同安心する。後で聞いたのだがこの男は支那人と日本婦人との間に出來た合の子ださうだ。そして彼等支那に國籍のあるボーイは米國へ着いても上陸を許されぬ。船が船渠(ドック)へ入り修復中も、一と處へ駐留されて又日本へ戻る。米國通ひの船に居て彼等は一歩も米の陸土(りくど)を踏めないのだ。氣の毒な現象ではないか。

兎に角日本で喰べつけの西洋料理に近いものを訊ね、誂へ、食事を濟す。この時初めて外人の手に成つた洋食を喰べて、この後三日許りはおいしがる。それは丁度、三度三度、宴會をしてるやうな氣持ちのする贅澤なものだ。

食べ終ると室へ歸り、部屋着に着換へた。ベッドに轉(ころ)がつた。飽滿した腹が都合よく眠を誘ふ。

春の日中の太平洋上の晝寢！ 初めの一二分の程は長閑に船腹を打つ浪の鼓に聞惚れて居たが、すぐ

に熟睡に陷つた夢も見ない。

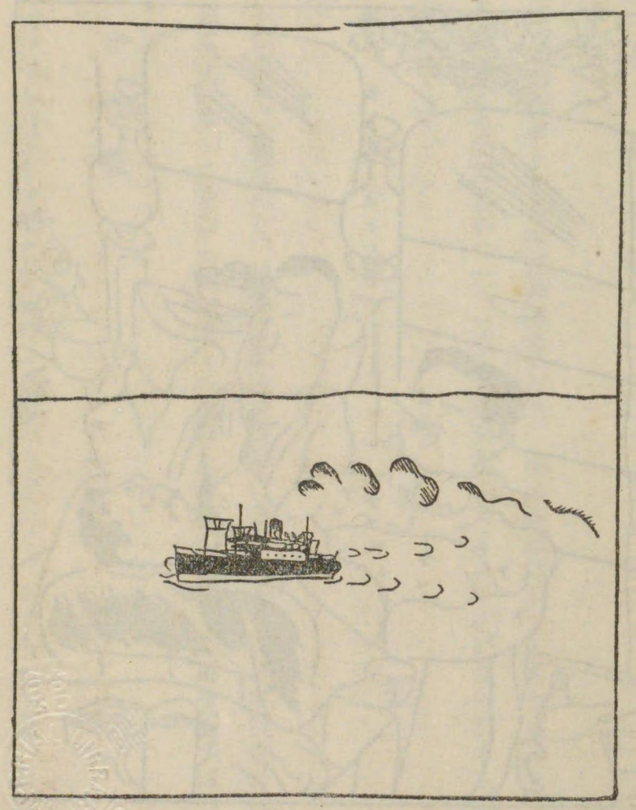
起きたのは夕方、陸地の影はもう無くなつて居る。浪も少し荒くなつてる。甲板へ出て眺めると四方全く眼に遮るものも無き海と空の唯中を、この一艘の汽船が落ち付いて駛つて行くのだ。この時位、わが乘る船をなつかしく思ふ時はない。

何人の仕業かこの天地の色を徐々に色褪せさせて行く。極めて徐々に。

夜になつて部屋の中に電燈がついてしんみりする。かうなつてはこの狹い一室が家庭だ。仲よくする事だ都河氏が主人で、俺が、細君役で、辰夫青年が息子だらう。晩餐を喰べ終り、部屋へ引取つてからボーイに湯を命じ、俺がカルピスを溶かす。都河父子が餞別品の何やかやを開ける。交際の廣い都河氏にはいろ〳〵なものが來て居る。部屋の中へ持込んだ花籠も一つや二つでは無い。俺のは一つも無い。少し景氣の惡い氣になる。さもしい料簡だが實情だ。

カルピスは知り合ひのその製造會社の專務が、いつの間にか船中飲用として運び入れて呉れてあつたものだ。行届いた好意である。

喰べ且飲み乍らいろ〳〵とりとめの無い話をする。愉快になつた。船中の退屈を紛はす爲にはこれに越した事は無い。この後もよく時を定めず談話に耽つた。その時は都河氏が、



『又喋べくらうかネ、荻生徂徠は煎豆を嚙り乍ら天下を罵倒する時が、一番得意の時だといつたが、本當だね』

こんな事を言つた。

湯が無くなる。さつきボーイと再三押問答して、湯の英語はホツト・ウオーターぢやなくてハツト・ウォーターと發音するのだと判つた。又、支那語ではカイスイといふのだとも判つた。再びボーイを呼んで湯容れを指して、

『ハツトウオーター、カイスイカイスイ』

今度は確かだ。

永い夜咄しにすつかり、馴染んで、終ひには辰夫青年の事を辰夫々々と呼び付けにする程隔てを除けた。そして、辰夫が眠るべく俺の上のベットへ匍ひ上る時に揶揄つて足を引つぱつてやつた。

◎第十一信

船中の生活や一行の人柄等を說明する爲には、船中で書いて、シヤトルへ着いた時お前に發送した私信をこゝに載錄しよう。一つには其當時のフレツシユな感銘を失はぬ爲め、一つには記念の散逸を

防ぎ度い。それは夜の船に人寢靜まつた後、機關の運轉の音を聞きつゝ、ライテングルームの書もの卓の黑羅紗の上で認めたものである。それは上の隅に救命器に船の會社の印の旗を打ちちがへたマークがあり、下の隅にシルバーステート號が航行してる圖を印刷してある滑つこい用箋に書いたのだね。なほ手紙だけで不充分と觀るところは、細說や補足を加へよう。

……持つて行つたもの丶中で、着物は、皆、成功した。絹のホワイト・シャツもよかつたし、支那服らしい部屋着もよかつた。あれで廊下を通つて便所へ行つてよい……献立表が判らないが、いろ〳〵研究してスープだの蟹にトマト、ソースをかけたものだの、魚肉に白ソースだの、成る可く日本で喰べ慣れたのに近いものを選む。量が多くてたとへば肉ものは皿の中に、肉の他に鹽肉が添へてあり、又その向うへ銀の容器へ馬鈴薯とか丸茹での玉葱とかゞ附く。スープの出る前にピックルといつて胡瓜の酸漬みたやうなもの、或は橄欖の實の鹽水漬が出る。

三日位までは流石西洋人の洋食でうまいなと思つて喰べたが、直ぐ飽て仕舞つた。

なにしろ濃厚くて閉口だ。あれ程の食しん坊の俺が、成る丈け野菜の多い淡白なものを選むやうになつた。ボイルド・ライスとて、炊いた飯も無いでは無いが、黄ろくて不味い飯だ。つく〳〵西洋人といふ奴はシツコイ筈だと思つた。夜食には洋食の外に簡單な支那料理が二三品出來る。これで稍々凌げる。献立表によつて銘銘勝手なものを選み取り、幾皿でも喰べられる。

食事の間は音樂をやつてる。支那のカンカラ太鼓、豆太鼓を遣ひ、ひようげた未開人の囃子を取入れたやうな曲だ。騒しくて趣が少い。（註、これは後に近頃米國流行の、チャズといふ曲目の一つと知つた）食堂に行くのに一々部屋着を、洋服に着換へ手を洗つて行くのが面倒だ。鹿爪らしく洋服を着て喰べるのは兜を着咽喉をしめられて喰べてるやうなものだ。

ネクタイが漸く獨りで結べるやうになつた。その前はみんなに結んで貰つて居た。（註、ネクタイが此時は本當に結べる積りで居たが、後にそれは手前勝手な結び方だと知れた。どうりですぐに捻れた）

朝飯を一寸書いて見る。先づチルド・グレプ・フルーツといふのを取寄る。夏蜜柑とオレンヂの合の子のやうな汁氣の多い果もの、輪切にしてある。砂糖をかけて喰べる。それからプツフド・ライスを貰ふ。ひまし麥を壓し潰し乾燥させたもの。穢ない譬へ方だか俺はこれを瘡蓋と綽名をつけた。それに牛乳と砂糖をかけて喰べる。飲ものは紅茶だ。小楊枝を呉れと口へ手を持つて行つて手眞似をしたら、間違へてハッカ砂糖を持つて來た。グリーン・チーといつて番茶程度の日本茶もあるが、容ものがコーヒ茶碗だから不味い。そしてそれにも牛乳と砂糖を入れて喰べろといふから參つちまふ。それで

直ぐ日本めし、しんこ、味噌汁、お茶漬などといふ言葉が一行の口癖に上る。一等船室の二十八號といふのに都河氏父子と自分と居る。並んだ室に一行が二人三人づつ居る。謂はゞハイカラな長屋だ。

洗面臺の棚に大きな魔法瓶に清水が入つてる。魔法瓶を備へてあるところをもつて、室の中の文明的の設備が推し計られよう。

俺の室はみな知り合ひだから住み好いのは判るだらう。

他の一行を紹介するとHいふ代議士は地方の新聞社長、電燈會社々長、その他この種の肩書をまだ二つ三つ持つてる五十恰好の紳士。東洋風の眼の釣上つた容貌を持つ。銀の茶瓶と綠茶の上等のを携つて來てる。室の中央へシーツを布き座敷をこしらへ、寢間着のまゝ一同輪に坐つてその綠茶を入れ乍ら、度度談話會を開いた。

Iといふのは、東京の目貫きの場所に大きな文房具店を持つてるそこの主人、中年の人。機敏な商人。

Nといふのは二十六七の青年。父は關西のある開港場の大金持ち、自分はその代表としてその土地の倉庫の專務をしてる。坊つちやん育ちにして何處か大人びて居る。無類の健啖家。

Oといふのは京都の縮緬屋の主人。恐らくこの人が一行中の名物爺だらう。洋服を着るのは今度初

めて、それから肉を喰ふのも今度が生れてから初めて、この人の靴が大きくて天保錢の形をしてるのが西洋人に餘程奇妙に思へたらしい。散歩する足下を顧つてみる。この頃は面倒臭がつて和服にセルの袴で食堂へも甲板へも出る。一層、注目を牽く。彼は濱納豆を持つて來た。時々貰ひに行く。京都風の一徹な愛嬌のある老爺。

Kといふ老建築家は一行中の年長者だ。六十以上とか聞いた。大概難かしい顏をして居る。でなければ默つて笑ふ。その息子が附添つて來てる。他に逆はぬ從順な性質、園藝家。至つてまめで何の用事でも頼まれて呉れる。俺の寫眞のお師匠。

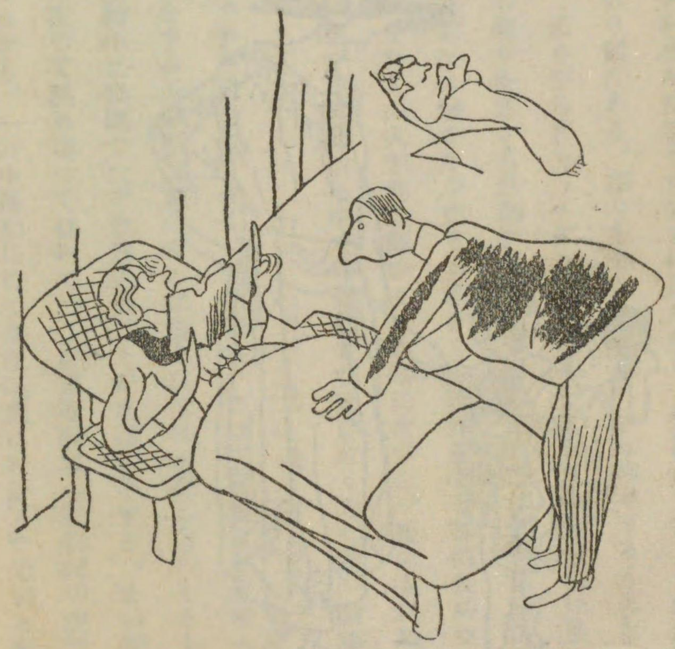
通譯のY君は仙臺人の一寸頑固なところを持つてる。然し仕事に細心で英語は手に入つたものだ。一人も惡辣さうな人は居ないから調和して行けよう。たゞ、この實務家許りの中に抽象的の人物の俺のやうなのが一枚加はつてるのは桁外れだ。この旅行中は恐らく詩味を語る事は出來まい。

船は金華山沖から二日目三日目とかけて愈々北行する。して北海道沖から千島と平行の邊まで達した。空も海も曇つてる中に、よく見ると紛雪が降つてる。

船は可成り搖れて一度は食堂の卓上の皿が滑り落ち、食べて居た西洋人がひつくら返つた。すると外の卓の西洋人は快活に手を拍く。滑り落ちた西洋人も別にはにかんだり怒つたりした顏も見せぬ。

みんなの方を見て笑つて一寸會釋をした。日本人間はかう淡白には行くまい。皿が滑らぬやう食卓の縁に枠を取付ける。コップが滑らぬやうコップの尻を濡らして置く。大きな船の搖れるのは搖り上る時から搖り下る時まで可成り間がある。搖り上つた時にこれから搖り下るんだなと待つ氣持ち。搖り下りつゝある時どの邊まで搖り下るだらうと氣を揉む氣持ち。實は叫聲を擧げ度い程だ。搖り下れば ちやうと打付ける蒼い浪の腹が舷窓から見透かされる。然し痩我慢は俺が得意の性質だ。胸が惡くても頭が痛くても我慢して食堂へは缺かさず出る。缺かさずに出るのは都河氏のファザーの方と倉庫會社專務のN氏と俺だけだ。それで三人が船に強いといふ事になつた。他の人は知らぬ事、俺だけは一生懸命で強くなつて居る。強いと言はれるので今更弱音が吹けなくなつた。食事の後には甲板の運動場へ出て歩く。

西洋人は、男と女と必ず手を組合せて歩く。相手の無いのは男と男と手を組んで歩いてる。西洋人といふ奴は仲のいゝふりをするものだ。あの中には腹の底では輕蔑し合つてるものもあるだらう。夫婦ものと夫婦ものとが運動中に出遇つた。妻君と妻君とが立話しをする。その間良人達は默つて双方睨み合つてねばならぬ。往つて戻り戻つては行く。この事を俺は『動物園の虎』と名付けた。檻の中の虎の運動と同じだ。それから、一行中運動に行く事を『虎に行かう』で判る事になつた。



この虎をやると船暈は餘程紛れる。西洋人の歩き方は身體が定まつてスツ〳〵と規則正しく歩を運ぶが、俺達の仲間のは蛙股で家鴨の歩いてるやうだ。

西洋人の大人は男も女も顔の線がはつきり〳〵過ぎ、尺度でひいたやう。親しみが無い。女でも傍へよると顔中に白茶の生毛が一ぱい生えてる。それに比べて子供は實に可愛らしい。二人の兒が四つ匍に向き合になり、『ヴヴ〳〵』

と犬の嚙合ひを眞似をしてる。日本の人形を大事に抱へて母親に手を牽かれた女の兒もある。日本から歸る母子であらう。母親は大概籐椅子に寢て雜誌か小說を讀んでる。日本人のやうに、附添ひきりでは無い。食事の時夫婦で着物を着換へ食卓に出るが、小兒は室の中に殘して濟ませる。情合の無いものだ。親が子には情合ひは無いが、夫が妻に對しては情合ひが有り過ぎる。少くともさう見せて居る。細君が甲板へ出て來る前に、彼女の讀む書物を先に持つて來て籐椅子の肱掛けに載せて置く。そして毛布を擴げて置く。細君が來てその中へ横はると、上等の柏餅のように丁寧に包んでやる。まだある。時々見廻りに來て、暑いと云へば一枚剝いでやり、寒いと云へば包み重ねてやる。鼻の下が長いものだね。然し實は俺もお前に對して知らず〳〵この柏餅主義に成つてる樣だ。故にこれだけは惡口は云へ無い。

◎第十二信

船にジョッフル元帥が乘つてる。夫人も一しよ。元帥は髭も頭も白い。餘程の歳らしい。體格は大きいが猫背でよぼ〳〵してる。右の足が少し惡いので杖を老木の支へ木のやうにいつでもついてる。この老爺が歐洲戰爭に勇名を轟かした驍將かと思ふ。羅漢のやうに突出で垂下がつてる白い眉の下に小さい眼が柔しく光つてる。自分が歩行が不自由なのに食堂へ入る時なぞは夫人を腕に椅らせてかばつてる。晝間よくソシアル・ルームのソファーで居眠りしてる。

どう見ても好々爺だ。劍を執つて戰ひ勝つ人らしくない。

總て一つの和に卓越した人は却つてその道の臭みが無く、人間として丸く浮上つてる。俺はこの間來朝したアインスタイン博士と五六日同伴してこの感を愈々深くした。

ジョッフル元帥は日本へ使節として來た。その歸りを亞米利加の道路鐵道王ヒル氏が迎へ、自國の平和塔の除幕式をさせに連れて行くのだ相な。

ヒル氏は脂肥りに肥つた鷲のやうな眼をした老紳士。動作應對振り、如才なく精力的な米國式である。

彼と少し話をして見る。

『神は海を作つたが船は與へて呉れなかつた。そこで人間がそれを造る。神は野を造つたが道路は與へなかつた。そこで人間がそれを造る。道路ぐらゐ大事なものは無い。武勇に秀でたジョッフル元帥でも、道路が無ければ日本へも亞米利加へも行かれまい。――』

總てをわが田に水を引く道路王らしい解釋。

これが彼を成功さした由緣でもあれば又彼に一種の商人臭を帶ばしめる原因でゝもあるだらう。

『日本の道路はいかゞですか』

俺はかう訊いて見た。

『一たい、日本に道路がありますか』

と皮肉な顏。成程、一言も無い。

そのヒル氏がわが一行の通譯さんのところへ來り、一本の和文の手紙を出し譯して呉れろといふ。差出人を見ると京都の縮緬屋さんだ。宛名はジョ元帥。文章の意味は、自分は豫て世界一周の志があつたが、歐洲戰爭勃發の爲め目的を達し得なんだ。今度漸く本懷を遂げるのもみな閣下が戰亂を平定のお蔭である。聊か謝意を表する爲め閣下の手を通じ戰禍によつて、荒廢した市村の復活に義捐し

たい。卽ち米貨五十弗を添へるといふのである。

その本文たるや、こんな簡單なものでない候文に演說口調を交へ、自分は十何歲より年期奉公してその間辛苦を重ねなどいふ身の上話も入つてる。然し乍ら眞情がその間に逆つてホロリとさせるところがある。義經の腰越狀にも比すべき名文だ。

『とてもこの妙な味は英語には寫せない』

と通譯氏は首を捻つた。

この手紙から一行は京都の縮緬屋さん仲々隅へ置けないといふ事になつた。俺は、一

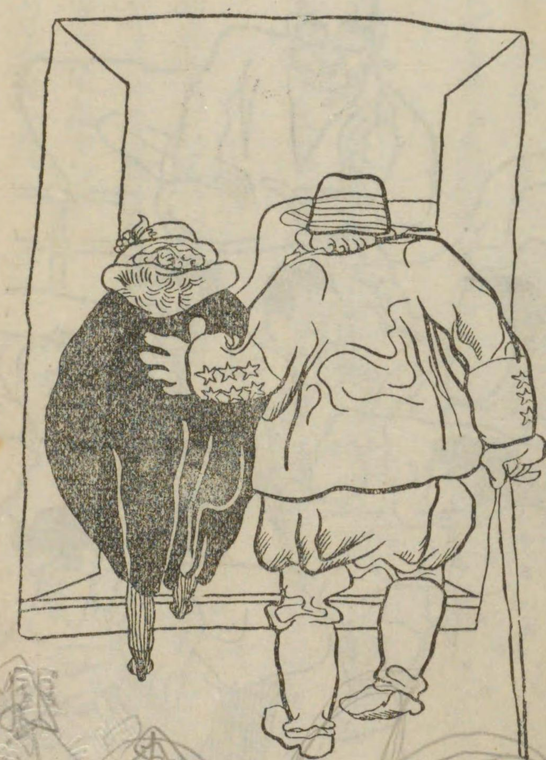
『あなた、どういふ風にして元帥に渡したのです』

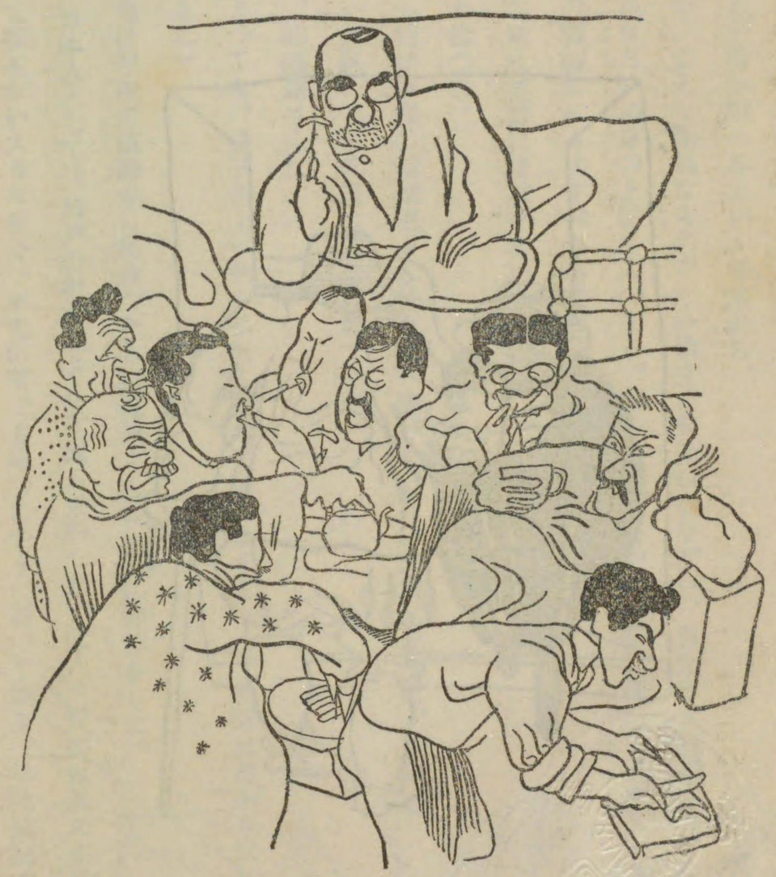
と訊いてみた。縮緬屋さんは、

『相手が貴人やよつてな。扇子の上へ金と手紙と戴せて出しよりました。元帥は何やら云やはりましたが、薩張り判らん』

といつた。元帥は甲板で運動中に出會つたら縮緬屋さんに懇に握手をした。

われ等の外に日本人としては神戸の材木屋さんが四人乘船した。此人々は奈良漬の小樽を持つてる。訪ねて行つて柔らかい大きな瓜を一本鬼の首でも取つたやうに貰つて歸り、早速代議士の例の緣





茶を銀瓶に入れ、綠茶會を開く。船暈で寢て居る文房具屋さんまでが起き上り、和服の寢卷だから『山門五三桐』の南禪寺樓門上の石川五右衞門のやうな姿をして小楊子の尖の奈良漬の一片を大事さうに喰ひ缺いて行く。店が手廣くても、巨萬の富があつても、この揚合は奈良漬の一片にしかぬ。金も位も、船中では效をなさぬ。みんな人間一個の元手に還つて剩りあるものは與へ、足らぬものは乞ふ。難船すれば一切空だから自づと睦び合はざるを得ぬ。これを以て船中の功德とする。奈良漬のお禮に俺が繪を描く。

話し殘したが俺は船中へ入り立てに便所が判らなかつた。で、ボーイに訊くと默つてぐい〳〵引つぱて行つた。入つて見ると風呂だ。どつちみち命に關る程の間違ぢやない。俺はその儘長閑に湯に浸つた。

出てからやうやく便所を見つけ入つた。中にはもう京都の縮緬屋さんが居る。そして西洋式の便壺の上へ立つて、犬のように片足を揚げて見たり下げて見たりしてる。どうしたのだと訊く、

『樣子が變つたので具合よう出やへん』

俺は便所の中で笑つて仕舞つた。

尾籠ついでにもう一つ書く。ある時、仲間の一人が便所へ行つたら、便所の圍の下の隙から四本足

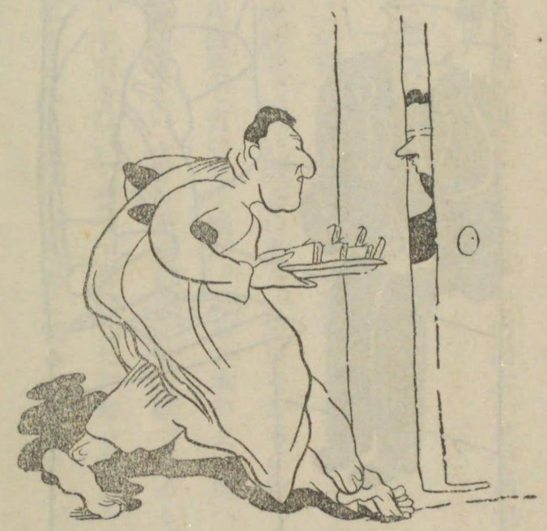
が見える。して何か叱る聲が關西の倉庫會社の專務らしい。譯を尋ねると專務は掃除の水が出るものと思ひ壁の凸部を押した。それが呼鈴であつた。ボーイが入つて來て仕舞つた。去れと言ふ程ボーイは不行届を詰られるものと思ひ用を果さうとする。その四本の足であつた。

◎第十三信

二十二日が二日あつた。この譯の說明をいろいろ聽いたが結局判らず仕舞になつた。

無線電信の室は船室から離れて、高い船上にある。電信を打ちに行つた。歸りを若い技手が引留めてこれを見て吳れといふ。片假名で書いた手紙だ。ある日本の女に與へる手紙である。あなたのいふ通り身體を丈夫にして再會を期すといふ旨を覺束ない片言で綴つてある。そしてその手紙を書く爲めに彼は國語讀本を傍へ置き、字引をひいて習つてる。これ程若き米人を熱心にさせるある女とは一體何者だらう。問ひ訊して行くとそれは神戸のさる町に住み、名をローズさんといふ。その寫眞も見せたが下品な洋裝だ。

日本婦人の癖にローズなどゝいふ洋名をつけ、下品な洋裝をしてる。眞面目な淑女で無い事は判つてる。然し若い技手は眞面目だ。手紙を認して貰つたのち、



『これローズさんに教へて貰ひました。あなた、きゝましよう』

さういつて唄をうたひ出した。誰でも知つてる、俗謠『丸髷に結はるゝ身をば持ち乍ら――』といふ深川くづしであつた。

唄ひ終へ、

『この唄のわけきゝました。いゝ唄であります、ございますね』

といつた。それから後にも行く度びに同じ唄を唄ひ、節を直して呉れといふ。

今更事實を明し敎へ諭(さと)しても始まらぬ事だ。それより雪の太平洋上、俗謠を唱ふのも後の思ひ出になるだらう。俺も大きな竹法螺のやうな聲を出して唄つた。聲が切れると船の機械のゴトン〳〵云ふ音が眞面目になれ〳〵といふやうに心に響いて興醒めた氣持ちだ。

遣り殘しの仕事も少しは船中へ持ち込んである。責任の通信文もそろ〳〵書かねばならず、讀書も怠(おこた)つてはならぬ。さう思ひ乍らもう三四日で船がつくといふのに何にもして無い。雜談と虎と晝寢と食事で毎日を送つてる。その癖退屈はし切つて口癖に飽きた〳〵といつてるのだが何にもしない。都河さんが始めたら俺もやらうとかう思つてるのだが、その實始められるのを心中恐れてるところもある。文房具屋さんが上陸の用意に船の床屋で頭を刈つて來た。すつかり米國刈りにして周圍を削(そ)つた

やうに短く頂上だけ、黑く丸く唐子人形のように殘されてある。その後から行つた縮緬屋さんも同じく唐子人形になつて來た。その形が奇拔なので、それを取卷き批評の警句を吐く事で優に半日を潰して仕舞ふ。喋り飽けばすぐ何か喰べ度くなる。日本式の菓子も殘り少になつた。

『鹽煎餅は歸る迄補充出來ないから少し取て置かなけりや。洋食で食慾を無くした時あれを喰べると氣持ちが癒るよ。藥用として少し取つて置かう』

いひ乍らも罐の中を覗いてはもう一枚〳〵で手が出る。

今夜も十二時近くまで室の中の三人喋り續けて腹が減つた。

『辰夫、何か喰ひ度いなア』

俺がいふ。

『甘納豆はどうだね』

と都河氏、

『も少し腹に溜るものが欲しい』

『僕も欲しいんだ。僕行つて何か貰つて來ら』

辰夫は扉を開けて出がけに靴を脫いだ。裸足の忍び足で厨司部屋へ行き又忍び足で戻つて來た。

サンドヰッチを銀盤に盛つて來た。

『僕ね。夜中に喰ものを取りに行くのだから音が立たないやうに行つたのだよ。コツク部屋へ入つて掛け合つて貰つて來た。こんなに吳れたよ』

俺達は泥棒の分け前でも貰ふような氣がした。聲の響かぬやうに忍び笑をしては喰べた。

サンドヰッチを喰べて居ると鼠の鳴聲がする。船中にも鼠が居るのだな。

『この鼠め』

日本語で叱つたが鳴聲はやまぬ。

『ラット、シツ〳〵』

英語で叱ると鳴聲は止まつた。

『ソウラ米國の鼠だつたんだ』

俺達は又笑つた。

夜食にはこの頃例のボーイ頭が氣を利かし、白飯に牛肉と葱、椎茸、豆そうめんの煮付を出して吳れる。象牙の箸も貸して吳れる。最初の一二夜はその爲め船暈運も推して食堂へ出て、

『これなら幾年だつて船に居られる』

といつたのも、黴梅が甘過ぎるので、すぐに閉口し、二三夜で又部屋へ籠城を始めた。

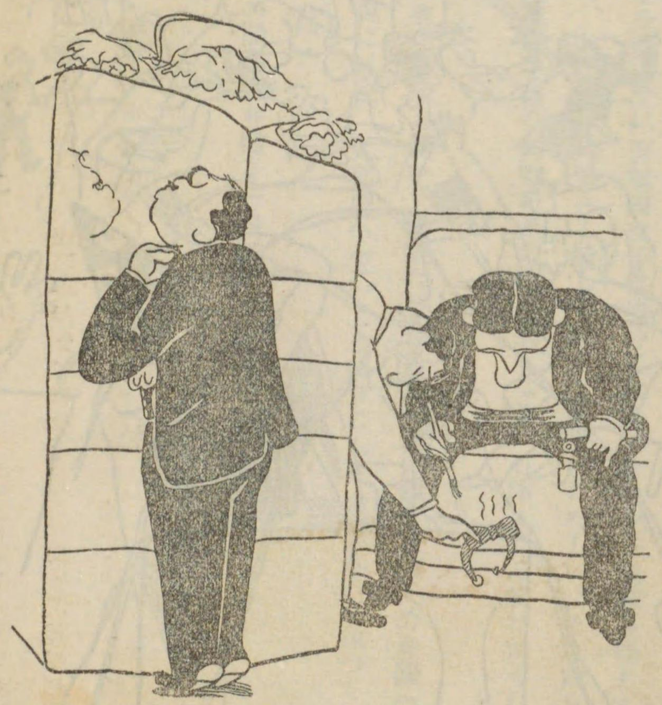
舞踊會があつた。食堂の音樂隊が上へ出張り甲板には砂を撒く。淑女の相手になる紳士は、よく見ると見覺えの船醫や事務員等だ。船醫は船中一向病人が無くつてぶら〳〵して居るが、踊はうまいので今夜は淑女達から引つ張り凧だ。

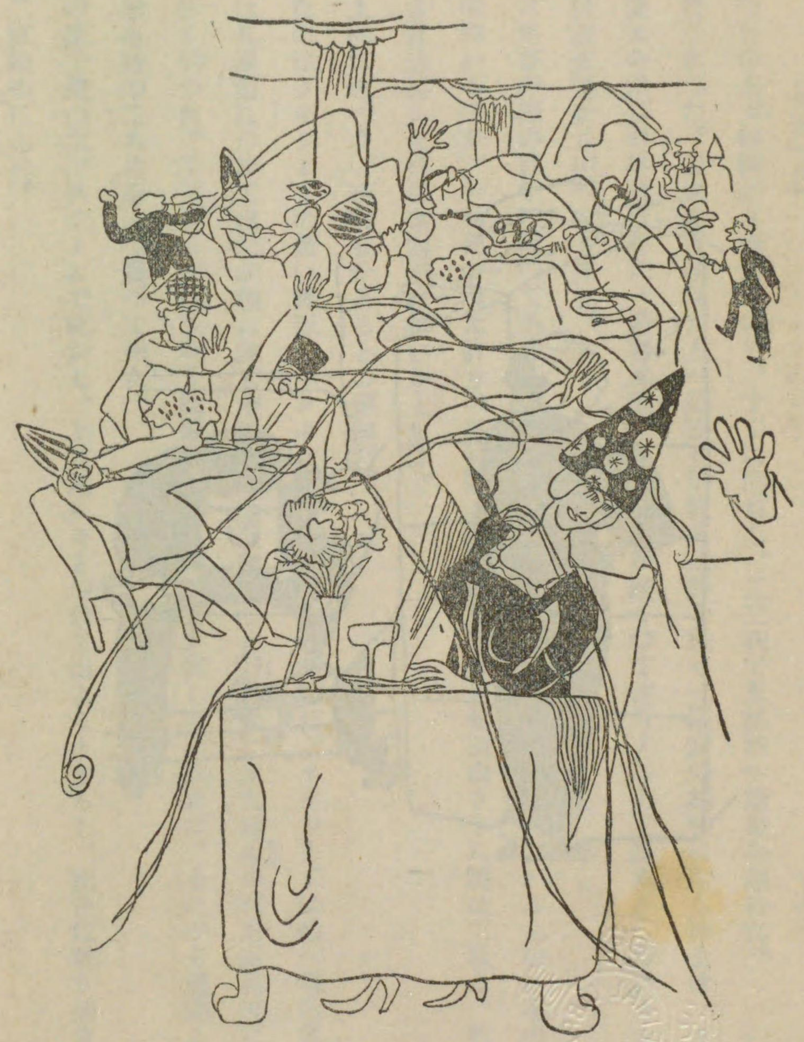
船醫は乘客の踊の相手に雇つてあるものだとは今覺つた。それから西洋婦人といふものは踊の上では潔癖の無いものか、一寸出會つた許りの船員達と頰と頰を密接させ面白さうに跳ねて居る。然しこの氣輕さは米婦人だけの傾向では無いかと思ふ。

船は上陸に近づき、晩餐會があるとの通知だ。

困つたのはタキシードの黑い蝶形のネクタイを仕舞ひ失くした事だ。タキシードは船へ乘込當時、一二夜は几帳面につけて出たが他に誰も着てるものは無かつた。日本に居た時生半可な西洋通に赫されたものと判つた。で、どこかへ入れて仕舞つて判らぬ。どう探しても駄目だ。それから通譯さんが白の蝶形を持つてるのを一つ貰つて來た。

矢立の墨で塗つた。スチームで乾かし、上首尾々々とつけて出ようとすると、灰色に乾き過ぎた。そこで二度染めにした。





この夜は晩餐の献立に別に變りは無いが、卓上に銘々への紙製の帽子、二人で引つ張るとパンとはじける玩具、卷いた色紐、鳴る風船等が置いてある。

男も女も紙の帽子を冠つて一同氣輕な子供の心になる。それから風船を鳴らし玩具を引つ張りはじかせる音。ピーく、バチヤン、キユー騷しく賑かな事おびただしい。それから色紐を卓から卓へ投げかける。瞬く間に五彩を放つ蜘蛛の巣の中に擒となる。日本人から投げかくれば米人側からも投げ返す。

この處移民問題も有色排斥も無い。愉快だ。たゞ若い青い服の美婦人の身體へは八方から色紐が集まる。然しその女は現に子供一人部屋へ置いてきぼりにして來てるのを知つてるから俺には興が醒める。

上機嫌になつて卓の間を踊り廻る一組二組も出來た。

◎第十四信

明日の晩つくといふので一同緊張する。都河氏は書物室（ライブラリルーム）へ閉籠つた。これで俺も彈動（はずむ）がついた。部屋の一側へ毛布を敷き中鞄を机にした。書き出したものは東海道五十三驛の文と繪だ。これは著書の書き殘りを持つて來て仕末をつけるのである。米國に近い海の上で靜岡の茶摘唄の話や、京都の壬生（みぶ）狂言の繪やを書いてると、洋食に飽々した心に妙に影響する。一寸日本へ歸つて直ぐ出直して來度くなる。

夜も更けて二時三時になる。機械の音と浪の音許りだ。夫許りだと思つて居ると冴（さ）えた頭に二つの音の間から不思議な叫聲が聞える。

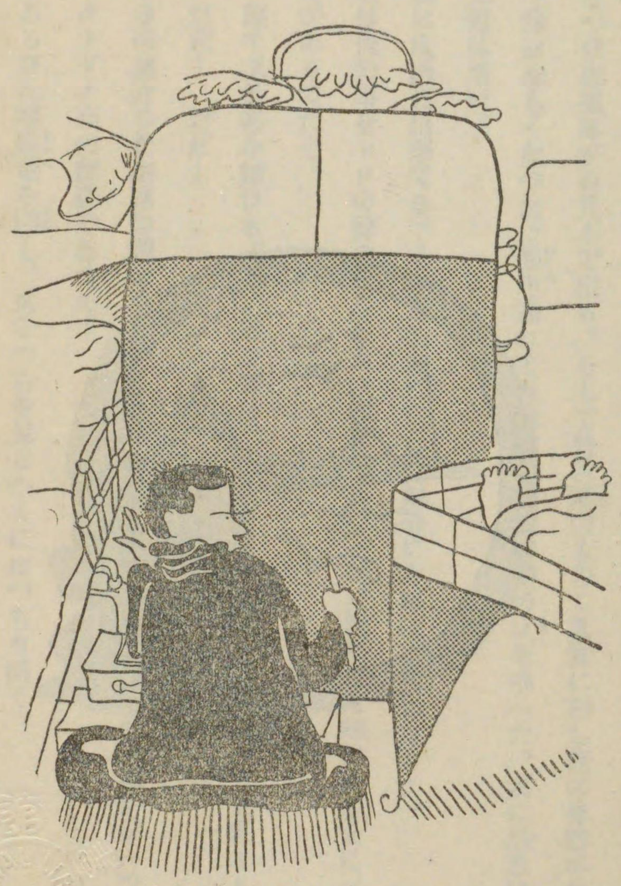
『おとうさん――おとうさん』

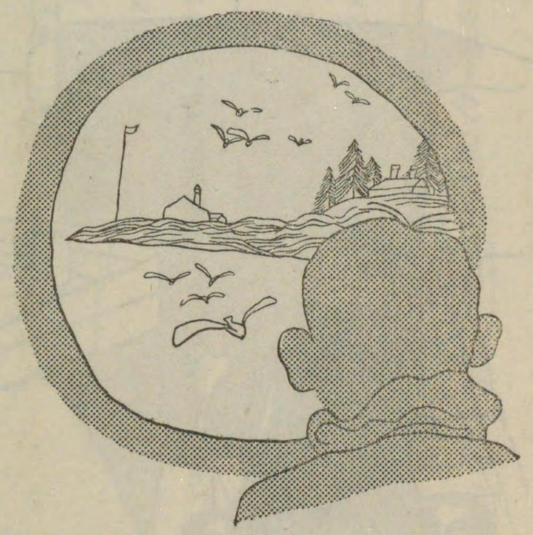
それはお前の呼聲である。

『おとうさん――おとうさん』

聲の音（おん）といひ節奏（リズム）といひそつくりだ。筆に籠めた心はいつの間にかその方へ奪はれて居る、つひ、

『え？』





とか、

『何だ』

とか言ひつけの返事が口元まで出る。そして普段家のものゝ眞實に對し俺の身勝手の事のみが思ひ出される。俺は悲しくなつた。頭を垂れてお前達の爲に祈禱の文を唱へた。家に居る時にもこの通りであれば問題は無い。

だが人間は皮肉に出來てる。その人の前に居れば割合に有難味を感じないよ。

然しお前は俺の事をセロの絲のやうな太い神經だといふが、俺だとて時には本當にバイオリンのやうになる時があるのだぞ。

晝間一寸寢て又仕事を續ける。第二夜が來た。夜十時を告げられて左舷へ出て見ると、

灯だ！　灯だ！　灯だ！

今迄張合ひの無かつた空虛の闇の中に少くとも生ける息吹きを感じさせる相手が一つ見えた。

それはビクトリア島の燈臺であつた。

灯の瞳はある僅な間眼蓋を閉し、又こつちを見るやうにばつちり開く。

一つの胡麻程の灯だがあれが後に米大陸を控へてる證據になるのだ。この小さき光を媒介にして草

や木や家や人やを自由に生息さす土の大塊が俺に語りかけて居るのが感じられる。さう思ふと陸の精氣が俺の身體に浸み移るのを覺えた。魂がしつかりした。

灯の眼よ！　殖えよ〳〵！

子供の心になり胸に手を置き、さう願つて居ると頓て三つの灯が見え出した。

他の人も、

『まづこれでやつと無事につけました』

『こゝからなら難船したつてねえ、何うにでもして陸へ着ける』

こんな事を言つては祝し合つてる。一同安心して部屋へ引取つた。

その夜も俺は夜通し仕事を續けた。時々筆を留めて樂しみにして舷窓へ寄つて見る。灯は殖えたり減つたりした。

曉の色が透く頃になつて船は停つたらしい。あたりが急に靜かになつた。覗くと祝福すべきかな。すぐそこに陸が見える。踊る心を靜めてなほもよく見るとそれは一つの岩鼻である。粗い皺の入つた嘴角が突出て居り、赤い屋根の番小屋、旗竿に旗が立つて居る。それはどう見ても石版繪で見覺えの、外國の色なり形なりだ。

『外國だ！　外國だ！』

俺は狂喜して都河氏を起した。都河氏はみんなを起し廻つた。雜誌の讀者に對するまめな處を出したのだなと思つて俺は笑つた。それから甲板に跳ね出た。

岩鼻からずつと大きな陸に續いて居り、陸は大部分寒帶の樹らしい森林に覆はれて居る。然し乍ら處々に赤屋根の洋館の一層外國臭いのが點在して居る。

停船した船の周圍には白い鳥が群をなして集つた。それがピョ〳〵と鳴いて居る。船の腹に見も慣れぬ丸い袋のついた大きな藻が浮き寄つてる。われ等が船は祖父のやうな太い汽笛を鳴らすに對し、孫のやうな細い可憐な聲を擧げて一艘の豆のやうな汽艇が近づいて來た。檢疫船さうな。

一と休みして船は動き出した。

船は森林の覆へる高き陸と陸の間の内海のやうな處を行く。船中では移民官の旅券調べが無事に濟んだ。今度は檢疫だといふ。いくらか心配し乍ら指圖される儘に歩いて行く。何處にもそれらしい人が居ない。この儘進めば入口から甲板へ出て海へ落ちて仕舞ふ。

檢疫醫は普通の服裝をして、旅客に惡感を與へぬやう目立たぬところに立つて居たのだ。顏色だけで判じて通すのだから判なかつた。

晝飯を食つても内海はつゞく。間にピクトリア港の棧橋に一寸立寄る。こゝは英領加奈陀。宙に浮く心には晩餐も咽喉へ通らぬ。それからしばらく經つて遂にシヤトルの棧橋についた。

その大きな市の夜の景色！

繫船の入江の先に一つの長橋があるらしく闇の中に更に濃い黑線が横に長く引かれてある。その上に流星のやうに自動車の灯が飛ぶ右手へ大きく丘に高まり觸れば溶けさうな青い灯の珠數玉が縱横無盡に張られてある。灯の寶玉中の王として處々に白金の光を放つ金剛石も澤山縷められてある。丘の陰に遠く海と水平の位置のところは極めて賑かに灯は集まり重ね、扁平の强き發光體をなして居る。空に白い息を吐きかけたやうなサーチライトも七八ではきかぬ。

中にも縱或は横に組まれて光を放つ歐字綴りのイルミネーション。それが如何に遠き國よりの旅人に對し、外國へ來たといふ感じを强く與へたであらう。

許されて船を下りる。下りたまゝに一つの建物に入る。稅關だ。アルフアベット順に區分けしてあり、各頭文字に從ひ部屬の場所に荷物を卸して檢査を待つ。混雜の中ゆゑ一行の連絡も亂れ勝ちだ。俺一人のところへ雲突くやうな大男の官吏がやつて來て鞄を開けると手眞似をする。

◎第十五信

鞄を開けてやると可成り綿密に調べた。調べ終へ今度は俺れが抱へてる新聞でくるんだカルピスの罎に眼をつけた。米國は禁酒國アルコールの混つた飲料は一切入國させぬ。指してむづかしい顏をして何やら云ふが判らぬ。胸が少しどき〳〵し出した。

『ソフト・ドリンク〳〵・ナットワイン』こんな英語でいくら强くいつても通ぜぬ。しまひには引つたくりさうにする。そこで俺も腹が立つた。例の十圓のナイフについてる口金開けを抽出し、罎の口を抜いて稅關吏の手首を摑へ掌へ垂らしてやつた。稅關吏は猫が性の判らぬ食物に逢つた時のやうに恐々嗅いでみたり指で觸つて見たりしたが俺れが、

『ブリース〳〵』

といつて手を口へ押し當てがつてやつたものだから、思ひ切つて彼は嘗めた。嘗めて眼を丸くして、剽輕な表情をして、

『オーイエス・ベリーグード』

と云つた。馬鹿な奴だ。

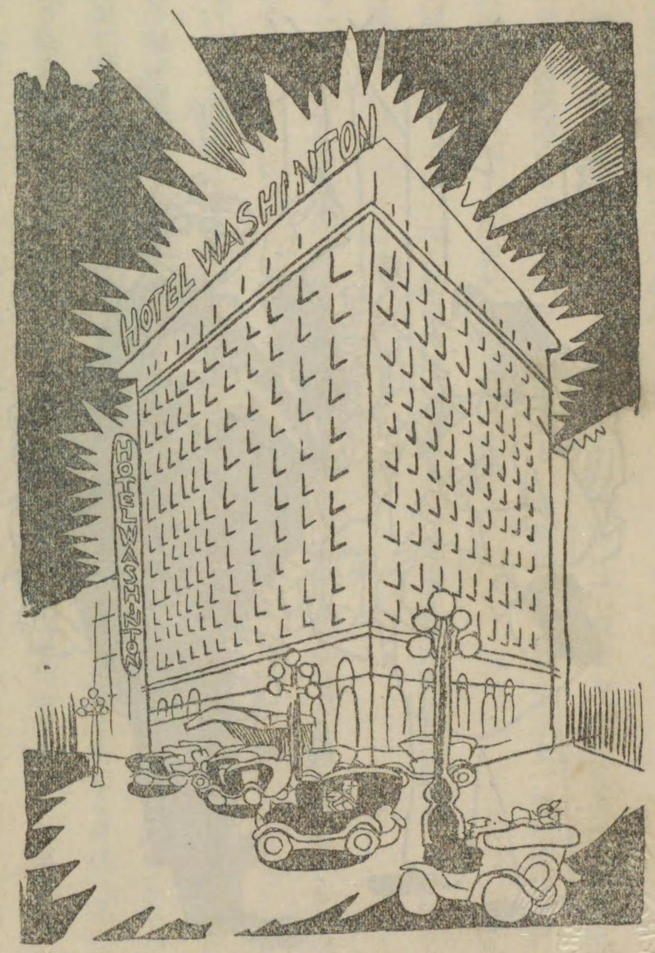
土産の人形に税を取られた人もある。

信濃の代議士は飲酒家だ。日本からウヰスキーの罎を二三本携帶し、これを首尾よく持込まうと醫者からこの者神經衰弱にてアルコール分必要也といふ證明書を貰つて來た。證明書は役に立たなかつた。洋酒の罎は船のボーイに永久に預る事になつた。

それを受取つたボーイは一たん船中へ持つて入り、今度出て來た時は赤い顏をしてフラフラ場内を歩き廻つて居た。

それでも一同はぐれもせず、自動車に分乘して町へ入つた。踊る心で自動車の窓から外の樣子を見究めようとする。

闇で寂しい道でも兩側には四角い高い洋館が建並んでゐる。闇を射破る電燈の光は日本で見られぬ目も眩む程の強い燭光だ。自動車はアスファルトが石盤板のやうに滑らかに敷き詰められた上を滑つて行くのだから、過ぐる道に丘の昇降があつても可成りな急速力で走つて居ても身は一とところにとどまり、輕き快き腰かけの革布團の彈動だけ受けて、丁度雲の上を彷徨するやうな氣持ち。處々に整頓して並んで建つてる繪看板の立派さ、一枚が大きく丁度八疊敷ぐらゐある。活動の看版らしく逞ましき壯漢が美婦人にピストルを擬して居る。祕密を想はせる男の黑き深き隈に配して、花の如き女の



顏は米國一流の氣の利いた浮氣な輕い線で觀者を牽きつけねばやまぬ。畫面のニスがアーク燈の白光を照り返す。たちまちに認め、たちまちに逸し去る影像ながらにその印象は米國初上陸の今の自分の心持ちに結びつき、丁度自分も傳奇小說の中に在る人のやうに思ふ。

間も無く馬鹿に賑やかな大通りへ出て、車は急に道の片側に吸ひ寄せられて行き、一つの大きな建物の下に停まつた。それはニューワシントン、ホテル。

入口には硝子で風車のやうな仕掛に出來たものがある。硝子戸と硝子戸の羽翼の間に一人づゝ挾まると、廻轉につれて室へ送り込まれる譯だ。

中は磨き上げた大理石の太い柱、電燈が煌煌と照つて居る。異花珍草が惜し氣も無く盛つてある。贅澤な安樂椅子に腰掛けて私語するもの、立つて談笑するもの、室中一ぱいの男女がみな異人だ。いよ〳〵以て本當に外國へ來た氣がする。好奇心の滿足と嬉しさが足から頭へぞく〳〵と擽つたく上る。たゞ、この四圍の人々の大柄でのび〳〵した姿勢振舞に對し、われ等一行の猫脊で蛙股連が、人質になつた田舍の士のやうにキョロ〳〵し乍らも、どこか日本人だぞといふ片意地を容態に示して居る。われ乍ら情無くも可憐に想ふ。その上固まつて佇つて居る一行の周圍には、赤毛布を吹聽する大小鞄を山と積上げてある。

『旅の恥は掻き捨て』

この譬は普段良く無い譬だと思つて居たが、ある場合には實際人を救ふものだといふ事をこの時痛感した。

漸く室が定つた。

他の人は二人一室、俺は英語は片言でも何とかかんとか埒を開ける蠻勇を持つてると通譯氏に認められ一人で一室を占領した。

廊下で別れて俺は部屋へ入つた。荷物も間違ひ無く屆いた。

俺が兎も角も始めて外國で占領した外國の建物の一室を知らせよう。

いゝ室だ。廣さは二十疊位ある。米國の事だから、こまかい裝飾は無いが、大きく豐かに全體の調子を整へてある。ハイカラな化粧臺が一、書物卓が一、肘掛椅子が一、搖り椅子一、金色の柱の建つた大きなベッド、それに浴室がついてる。

腹が減つてるところへ通譯氏が氣を利かして紅茶とサンドヰッチをボーイに運ばせて呉れた。ボーイは大きな若い米人だ。誰も居ぬ室に夜更けて異人と一しよになるのは一寸怖い。でも勇氣を出して心付の銀貨をやつたら大きな異人が子供のやうな嬉しさうな顏をして引退つた。異人を使ふのも案外容易いものだと得意と共に安心する。

さあ一人になつた。部屋は俺のものだ。この立派な化粧臺も搖り椅子も書物卓も勝手に使へるのだ。俺は嬉しくなつた。化粧臺の大きな鏡に自分を映して見た。案外ハイカラになつた自分の姿が現れた。

『君大分、得意だね』

俺は鏡の俺に向つてかう言つた。したら鏡の俺がにやりと笑つたから、本物の俺も笑つたに違ひ無い。

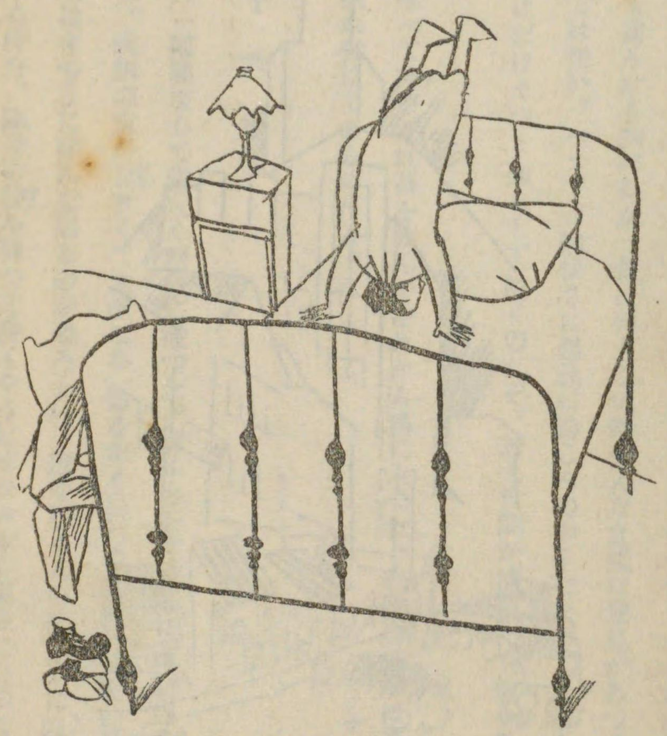
椅子に一々腰掛けて見る。肘掛椅子に椅ると大臣になつたやうな氣がする。此度は搖り椅子の番だ。腰を深く入れてゆらり〳〵足で彈ねて身體を搖ると、ゆつたりする。金持ちの隱居のやうな氣持ちがしたり、搖籠の中の赤ン坊のやうな氣がする。

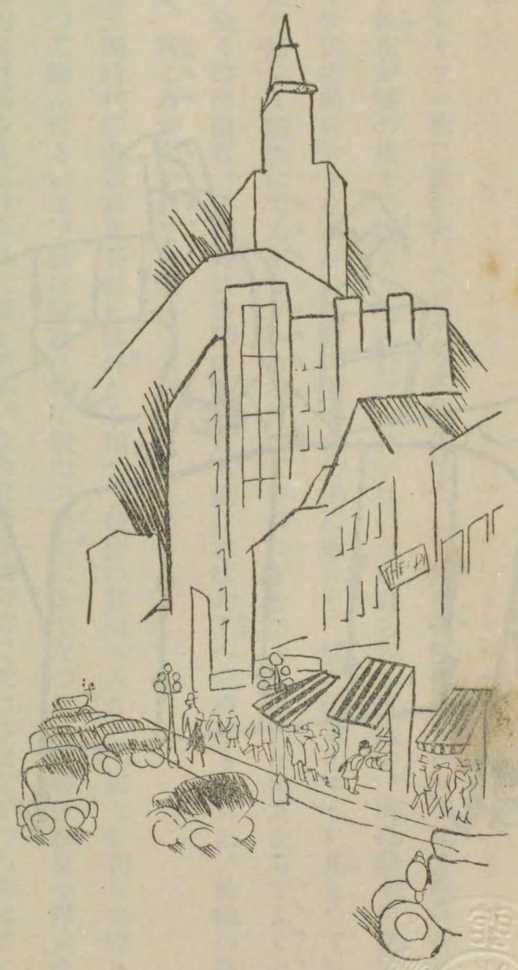
搖籠の中の赤ン坊のやうな氣がした時に、ひよいとお前の事を思ひ出した。今時分は何をして居るだらう。眞面目に俺の事を心配して居るに違ひない。若しさうなら甚だ濟まぬ。眞面目に心配して居るのに、こつちがこんな剽輕な形をして遊んで居たのでは。廢さうかな、然し考へて見るに、俺もお前もあんまり大人になる柄の奴ぢや無い。寧ろ段段、分別臭いところ、利巧なところ、尤もらしいと

ころを振り捨てゝ行つて、お互が理窟無しの赤ン坊交際になつて行きつゝある。赤ン坊が機嫌よく遊んで居る心を若し赤ン坊が知らば共鳴して呉れるに違ひない。面白さに彈みがついて來た。も少し今夜は遊ばう。

今度はシャツ一枚に脫いだ。ベッドの上へ飛び上つた。底に彈機仕掛のベッドは身體の重みに窪み、雪の如き掛布が膝の邊まで快よく喰込む。ベッドは仁王が寢られる位廣い。俺は船中の窮屈さを取返す積りで子供の頰のやうな柔かい毛布の上へ大の字に寢たり、横に海老のやうに屈まつて見たり、それでも足り無くて痛快にでんぐりがへりを打つてやつた。その次は逆に足の方からでんぐりがへりを打つた。全くの自由だ。この時は世間の氣兼ねも無ければお上への遠慮も要らぬ。神樣の存在さへ忘れて居る。狗ころがじやれてる無心さだ。

むかし王朝時代の名畫家鳥羽僧正は外から歸つて自分の部屋へ入ると、何とか判らぬ獨り言をいつて轉け廻つて遊んだといふ。彼は僧職に於て叡山の座主にまでなつた人、隨分役目や浮世の勤めの上で、虛僞的な行爲をも强ひられた事と思ふ。その薫習を繪の方に受けさせなかつたのは彼に轉け廻る一面を有したからである。彼の狂態は冗談や戯れではない。心の眞純、自由を保つ爲めの修養と觀ねばならぬ。人多く世間並といふ。尤もらしい繩に縛られ行き、形骸のみの大人に育ち易い。時には何





とか方法を探つて子供の生一本な心を取り返す修養の必要があるね。

今ふと想ひ出し、鳥羽僧正の事を書き加へて議論めく事まで云つた。それが或は俺のでんぐりがへしの辯護のやうにも當るかも知れぬが、俺は何もこの時そんな立派な意見があつて、そしてでんぐりがへしを打つたのでは無い。ベッドが愉快さに無性に狗ころのやうになつて見たくなつた迄だ。

だがこれはお前にだけそつと知らして置くのだぞ。若し世間が聞いたら俺を馬鹿にするかも知れぬ。

サンドヰッチを喰べて冷めた紅茶を飲んでそれから湯に入つた。西洋の便所は可笑しいね。便器が浴槽の直ぐ鼻先に据ゑ付けてあるのだよ。

◎第十六信

翌朝は疲れの爲め一同寢坊して晝近く朝飯に揃つた。揃ふのを待つ間に表へ出て見度くてたまらなぬ。一人で出て見た。兩側の家の巨きくて立派な事、道を歩く自動車が澤山で速い事、目まぐるしい。新聞賣子が劍突を喰はすやうに呼んで居るのが恐ろしい。道を歩く人の忙しげに速い事。俺は丁度子供が摑まり立ちをする時分、障子の桟を傳つて歩くやうにホテルから家並にぴつたり身體を擦りつけ

歸り途を忘れぬやうよく〳〵見定め、先づ角の處まで行つた。それから一つ曲つた。向うに四つ辻が見える。その邊が繁華の中心らしく、西洋玩具の容れ箱をひつくり返したやうに、又は未來派の繪のやうに。勢ひに壓迫されて向うを見定める事よりも自分を用心する方に心を奪られるのが一ばいだ。危い〳〵。俺は又家の軒並に身を擦りつけ、そろ〳〵とホテルに歸りかけた。陳列窓の中を覗くと、一軒菓子らしいのが並べてある。もとより亞米利加の菓子は形が大きく色が妙で、鑛物の塊りに見え、鑄造細工に見える。一つ一人で買物をして見よう。中を覗くと怖ろしさうな奴も見えない。白い服を着た娘だけだ。俺は勇氣を出して菓子屋の中へ入つた。

◎第十七信

扨、シヤトルのホテルの並びの菓屋の店の内に俺は決心して入つた。白い服を來た脊の高い娘が二人寄つて來た。日本人と見て用心深い目禮をする。俺は硝子箱の硝子の上より指で突ついて、

『これ五十仙』

といつた。それからその隣に並んでる樺色の卵形の菓子を同じく硝子の上より突ついて、

『これ五十仙』

といつた。

すると娘の賣子は笑ひを嚙み乍ら袋に容れて渡して呉れた。金を渡せば、

『サンキユー』

と目禮もする。

先づ米國へ渡つて買物も獨りで出來た。これで度胸も出る。菓子そのものに用は無いのだから、歸つて息子の園藝家に渡すと、樺色の方のは好きなチヨコレートだといつて無闇に喰べた。樺色の汁で唇の周圍が隈取られた。

食堂で朝飯を喰つて一同打揃ひ自動車で見物に出かける。

自動車の速力は迅く瞬く間に郊外へ出た。大體の地勢は丘陵が起伏して居る。丘陵には例のアメリカ松の森林が太古の姿で覆うて居る。その間に介在して大小いろ〳〵の形の入海、湖水が數多く蒼空を映して居る。この儘で置けば今尙アメリカ印度人が矛を舞はし亂舞する面影をも認め得られさう。然るに唐突にも神ながらの丘や森を極めて人爲的に切拓き、赤い屋根の洋館が處々に密集して居る。生え延びた散髪頭に二筋三筋髪刈器を入れた痕の樣にアスファルトの滑らかな道路が敷かれてある。神ながらの湖には入海との間に運河を設け意想外の大船が群を爲して入り繫つて居る。丘や森や、自然過ぎる程自然らしき景色に對し、打算的利己的で征服的な文明の計畫と設置が一途に己れをほしいまゝにして居る。如何にも亞米利加だ。却つて不調和でない。一種新鮮の氣に盈ちた美觀が自動車の速力が操り擴げる窓外の景色に展開して行く。そして總ての景色より高く一萬尺のカスケード山が雲の面巾を纏ひ乍ら白雪の頂をもたげて居る。

湖水の展望に最も都合よきクイン丘に停車して、一行の眺望に便ずる。崖の上のアスファルトの道の埒に設けられた新型の燈柱、それを前景にして繫れる洋船。半、壞たれた丘陵の岬に變形せしもの、湖面の滑らかな綠、而してアメリカ松の森林に腰を纏はれ、斜面に赤屋根の洋館を並べた遠景の丘陵。

一寸矢立の筆を取出し度くなつた。

順り順つて一つの湖水に出た。若くて廢船の運命に逢つた六千噸の洋船が四十三並んでる。戰爭當時必要にて一つ三十六萬弗づゝかけて造つた。船の剩つた今日二千弗づつでなくては引取手が無い。

『なんぼなんでもあんまり廉いぢやありませんか。一艘土產に購つて行つちや』

かう言つた人がある。成程と思つて俺も少し財布の中を胸算用して見た。すると商人側が言つた。

『然し、日本まで持つて行く費用が大變ですよ』

俺は又、成程と思つた。

仕方が無いからこの船等を橋の代りに使はうかと、政府は考へて居るさうだ。と案內者が語つた。

そこでも一つ成程だ。

お晝にホテルへ歸つて晝食だ。みな〳〵手と顏を洗ひ食堂へ出る。食堂へ入る入口に女給仕が居て外套と帽子と預かる。これには十仙か二十仙の心付を遣る定まりだ。見ると側に貰つた銀貨が山のやうに積んである。亞米利加といふところは何の勞働をしても金になると聞くが本當だ。

食堂の中は廣い。それよりも天井の高いに驚く。高い天井から裝飾を凝らした電燈が北國の雪柱のやうに澤山下つて居る。周圍は鷲鼻で眼の窪んで光る異人許りだ。音を立てるとそいつが睨む樣にギ

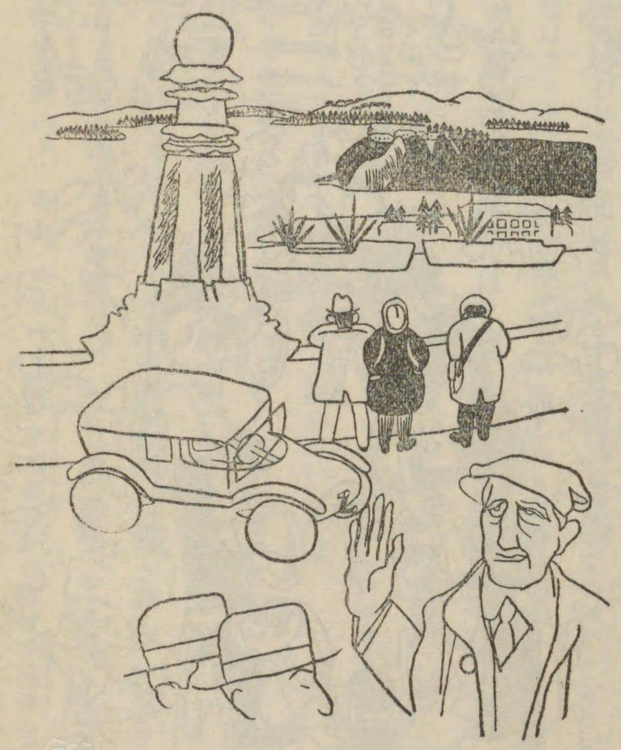
ロリと此方を見る。自づと一同忍び足になる。大きな靴を堂々と音高く引きずり平氣なのは縮緬屋さんだけだ。

一同先生に連れられた生徒のやうにクックの案内人を中心に一つの長卓を取巻く。案内人がナフキンを取るのを見てその通りお膝に置いたお手々を出してみな〳〵ナフキンをチョッキの釦に狹む。先づスープが出る。一升程も入る横長い蓋をした手のついた陶器の容器になみ〳〵とある。これを飲み切る米人の胃の腑の大きさに恐怖を感ずる。然し驚きは次に出たビフテキの大きさには及ばない。これも同じく楕圓形の皿に盛られ、一切れ小形の風呂敷程ある。牛肉の風呂敷だ。さらぬだに胃の腑はスープの洪水に汎濫して居るのにこれを出されては食慾はいよ〳〵委縮する許り。

フォークで刺してブラ下げて見てその長さを互に示し合ひ驚嘆の聲を放つ。それでも喰ふべきものと思ひ一同奮勵努力して食ふ。案内者の米人は、これを見てニヤニヤ笑ひ乍ら、菓子のパイだけで食事を濟す。一食に充て得られる程のパイだから、その大きさも推して知るべしだ。國分寺の古瓦の大きな缺片ほどある。

驚きが先に立ち、ビフテキの美味不味を味ひ分けるまで精神に餘裕がない。

午後再び郊外見物。矢張り湖水があつて丘がある間を縱横無盡にアスファルトの道路上を搬び廻さ



れる。

段々景色に見慣れて同じやうにしか目に移らなくなつて來た。却ってつまらぬものに氣が付ぐ。

西洋の大工が木をひいて居た。ちやんと中折の帽子を冠つてる。のこぎりが日本のと違ふ。

郊外の住宅地はアスファルトの道路を狹んで同じやうな形の木造洋館が幾軒も並んでるあまりに同じ形なので外から歸る時なぞ間違へはせぬかと餘計な心配だ。これ等はバンガローと稱する建築で、貸家も多いが、中にはその專門の會社で廉價に賣出し、購へばほごした木組みを送つて來る。購つた人は附けてある心得書きにより木材に打たれた番號に照し合はせ素人でも巧みに一軒の建物に組立て上げる事が出來るといふ。この式のものも隨分多い相だ。

見るからに輕快で便利さうで、住んで見たくなる。住宅難の日本にも早く生れて欲しいもの丶一つだが多く瓦といふもの丶必要な日本には何れ一と工夫加へねば役立つまい。

これ等の住宅町の住み心地よく見える原因はなほ屋前に道路と並んで設へられた庭園の整備にもよるらしい。それは一面に一種の青草を敷き並べ、眞に綠の毛氈のやうだ。この家かの家の區別はない。一町(こま)續つての家並は毛氈の上にある。それに主婦が草刈器(ローンマシン)をかけ或は水撒器(スプリンクル)を索いたりなどして居るのを見受ける。たゞ家々の好みは一二簡單に植ゑられた植木の相違に認められる丈だ。

説明を訊くと、日本の庭園に當るものはこの前庭であつて、後庭は物干場の如きものに使ふに過ぎない相である。

住居地附近にある野菜店が美しい。窓硝子を碁盤目に仕切り、窓の桟及び店の全體を濁りなき、綠、赤、黃等で塗つてある。それに對して窓硝子を透けて見ゆる野菜や果實の鮮かな色の配合は心を輕くする。窓の前は鉢植の草花、苗木の花で埋もれて居る。雪の如く白いエプロンをかけた店の娘が立現れたところなぞは是非一枚の繪にしたく思ふ。

辻々には必ず自動車のガソリンの供給所がある。店の角にメートル仕掛けの給油柱が建つて居てゴムの管を出して居る。店も或は八角、六角、一寸小亭のやう。給油柱、諸共、目の覺めるやうな色で塗られ　ある。亞米利加趣味の美の一つだ。

水のみ臺が處々に立つて居る。清い水は噴き上げては受ける盤に落つる。別にコップはついてない。行人は噴く水の頭に唇をつけて吸ふのだ。日本では行儀の惡い飲み方であるかも知れぬ。犬を牽いたいたいけ盛りの子供が來て爪立ち乍ら吸うて居る。如何にも可愛い。

◎第十八信

主婦の庭の手入れ　草刈りと水撒き

遂に自動車の中で退屈し出した。俺は心が彈むやうな冗談を喋り度い。

『辰夫。日本で只價の事をロハといふだらう、あの英語知つてるかい』

『知らないよ』

『では教へよう。BCといふのさ』

『はあ。さうかい。僕、今までちつとも知らなかつた。』

『日本のいろははこつちではABCだね』

『さうさ』

『だから、ロハだけならBCぢやないか』

『なんだ洒落か。なんだい〳〵』

ウツドランド公園に入る。動物の檻、運動器具が少し許りあるが、あとは擴大な面積、例のアメリカ松の深い森だ。アメリカ松もこゝのは何れも年數を經たもの許り見上ぐる梢は蒼空に高く抽き樹蔭は深い闇だ。道が無ければ深い森の奥に在るやうだ。漸く平坦な丘の頭へ出た。グリーン湖の碧に逢ふ。程よき崖端に小亭が建つてる。アメリカ少女が發達した長身を飛躍さして綱飛びをやつてる。

小さい森の茂みにお伽話に出て來る樣な鐘樓が現れた。それを廻ると宏壯な建物。ワシントン大學

だ。一方を占めて林業館がある。建物が一寸變つてる。皮付の儘のアメリカ松を粗野に大きく組立てゝある。去る年の博覽會のものをその儘遺してあるのだ相だ。中を見せる。標本の大豆や林檎の大きなもの、まるで怪物だ。熊や剛鹿（トナカイ）の剝製を最も自然に近く造つた背景の中に生きゝとして飾りつけたもの等が興味を引く。

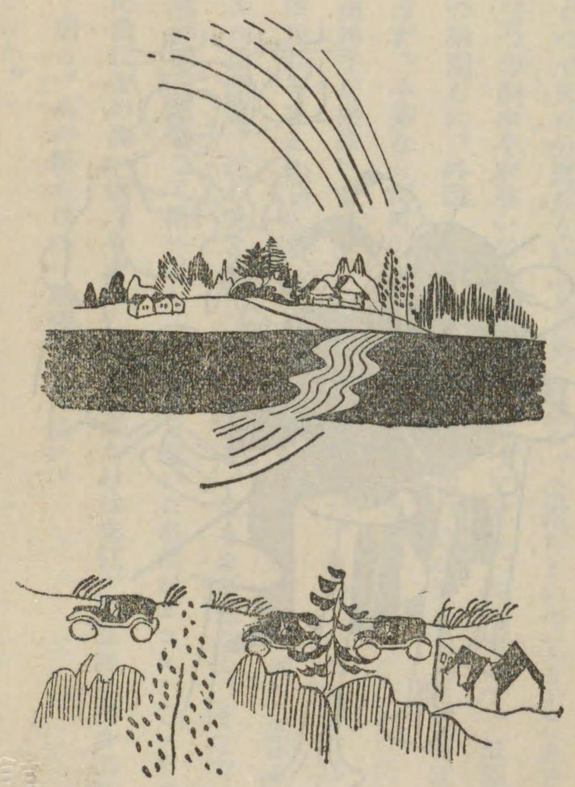
その年輪（ねんりん）を數へると六百六十二年を經て居るといふアメリカ松の大木を輪切りにしてある。幅十フイート。下を穿（く）つて人が通れるやうになつて居る。何れも大きな口を開（ひ）けてあきれ乍ら通つて見る。何でも記念になる事はして置き度いといふのが洋行赤毛布の人情。

大學を出る頃より少雨、湖畔を行く頃晴れて、向うの岸の空に虹（にじ）

『オー、レインボー！』

と案内者が叫び、一同に示す一同感心する。何でも自慢にし度いのが案内者氣質。見せられるものはみな感心するのが見物人氣質。虹は日本も同じ虹だが、レインボーと洋名をつけられると、有難味がつく。たゞこれで一つ學問したのは矢張り西洋でも雨上りに虹の出る事。

ある湖水に船が澤山繋つて居た。これ等は一航海して來て、船底に貝が澤山つく、淡水の湖へ船を引き入れて置くと貝はひとりでに死んで落ちる。若し船渠（ドック）へ入れ、人手を費したなら何千圓の失費を



せねばならぬのをたゞで濟む。俺の洒落を應用すればBCで濟む譯だ。米國は何といつてもこんな自然の便利に惠まれてるからとても並んで他國は太刀打ち出來ぬ。通譯子のこの感慨に十人が十の嘆息。

湖畔をめぐつて又た公園だといふところを通る。公園だといつてもどこまでが公園だか見當がつかぬ。二つや三つの湖水を取卷いて居る。又雨が降つて來た、雨を冒して、母親と少女が春の草を摘んでる。又一つ學問した。外國人も摘草をするといふ事。この邊の山林には春は蕨、秋は松茸が出る。蕗もあるさうだ。牛蒡ならば町の中にまで蔓つてるとの話。

自動車の運轉手が塵除けの硝子に妙な器械を仕掛けた。布のついた棒が右に左に硝子の面を撫でゝ滴りついた雨垂れをひとりでに拂ふのだ。今は景色よりこの方に一同目を瞠る。

漸くホテルへ戻つた。然し晩までには時間がある。日もまだ暮れぬ。そこで、一行中の青年黨の辰夫、息子の園藝家を誘惑して街へ出た。今朝見て置いた事だがカフエーでソーダ水を飲ませる。飲むのに長い臺の前に脊の高い腰かけが竝んでる。腰かけは支柱が餘程高く長身の米人でさへ足を宙にぶら〳〵させて居る。あの腰かけへ一遍乘つて見度い。

それで出かけた。

一軒へ入つた。三人だから氣が強い。首尾よく腰かけへ押上り給仕にソーダを命ずる。味は何がいゝかといふらしい。考へて居るともどかしく思つたか給仕は白銅メツキの並んだ箱を開けて中を示した。それには色々な色のアイスクリームが入つて居る。着色のは不氣味だ。白色のを指すと、『イエース、バニラ』

といつてコツプへ盛り、その上へソーダ水を注ぎ、藁の管をさして呉れた。

目的を達したので三人窃に顔を見合せて笑ひ乍ら飲んだ。冷くてうまかつた。一寸、木臭い香がする、これがバニラだな、又一つ覺えた。

晩餐の食堂は賑かだ。盛裝した婦人携帶の客も殖えた。そのある者は電氣燈煌々たる下に更に美しき燭臺を立て、片隅の卓に瀟洒とやつてる。どう見てもわれ等とは階級が違ふ樣で、どう負惜しみを張つても肩身が狹い氣がする。奏壇に一團の音樂師が出張り、いろ〳〵曲目をやる。船中奏樂中の食事には慣れた積りでも、こゝのは大仕掛けで刺戟が強いから食事が落付かぬ。第一バイオリン彈手が特に前へ出張つて熱心さを見せる氣狂ひじみた身振りも氣になる。一曲終る毎に破るゝ如き拍手を與へては異人は悠々と食つてる。日本人とは食事に對する態度が根本より違ふやうだ。

夜は疲勞れて寢た。

あくる日は休息の一日を與へらるゝ。俺は仕事の時間にあてゝあるのだが、ホテルの外に西洋がすぐあるのだからそは〳〵して落付かぬ。朝食後關西の倉庫會社の專務が買物したいといふのをかこつけに先輩めかして連れて出た。一軒の雜貨店へ入つた。專務は狀袋を買ふ。俺は又の用意に蝶形のネクタイを買ふ。こつちの發音が惡くて通ぜぬ。繪で描いて見せる。俺の竹作りの矢立てが賣子達の目に止まつた、汝は畫家か？　さうだ。ではこのレデーを描いて見ろ。其處に立つて居た勘定係の娘を指した。そして大きな洋紙まで持つて來た。一筆揮つた。

西洋の娘は寫生するといつても日本の女みたいに決して恥かしがらぬ。そして描かれるべく容態振るところが頗る露骨だ。可成り突込んで描いてもサンキユウ〳〵といつて嬉しがる。日本の女は正直に描いてやつても上部では有難うといふが、內心不滿足の樣子はあり〳〵と見える。浮世繪の美人のやうに描いてやりさへすればまあよく肖て居るといふ。日本の女が似顔畫を解するまでにはまだ程餘の年限が必要だ。故に俺は日本では首無し死體の顔と、御婦人の似顔畫とはいくら賴まれても描かぬ事にして居る。

部屋へ入つて仕事を始める。「婦女界」と「母之友」の原稿と勤先の通信と三つある。都河氏も逢ふ度びに書かなくてはといつてるが捗取らぬらしいから萬歲だ。午後になつて又外の西洋が見に行き度